

第1章 序論 舟橋・浮橋とは

第1節 舟橋・浮橋歴史叙述の現状とその背景 —舟橋・浮橋史概論—

これまでの世界史および日本史における舟橋・浮橋に関する歴史叙述は、独立した歴史としてはなく、主として個々の時代の孤立した史書・戦史・軍史もしくは社会文化史の範疇に、散在して組込まれてきた。橋梁史としての浮橋史は、現在に至るまでとくに編年史・技術史・科学史・文化史、さらには経済史・社会史を包括した歴史研究の対象にはされてこなかった。

ルードウィヒ・ベック(Ludwig Beck:1841-1918)は、『技術的・文化史的にみた鉄の歴史(die Geschichte des Eisens in Technischer und Kulturgeschichtlicher Beziehung)』¹の刊行にあたり、その序章の冒頭記述に鉄の歴史の意義について次のように述べている。「鉄の歴史を書くことは冒険である。というのは、第1に今まで書かれたものがないからであり、第2にこうした研究の土台となるべき知識の領域である文化史(Kulturgeschichte)と技術学(Technologie)のふたつが相互に遠く離れているからである。だいたい、この対象についての包括的な研究がなされなかった主要な理由は、技術学の困難さにあった。(後略)」。この指摘については、ベック執筆後100年以上経過した現在、舟橋技術史と文化史とを包括する本論文の浮橋史研究においても、まったく同様の環境条件下にあることが多分の蓋然性においていえるであろう。

わずかに架けられていた民生用の常設浮橋を除いて、浮橋世界史の古代から前近代(early modern)に至るまでの歴史叙述は、各時代個々の遠征・侵略にさいしての戦闘軍団の移動と兵站確保または国防防衛のために架けられた軍用浮橋でほとんど占められている。また一般的に現在までの浮橋の架橋は個別浮橋の断続的記述であり、架橋の時代の推移に伴う同一河川での同じ箇所での舟橋構成技術に関する歴史は、中国黄河の蒲津橋を除いては存在していない。さらに戦闘行為にともなう浮橋の即事移設と分解および破壊は、即浮橋史料の消滅にもつながり中国正史を除いては、この事実が浮橋史に記録性・継続性と普遍性を与えることの困難性を象徴し、また現在存在している浮橋史が文化史および社会経済史と乖離している原因ともなっている。

世界文明の発生の地で脈々たる文化とその発展をはぐくんできた、黄河・長江、インダス川、チグリス・ユーフラテス川、ライン川・ドナウ川流域などの、人類文明の発祥の大動脈であるこれら大河の歴史と浮橋史は無縁ではないが、しかしこれら河川の橋梁史における浮橋史の位置づけはかなり低く、現代史家・橋梁技術者のなかには浮橋の遺跡・遺構の不存在も影響してか、例外的にローマ浮橋を木橋として分類する橋梁史²を除いては、浮橋を橋梁の定義の範疇外として記述している論文・史書・便覧・辞書が多数刊行されている現状である。また内外を問わず、とくに橋梁史の初心者むけ入門書や解説書のたぐいには、史実を曲解して独自の浮橋史をあらたに創造し叙述している例も存在している。

世界最初の浮橋の歴史は、紀元前8世紀ころから10世紀ころの中国の詩経大雅編の浮橋記述に始まる。その後、古代中国では史記をはじめとする紀伝体中国正史やその他の史書・戦記、伝記・文芸・紀行などに多くの浮橋が登場し記録されている。古代オリエントにおける浮橋の歴史は、ヘロドトスの歴史³に記された紀元前514年、アケメネス朝ペルシャのダレイオス大王がスキタイ遠征に際して、ボスポラス海峡に架けた革袋を浮体とする浮橋がその嚆矢である。紀元前8世紀のメソポタミアには浮橋が存在していたとする説⁴もあるが、この歴史は実証されていないしまた今後立証の可能性もひくい。

またオデュッセイが最初の浮橋を架けたとする、全くあり得ない証説が欧米の文献に流布している。この原因と過程は紀元前8世紀ころのホメロスの叙事詩‘Odyssea’⁵第五章(245-250)で、オデュッセイがカリプソの島で造った *οχηδην* (*οχηδία* : raft, pontoon) すなわちいかだの記述が、浮橋の知識に不十分な人々の翻訳・解説の段階でいつしか浮橋(raft bridge, pontoon bridge)に変身していったものと推論される。文明の発展とともに浮体構造もそれぞれに進歩をとげ、歴史時代になると木・竹・草材などを加工した舟やいかだが浮橋に用いられるようになってきた。木材を産出しない乾燥地帯では、豚・牛・羊などの家畜の革袋を川や湖での移手段の浮体として、人類の原始の少なくとも紀元前5000年ころ以前から用い、さらに浮橋にも利用してきたことを否定するこ

とはできない。

紀元前 334 年のペルシヤ遠征に際しアレクサンドロス大王は、ギリシヤで建造した組立式の木造船を陸路輸送は車載でおこない、戦場で帯同した船を用いて軍用舟橋を組立て、あるいは革製行軍テントを囊にして浮体に用いた浮橋を架け、軍隊の渡河作戦を行い戦闘の展開および兵站の確保を確実にした⁶。またカエサルは、内乱記⁷において浮橋の有用性を戦闘描写とともに記録しているが、カエサルがそれ以前に執筆したガリア戦記⁸には浮橋の架橋記録は存在せず、またローマ以降の歴史家がこれらカエサルの軍事浮橋に関する解析を行っていたことはない。しかしガリア戦記に浮橋の記録がないことを理由に、カエサルが軍事浮橋を軽視して対ガリア戦に浮橋を用いなかったと主張すること人は、カエサルの著作を精読していないとしか判断できない。

カエサルは『内乱記』に、ヒスパニアのイレルダの戦いでポンペイウス軍に囲まれ、兵糧・秣も尽きはたときに、シコルス川に緊急架設をおこなった浮橋により危うく窮地を脱した事を記録し、ガリア人の組立式舟の構造の詳細を別途に記録している。カエサルの『ガリア戦記』および『内乱記』を熟読しよく理解することにより、カエサルはガリアでの軍事行動および兵站確保のために、時に応じ浮橋を用いていたことの蓋然性が非常に高いとを判断できる。アメリカのある橋梁技術者は橋梁史に関する著書⁹で、カエサルのライン架橋その他の軍事架橋に関して述べているが、この浮橋についての記述内容は歴史的にまた技術史的に適切とはいえない。たとえばカエサルの架けたラインの橋を、全長を 1300～1600 フィート(400～500m)、幅 40 フィート(12m)、個々の桁長さを 20～25 フィート(6～7.5m)と記述しているが、その史的根拠は示されていない。カエサルのライン架橋に関する記録は、ガリア戦記以外には存在していない。また、エラウエル川(Elaver R.)での木橋を修理してのカエサルの渡河作戦と、著書に示す第 1 次世界大戦の東部戦線ヴィスラ川(Wisla R.)のドイツ帝国陸軍の浮橋渡河作戦との関連性と共通性はきわめて低い。

帝政ローマの初期から、ライン・ドナウの防衛線(limes)の砦とローマ軍団兵站の維持のため、ヒンターラント(hinterland: 後背地)からの兵員・武器・食糧・秣の補給路が確保されていたが、その街道の渡河個所の多くに浮橋を含む橋梁が架けられていたことは、個々の架橋史料での有無にかかわらず紛れのない事実であると考えられる。近年ドイツにおけるこれら補給路の遺跡・遺構および古文書調査が行われるようになり、アーカイブが充足されつつあるがさらに今後の研究成果が期待される。

しかしヘロドトスの歴史叙述に見られるような、古代の浮橋技術史の構成に耐えうる構法・仕様および架橋の実態の一端にふれている浮橋文献資料は、中世・近世においてもきわめてまれであり、また浮橋は古代から草木類を主体として構成されていたため、ごく希少な鑄鉄製や石造の杭・像・礎などの係留設備を除いては、遺物・遺構が存在することはほとんど期待されえない。具体的な構造を示す遺物・遺構と文書史料・指図などがなければ、浮橋史および技術史が現代では存在しえないことは、今日の浮橋史の現況においても自明のことである。特に我が国の橋梁史における土木遺産は、具体的な遺構を有する橋梁遺跡および設計図書を有する近世・現代橋梁を研究対象とするものがほとんどで、現在刊行されている多くの日本土木史¹⁰は古典資料とこれら近世・近代史料とを典拠として成立している。しかし、明治民営有料浮橋を記録する埼玉県・群馬県文書館などが所有する『明治行政文書史料』には、明治時代の初期から営業を行ってきた、利根川水系・荒川水系・千曲川水系および阿武隈川・北上川に架けられていた、個々の多くの有料民間浮橋の架橋と経営の記録は存在している。しかし、これら重要な近代初期の交通行政を示している有料橋に関する行政史料の調査研究は、記録史料の整理のみならずなら行われていない。これらの橋が政府補助になら依存していない民営であり、政府が建設した官橋でない故にこれまで行われず、また橋梁史および橋梁技術史の対象ともされてこなかった。明治の日本橋梁史・交通行政史の根幹の一部を形成している有料浮橋の実態調査は、民営資本による有料橋(賃取橋)なる故にこれまで等閑視されてきた。

これまでの日本土木史は、重大な橋梁史の節目の要点であるこれらの明治民営有料浮橋が、なんらの政府の補助によらない純粹の民間が経営をおこなう有料浮橋であったことを明らかにしていない。現在に至る日本橋梁史に明治民営橋梁経営について調査解析し、言及する史料はこれまで存在していない。世界橋梁史におけると現状と同様に、直近における日本土木史研究論文においても舟橋・浮橋を橋梁と見なさないこの傾向は顕著である。近世東海道橋梁史の論文執筆の典拠資料として、これまでも多くの図書に引用・参考資料とされてきた宿村大概帳¹¹

と分間絵図¹²のみを用い、慶長12年(1607)から宝暦14年(1764)の間に来聘された朝鮮通信使が、10回的美濃路・東海道往復した際に、通計400以上架橋された美濃路・東海道の浮橋を記録する、30数編の朝鮮通信使の使行録¹³にまったく言及していない論文¹⁴が存在する。また最近の土木史研究の方法論¹⁵なども浮橋史を構築する観点からは、橋梁史全般における浮橋の具体的な位置づけに欠けている状況にあると判断する。わずかに阿武隈川の橋梁変遷史の最近の研究¹⁶に、民営明治有料浮橋の松齢橋の一例が取り上げられている。この論文は、管見では最近の土木史での明治有料舟橋のような民橋が調査対象とされる例外的な研究論文といえるが、しかし複数の有料浮橋が調査対象から欠落し、また民営賃貸浮橋の具体的な構法、仕様および企業経営に関する指摘は行われていない。

唐の第6代玄宗皇帝が、紀元724年ごろに黄河の蒲津橋の係留に用い、19世紀末ころの洪水により河畔に埋没されていた、係留用の4体の鉄牛と鉄人および複数の鉄柱・鉄山が、1989年に発掘されたことは、浮橋史にとっては奇跡的ともいふべき重要な考古学上の発見事項であった。唐代の歴史叙述が伝えるこの蒲津橋の係留構法が、いまだ発見されていない鎖を除いて黄河右岸から発掘された係留具一式に如実に示され、具象化が可能となったことは、浮橋史における特記すべき画期的な事件であった。それまでは唐代の史料からは、この歴史的蒲津橋の具体的な係留方法を想定し浮橋技術史を構築することは、遺物・遺構・遺跡を主体とする土木遺産のみに典拠する手法のみでは不可能であった。

アレキサンドロス大王、カエサルおよびスウェーデン王グスタフ・アドルフ¹⁷の戦略・戦術を崇拜し学んだ19世紀のナポレオン皇帝は、近代軍の整備と最新技術の砲工兵隊組織を編成し、軍団の機動力を高めてヨーロッパ大陸諸国を鉄の馬蹄のもとに蹂躪した。ナポレオンは1812年のロシア遠征に際して、最新技術の舟橋工兵隊に鍛冶工作馬車を随伴させ、フランスから馬車輸送を行った浮体専用舟艇を用いた複数の舟橋を侵略路の各河川に架けて、ヨーロッパ諸国から動員した60万人以上の兵員で構成された大陸軍(*La Grande Armée*)のロシア侵攻軍を渡河させている。徹夜での全軍の河川渡河を2日以内に行うには、同一河川において有効幅員6m以上の軍事浮橋が、少なくとも3本は必要とされたと判断するが、具体的な浮橋による渡河方法の手段と経緯は、どの歴史・戦史(Military History)および戦記・従軍記にも記述されていない。

またナポレオン時代の終期には、戦時現地調達「戦争は戦争を養う」の格言は通用しにくい状況下に置かれており、大規模近代戦争における軍団の侵攻・移動およびこれに伴う車馬・武器・弾薬・糧秣・各種装備等の継続供給と急速な展開と兵站線の確保としての軍橋の役割は、グスタフ・アドルフ王の時代よりはるかに重要性を帯びてきていた。もしロシア戦線でナポレオンがやむなく放棄し破壊してきた浮橋を所持していたとすれば、フランス本土での第6次対仏大同盟軍との最終勝利は、我がものであったとするナポレオンの繰り返しが、敗戦後の日記に2度にわたり述べられている。戦略・戦術とその用兵・展開における浮橋の重要性を、近代陸軍戦法の創設者ナポレオンは身をもって実証しエルバ島へ流された。

常に浮橋技術発展の魁となってきた軍用浮橋技術の発達に関して、18世紀から20世紀のイギリス帝国陸軍は、アフリカ・インド・アメリカ大陸・中近東に行った侵略戦争における植民地の確保と経営維持のために、世界最高のすぐれた浮橋技術を有する工兵隊(Corps of Royal Engineers)を、本国軍および植民地軍に組織していた^{18, 19, 20}。18世紀末から19世紀半ばにおけるアメリカ合衆国の軍事浮橋技術は、独立戦争以前からのイギリス本土・植民地軍および当時の軍事技術先進国フランスが保有していた軍事浮橋技術を、主な基盤技術として導入し開発されてきた²¹。独立戦争(1775-83)、米墨戦争(1846-48)および南北戦争(1861-65)の実戦経験を積重ねた米国陸軍の浮橋技術は、90年足らずの短期間で急速な進歩をとげ、フランスの軍用浮橋技術を凌駕し、第一次大戦勃発時にはすでに世界最高峰の域にまで達していた。米墨戦争時には軽量性により運搬・組立施工性に優れ、専用の馬車・牛車搭載の長距離輸送により適している、現場空気膨張式(inflatable)のゴム製囊や木枠キャンバス製の規格化された軽量化浮体を装備した、陸軍工兵団が編成され実戦に従事していた。この軍用浮橋の最新技術は軍事先進諸国間に急速に普及した。

南北戦争で北軍により架けられたこれらの多種多様の浮橋の構法・諸元の詳細史料は、米軍公式記録、軍記および米国各地の南北戦争記念公文書館、博物館、資料館などの史料などから入手できる。しかし、これらの当時の軍事浮橋技術史の全貌を示す、和文翻訳文献の刊行・紹介はこれまで行われていない。鋼製組立舟および船外

機の使用を除いては、20世紀初頭の第2次大戦突入時の旧日本陸軍浮橋技術が、19世後半の米国およびイギリス軍の軍用浮橋技術にハードおよびシステムの両面で卓越している点を、現存する非体系的な旧軍事史資料²²から指摘することはほとんど不可能に近い。昭和12年(1937)7月の盧溝橋事件当時の中国軍—中国国民党軍(国民革命軍)および八路軍(旧紅軍)—の火器・兵器の質と量で評価される軍事力・技術力の水準は、日本陸軍に比較してかなりの低水準であり、かつ浮橋工兵隊は当時の中国では保持されていなかった。日中戦争緒戦の局部的勝利が過大に評価された結果、日本軍の技術力・実戦力すなわち国家総合力の水準と欧米諸国の水準実態の差の解析追求が徹底して行われず、先進国との兵器の質・量および持続的供給能力における、我が国の後進性に関する認識とその実態改善・是正意欲とがなおざりにされ、基本的には総合戦略のオプションに欠けていた²³。第2次大戦敗北に至るまで、軍当局・国会・政府機関によって日本陸軍の総合軍事技術後進性、すなわち日本総合技術の後進性と経済力の貧困性の実態が認識され公開討議されることはなかった。

日中戦争・第二次世界大戦前の日本陸軍浮橋の技術水準は、すでに30トン級の重量車両が通過できる当時一般浮橋用途に実用化され、現在でもその技術が適用されているイギリス軍のベーレー浮橋²⁴に、また機動性が強化されていたナチスドイツの浮橋技術に比較しても、はるかに低い水準にとどまっていたことは否めない事実であるとともに、現代日本における浮橋技術水準もまた、中国に比較しても国際レベルに達していない現状にある。この点に関する具体的で論理的な日本陸軍浮橋技術史の総括評価は、敗戦後60年以上経過した現在でも事実指摘を含めいまだに行われていない。

アドルフ・ヒトラーは、1939年のポーランド侵略にはじまる第2次世界大戦の緒戦において、電撃戦(Blitzkrieg)を展開し、大容量の浮橋を架け戦車隊を主力とする機械化部隊を駆使して、その機動力により近隣ヨーロッパ諸国を蹂躪した。ナポレオン時代の鉄の馬蹄が鉄の履帯へと進化していた、当時のヨーロッパ大陸における一般橋梁の積載強度は、1両30トンクラスの戦車・機甲車・重砲などから構成されるドイツ陸軍機甲師団が渡るにははるかに虚弱であった。ドナウの橋の破壊によりドイツ機甲団の侵攻を阻害できるとする、ユーゴスラビア軍の古典的作戦による防御は、進化し強化されていたナチスドイツの舟橋工兵隊の前には全く無力であり、この4月6日に始まり17日に終結したナチスドイツのユーゴスラビア侵攻は4月戦争と呼ばれた。すでに述べたように近世以降の英国陸軍工兵隊の架橋の歴史は、ヴィクトリア時代からの植民地戦争を含めてほぼ完全に編纂され記録されている。たとえば、BBC Archiveの第二次大戦中の第71工兵連隊の戦歴には、1944年のノルマンディー上陸作戦から45年のエルベ川架橋作戦までに行われた総数22の架橋工事のうちの、12の浮橋架橋作戦が収載されその詳細が記録されている²⁵。ただし、これら一連の英国工兵隊史は浮橋史のなかでも特例的ともいえる。※10/13

正確な浮橋史全般の史料および資料から世界浮橋史を、現代の歴史刊行物の調査から直接得ることは困難である。たとえば、多数刊行されている世界軍事史(World Military History)の大部分は、架橋作戦に関する実態叙述をほとんど有していない。千ページ以上の軍事史が記載されている代表的な軍事史『The Oxford Companion to Military History』²⁶の記述における古今の軍事作戦に用いられたとする軍事浮橋に関する歴史叙述の総量は、半ページ以下を占めるにすぎない。この叙述に採用されている歴史的節目に用いられた軍事舟橋‘**potoon bridge**’の選択およびその評価・解説の内容²⁷には、世界史的な観点からの偏倚が存在していると判断する。古代オリエント史、ギリシャ・ローマ史およびその後裔国を中心にして、独自の歴史観で選択したヨーロッパという限定地域における特定諸国間での、いわばキリスト教徒諸国の私闘の軍事浮橋の歴史抜粋を資料に用いて、世界の浮橋史として叙述していると判断する。すなわち世界史の見地からは、史的にはヨーロッパ内での局地戦争の類の領土世襲権の争いやいわば内輪の宗教戦争に用いられて戦局を左右した浮橋を、世界歴史の節目の代表的な軍事架橋として多く採用している。蒙古軍の迅速な西方侵略に際し、その進路における大河の渡河にどのような手段・作戦が行われていたのか、これら蒙古軍に関する軍事歴史知識と史的立場づけ、なかんずく軍事浮橋技術を、多数存在する現在の西欧主体およびキリスト教史観の世界軍事史から得ることはほとんど困難な状況にある。蒙古軍は南宋への侵略と領土化により世界最高峰の中国浮橋技術を吸収し、すでに大河に敷設する当時世界最高水準の軍事舟橋技術を所有していた。

浮橋史における適切とは認められない、内外を問わず共通したこれら一貫性と主体性を欠く、現代までに編纂・記述された多数の史書・軍事史書・辞書・便覧などの浮橋技術史および関連諸論文の根源には、引用参考とすべ

き正確で適切な世界史としての、浮橋に関する歴史・技術史・文化史および社会史が欠落して歴史史料が存在してこなかったことにあると判断する。紀元前401年にクセノフォンが記述したアナバシス²⁸での浮橋を用いた逃避行およびローマ時代のアッリアノスが記録する、アレクサンドロスの東征における軍事行動史²⁹は、それぞれの浮橋を活用することなくしては成立し得なかったことは史実である。これらの浮橋技術は、現代に至る軍事技術書および史書に全く同じ表現の形式を用いて引用されているが、「河を渡って敵陣の側面・背後を突いて勝利した」的な、渡河手段を無視した軍事史が内外を問わずいまだに横行している。すなわち、古代から軍事作戦・行動における浮橋の活用が戦局の帰趨を左右し歴史を変えてきた事実を、ナポレオンが最終戦闘を前にしてロシア戦線で放棄した浮橋について日記で繰り返し後悔していた事実を、史家は無視もしくは等閑視している場合が多い。

また古代ローマ史に関する比較的多数の文献—特に現在刊行されているローマ軍団の編成および武器の専門書—には、古代軍事浮橋の歴史叙述の単なる転載記述にすぎないも図書が存在している。浮橋に関する技術史・文化史・社会史を含めた、あるいはこれらを統合した専門図書の浮橋技術に関した歴史叙述は、管見ではごく例外の文献³⁰を除いて、多数の類書には管見の限りでは存在していないと判断する。数少ないローマ軍団浮橋に関する架橋記述のそのほとんどは、ローマ市に現存するトラヤヌス帝(Marcus Ulpius Traianus 53?–117)のダキア戦争の戦勝記念柱の最下段に浮彫されているドナウ川の軍事浮橋描写³¹およびアウレリウス帝(Marcus Aurelius Antoninus 121–180)のガリア戦争の戦勝記念柱³²の浮橋浮彫に、その浮橋様式の根拠の主体を依存するものである。

ローマ軍用浮橋に関する論文としては、帝国衰退期の4世紀末に記述された史書³³中に、若干の記述として存在する浮橋材料が主な文献資料であるが、後世の軍事史家はこれ以上の踏み込んだ解析は行っていないし、また現代史家および橋梁技術者がこれらの浮橋史に関して研究論文を発表することもない。

日本軍事史においても中世戦国時代を含めた近世・現代史に、技術史家および戦略・戦術専門家によりこの軍事浮橋の歴史問題に留意した戦略・戦術論が展開されることはなく、古代・中世の軍事物語的な様式による渡河軍事行動の記録が、近・現代における軍事論においても依然として主流であり、軍事作戦行動と兵站確保における橋梁、特に迅速な敵前浮橋架設の約割と効果とを適切に解析して評価を行う軍事浮橋史は存在していない。当然ながら、実戦における軍用浮橋の構造・構法、架橋方法、架橋時間など我が国の土木史・橋梁史・構造物技術史などの論文著作で、浮橋史に関して正確な内容の把握とその論議を行っているものは極めて少ない、というよりほとんど存在していないのが現状である。

日本における浮橋に関する歴史叙述は、奈良時代編纂の日本書紀および古事記にその萌芽がみられ、多分に神話的・伝承的・説話的ではあるが、6世紀半ばごろにはすでに中国渡来の技術による浮橋が架けられていたと判断される。律令国家成立後の697年から791年までの日本史³⁴には具体的な舟橋架橋事例は記録されていないが、万葉集には多数の浮橋が詠まれ古事記および風土記などの伝承記録に、多数の古代浮橋の存在を窺うことができる。日本史書における浮橋の初出は承和2年(835)の太政官符における民生用浮橋の記録であり、この史書には直接戦闘に用いられた軍事作戦用浮橋の記録は掲載されていない。

その後10世紀の平安中期から鎌倉時代初期の公家日記には、天皇、太上天皇(上皇)および太上法皇(法王)の御幸のために、平安京およびその近郊諸河川の大堰川・鴨川・桂川・宇治川・木津川・淀川・船橋川などに、多くの舟橋を架けさせたことが記され、またこれらの浮橋は源氏物語などの多くの物語の背景に登場しているが、浮橋の真景を伝える絵図・絵巻は伝来していない。平安時代初期の御幸の架橋担当部門は臨時職の造橋使などであったと推測されるが、平安中期以降鎌倉時代にかけての御幸の舟橋架橋は、種々の文献からは検非違使が主に担当していたと判断される。しかし、史書の記録にはこの旨が明記されていない。平安時代までの浮橋は、武家階級の台頭した院政時代に平清盛により覆されるまで、天皇階級の専用橋として用いられ他の皇族・貴族階級が専用浮橋を架けることはなかった。

中世時代の四鏡、東鏡などの歴史および軍記物語の合戦場面には、多くの舟橋架橋の場面が登場しているが、舟橋係留構法に関する技術史料としての価値は、13世紀末葉に描かれている一遍上人絵伝³⁵の一枚の富士川舟橋絵図のほうが、鎌倉時代の史料より量においてははるかに劣るけれども、写実的な舟橋係留構法を示し技術史料

の質としては密度の高い情報を示している。鎌倉・室町時代においても軍事架橋技術は口伝書・相伝書の類の機密文書として施工関係者に伝えられて、外部に流出することは希有のことであったと判断され、この機密確保は近世中期から、江戸幕府の綱紀に弛緩が始まる近世中期まで厳格に守られてきた。現代の史家の大多数が論じる古代・中世舟橋の解説または註解の内容は、これら江戸後期天保度以降に流出したと判断される舟橋代官作成・所持の史料および工事請負人の史料を参考としていないため、常套的な「舟橋とは舟を連ね、その上に板を敷いた橋」の域を超えることはほとんどない。

戦国時代の関東地方には、兵員および物資輸送のため多くの舟橋が架けられ、戦国大名は北条家朱印状などに見られるように、舟橋材料の徴収・調達および輸送と舟橋架橋を命ずる印版状・書状³⁶を、一族衆・奉行衆・家臣団や支配地領民に下し、これらの判物が各種の遺文集に編纂され、県史等に翻刻掲載されている。個々の印判書状の内容は、舟橋架橋が軍事機密に属するため極めて簡潔に記され、敷舟を含む竹木・綱縄・筵などの各種架橋材料の仕様および量と調達方法、輸送方法、もしくは集積場所の指示と期限・日時に関するものが大部分であり、舟橋構法の推定を行うためには多くの史料の共通した基準による解析が必要となる。個々の史料からの舟橋構法の推定もしくは同定では、多大の誤謬が生ずる可能性が非常に高いと判断される。またこれらの舟橋の架橋が兵馬の移動のみならず、長期戦の帰趨を左右する兵站に与える影響に関する具体的評価は、史料の比較的豊富な我が国の戦国時代の戦史においてもほとんど行われていない。近年ようやく架橋構成素材に関する個々の史料から、中世の主として軍作戦用浮橋史料の収集と解析同定作業が始まる機運となり、戦国武将の印判状などの個々の断片史料を用いて、関東平野の渡しにおける徒渉に関する研究が行われるようになり、戦国時代の軍事用浮橋の意義に言及する著作³⁷もようやく見られるようになっていく。

江戸初期の将軍上洛の臨時浮橋を除いては、日光社参・小金原の狩猟などの将軍御成舟橋「関東御用舟橋」および朝鮮通信使が美濃路並びに東海道を来聘通行の度に、大井川と興津川を除く美濃路・東海道の主要河川の渡に架けさせていた信使舟橋との、大別して二種類の御用舟橋³⁸が架けられていた。幕府にとっての御用舟橋の位置づけは中世末期戦国時代の軍事舟橋の延長にあり、その構法・仕様・施工に関する記録・情報は、近世初期・中期においても重要軍事機密とされて、老中首座・担当道中奉行・勘定奉行および舟橋代官による厳重な直接管理のもとにおかれていた。さらに享保度以降の現存する栗橋関所記録³⁹には、すべての社参関係の房川渡の管理記録が禁じられ、勘定奉行からは別帳に記録することを命令されていた。また将軍上洛、関東領地視察および狩猟に際して架けられていた御用舟橋の記録 — 初代家康(在職：1603-05)から7代将軍家継(在職：1713-16)に至る将軍御用舟橋の幕府公式記録 — は、徳川実記⁴⁰をふくめた幕府記録には一例外を除いて存在していない。

各種御用舟橋のうち最大の豪華な仕様を有する御用舟橋、すなわち日光道中の栗橋関所の房川渡場に架けられた房川舟橋の構造および架橋費用の概要が、わずかでも判断できる史料は8代将軍吉宗(在職：1716-44)の享保度社参(1728)以降であり、仕様・構造・施工工程・施工方法・諸色単価・費用を記載する史料は、幕府疲弊による財政上の理由による改革が伝統的構法に加えられた天保度房川舟橋および嘉永度の江戸川御鹿狩舟橋のみである。幕府高官から資料を見せられた享保度社参の動員規模、房川舟橋仕様および諸経費に関する断片情報のみが、わずかに平戸藩主松浦静山の随筆⁴¹に記載されており、現代では想像を絶する享保度の豪華な社参房川舟橋の規模・費用を示す数少ない史料の一つとなっている。享保度以前の関東御用舟橋の架橋仕様の記録は、断片すら伝来していない。

社参用房川舟橋の架橋は、2代将軍秀忠にはじまり12代将軍家慶に至る歴代11名の将軍のうち、6名の将軍もしくは世子の社参のときに、延べ19回架けられていたがこれらの舟橋仕様と費用・工事内容の公式記録は不詳であり、計画のみの安永度浮橋の逸散した舟橋担当代官史料の写しと、最後の天保度の社参浮橋請負人の工事関連史料のみが存在し、この二つの史料は江戸御用舟橋技術を伝える貴重資料である。一方、断片的ではあるが比較的多数が存在している享保度浮橋の史料は、史料価値が低いと判断され取り扱いされてきたが、安永度・天保度史料との総合研究に用いることにより、一見無価値の資料でも包括的に用いることによりいわゆる一級史料としての価値が生じてくる。

数万両(約数十億円)もしくは二十万両(約200億円)の巨額の費用を要していたとされる、この不必要に贅を尽くした過剰装備の御用舟橋仕様と施工の詳細は、天保度に行われた最後の社参房川舟橋の施工請負業者の記録⁴²

のみに存在している。

埼玉県史などに翻刻掲載されている近世御用舟橋に関する宿方・村方文書は、一部を除いて郡代・代官の記録の写しによる史料ではなく、社参に関する道中奉行触書のうち、舟橋施工技術とは直接関連のない各村々に割あてられた触書が記載する助郷賦課のなかで、当該村にとっての必要部分の諸色・役務および金納額に関する写文書から主に構成されている。約90の房川舟橋架橋の助郷村々が緊急回覧のため、名主が急いで写したこれらの触書写文書⁴³に記録されている、助郷諸色の仕様・数量・単価および助郷役人足の人工などの記録内容には、写し時の誤記と翻刻・刊行時の誤訳・誤植が多く存在している。したがってこれら資料を引用・参考として後日組みあわせ作成された論文には、現実の浮橋仕様を反映していない記述が存在している。触書写文書の御用舟橋の諸色仕様を同定しその内容を確定する作業は、まずは同一年度の御用舟橋における数種の史料の突合わせによる比較検討を出発点とするが、現在までに行われたことはない。

天保度社参以後に作成されたすべての房川舟橋写絵図・真景図の書入仕様は、実施工の舟橋仕様とは全く乖離した、かわら版⁴⁴に掲載された幕府提供の捏造仕様に基づいている。この偽仕様・偽絵図は、天保度以降明治に至る画師・彫師の転写・模写の繰り返しによってさらに奇怪なものに変貌している。これらかわら版をふくむ絵図史料の各所蔵機関および近世史家は、これらの事実について何も記述してないか、あるいは正しい仕様として誤った叙述を紀要⁴⁵などに発表している。これらかわら版およびこれを元図として写した天保度以降の各種の天保度房川舟橋絵図は、舟橋構法技術史の史料としては骨董価値と反面教師の価値とを除けば、誤謬の解析が的確になされない限り全く有害無益の存在といえよう。

しかしながら、数多く伝世する近世御用舟橋絵図には、景観舟橋絵図を含む多くの捏造絵図とその模写絵図とともに、代官所持もしくは工事請負人が作成した架橋用図・指図類と完工図の原図、正確な写図および舟橋代官系統の様式を引くと判断される模写絵図とが、識別されることなく公開・展示されさらに真贋鑑別を含めた内容の解析および説明なしに県史・橋梁史などに引用掲載され、ほとんどの展示・収蔵機関ではこれら紛い物を本物であるかのように信じているようである。信じているのみであればその影響は外部に及ばないが、これらの誤謬が県史・博物館紀要または自治体等のウェブサイトその他での情報伝達形式で、外部への公表・公開がなされている⁴⁶。舟橋史を構築する立場からは、その影響の弊害を無視することはできないと判断する。現状としてはできるだけ正確な資料の解析を行い、本調査研究結果を浮橋史として早急に公表することが重要であると判断する。

史書の誤記載の例として、埼玉県史近世資料編の口絵には、天保度日光社参の房川舟橋の代表史料として『天保十四年 房川御用舟橋図』（栃木県博物館蔵）が掲載されている。しかしこの口絵は、天保度房川舟橋ではけっしてない。またどの時代の房川舟橋様式でもない。この舟橋絵図の作成目的は、絵図面内の書入れに明確に記してあるように、天保度の房川舟橋および栗橋関所と栗橋宿・中田宿を警護する将軍護衛専任の百人組の配置図であり、この絵図面には「船橋掛図」は別図に示すと明記されている。この警護配置図は、栗橋・中田両宿場の関所を含む町内街路の建屋の配置・名前および百人組の配備が、正確かつ克明に描かれ記入されている非常に貴重な史料であると判断される。しかし、本来の天保度房川舟橋構法を示す絵図でないことは、図の書入がなくても享保度・安永度および天保度房川舟橋様式の知識があるならば、この絵図の舟橋が既知のどの房川御用舟橋様式にも基づかない舟橋であり、さらに天保度舟橋絵図でないことは自明のことである。この絵図は、舟橋代官階級が自らの作業用途のために作成したものではなく、用紙・顔料ともに類を見ない優れた材料を用いた専門の御用絵師の手になる、基調色にウルトラマリン青を用いている細密画であり、執政および道中奉行・勘定奉行などの幕府高級官僚達が行った社参房川舟橋警護の検討もしくは老中首座が将軍に対する社参道中の説明に用いたものと推定されるが、その推理の手がかりはなにも残されていない。

なおこの「船橋掛図」から逸散した史料の一部と判断される、一連の舟橋床版施工を示す短冊の構造仕様図が栃木県博物館に収蔵されているが、これは多数存在している他の御用舟橋絵図の床版構造図には、類をみない特別に精緻な画法による絵図であり、正確に天保度房川舟橋様式を描いた絵図添付の典型的な短冊図であると判断するが、これまで言及されることはなくそのまま収蔵されている。このほかに多数存在している近世御用舟橋の絵図史料の大部分は、これらの相互関連が調査・検討されることなくまた史料として正当に評価されることが少なく、あまつさえ各所に誤用され、これらの事実関係が調査研究されないままに依然として放置されているのが

現状である。

御用舟橋構法および仕様に関する技術資料は、当初から厳重な幕府管理下に置かれていた。特に主要係留索の一つである係留鎖の資料は、多くの史料の中に不完全な記述の数が散在しているのみであり、特例を除いては御用舟橋絵図にも鎖の正確な金輪(リンク)は描かれていない。破損金輪の寸法以外には鎖および金輪の仕様を示す数値は、天保度社参のかわら版に記入されている幕府提供の偽仕様のみ記録されている。関東郡代役所または舟橋代官役所が管理していた御用舟橋史料のうち、安永度社参および文政度社参計画の房川舟橋史料が、天保度舟橋施工請負業者の松伏村名主石川民部に舟橋代官から貸与され、その写史料に安永度御用舟橋の仕様・施工記録および完工報告書(出来形帳)および文政度の計画舟橋仕様が記録されているが、鎖仕様に関する幕府関連の資料は破損金輪の数量と寸法範囲の記録のみである。安永度社参以前の御用舟橋の仕様・施工に関する史料は、享保度舟橋の内容のごく限定された史料を除いてこれまでに発見されていない。

しかし、前述の埼玉県史資料における享保度房川舟橋史料は、舟橋架橋の助郷組合村に課せられた助郷役の舟橋施工と関係のない村方・宿方文書であり、その中の「栗橋御用舟橋之次第」を、これまでどの資料にも記録されていない享保度房川舟橋構法の仕様として記載している。社参道中の道路修理・掃除、諸道具運搬、宿舍設営、炊出などに人馬を提供した助郷村名主の記録のうち、この誤記・誤解の多い御用舟橋次第は、舟橋構法とは全く関係のない名主の享保度舟橋の見学に関する資料部分のみが刊行本に記述されている。この日記文書は石俵礎を土俵礎とした欄干の杉材を松材に勝手に変更し、さらにねこた仕様の橋床構法を「ねこを組ませ敷き」とするなど多数の不条理な文言・文章で構成されている。県史の編纂者・翻刻者は原文のひらがなの「ねこ」の解釈としてなんの根拠もない「根子」の漢字ルビを施し、そのほか恣意的にママのルビを各所に振っている。ルビの施されていない複数の原文の用語の誤謬は、翻刻の段階で論理的に正しいと自動的に判断されることになる。「ねこを」は筵の「ねこた」が正しい翻刻表記である。「た」と翻刻すべき原文の文字を「を」と解釈した、舟橋仕様を理解していない典型的な舟橋文書の誤解と不条理誤訳である。また仮名の翻刻に漢字のルビは前代未聞であり、悪文に念を入れた悪訳の典型が浮橋の近世歴史史料として県史に掲載されている。

判読・校正の不備に加えて、舟橋技術に関する知識に欠ける人たちの関与した舟橋史料に関する翻刻書には、このように当該事項の史実とは何らの関係を有していない、単なる享保度舟橋について述べている見学文書が、享保度舟橋構造仕様の史料として県史に認定され、採用されているような事例はまま見受けられる現象である。これらの公的ともいえる舟橋歴史および構法技術の記述誤謬は、現在早急な抜本的修正の必要に迫られていると考える。まずは公的な刊行物から、歴史判断とともに舟橋様式と架橋技術に関する重要な誤謬を指摘して、修正を施し直すことから新たな舟橋史の構築がなされねばならない。

もう一つの御用舟橋である朝鮮通信使の往還に美濃路・東海道の主要河川に架けられていた、舟橋に関する根本史料は単独では存在せず、少数の断片的な論文史料が発表されているが、総合的で系統的な研究論文に乏しく、信使御用舟橋浮橋通史は現在でも編纂されていない。一部の史料を除いては特に技術資料に関しては、関東御用舟橋よりも遙かに信頼性に乏しい現状にある。江戸に礼聘された通信使のうち、3回の日光社参時の利根川房川舟橋を含め、10回的美濃路・東海道の往還にさいしての約30編の使行録⁴⁷に、概数では160橋程度記録されている信使御用舟橋の架橋歴史は、その総数も記録されずまた架橋通史としても成立していない現状にある。これらの浮橋は日本側の記録にない浮橋も、その大部分が歴代の通信使使行録に記録されている。富士川の信使御用舟橋に関しては、岩本村文書の天和2年(1682)の第7回信使舟橋に始まり明治元年(1868)の東幸舟橋に至る富士川浮橋の仕様・単価・施工に関する膨大な史料⁴⁸が収蔵されているが、現在に至るまで翻刻出版されず、「天和度舟橋絵図」を除いては橋梁史などに引用・参考されることはない。さらに、美濃路の起宿文書には、家光将軍の上洛時と信使舟橋の架設に関する史料および舟橋道具貯蔵庫の棚卸記録文書など貴重な史料が含まれているが、舟橋技術史および材料史の資料として活用されていないし、かつ記録には誤記・誤謬も少なからず存在している。なお、通信使御用に3回架けられていた房川舟橋の架橋記録は、使行録記載を除いては日本史料には存在していない。

朝鮮通信使の起川舟橋の係留杭には松の立木が用いられていたとする、さる専門家の使行録の解釈による説が公表され、専門家の意見として容認されているようであり、これに対する史家の反論はなされていない。立木を

係留杭に用いた記録はどの使行録にも存在していない。また、巨大な浮橋に発生する応力を負担する近世御用舟橋の係留杭（男柱・蛇柱）に、引っ張り横応力にたいして脆弱な松の立木を用いることはあり得ないと断言できる。一つの使行録記録中の漢文用語の意味を誤解した故である。なお、御用舟橋および明治有料舟橋の係留杭に立木を用いた資料は、管見の範囲ではただ一つも存在しない。

さらには中世末、三河地方の松平家中武士団の鉄兵組織が行った戦時架橋に発し、徳川家康・秀忠・家光の3代の将軍が上洛の度に、その道中に架けさせていた近世初期の徳川御用舟橋の架橋技術は、房川渡の日光社参御用舟橋および美濃路・佐屋路・東海道の朝鮮通信使舟橋に適用され、それぞれの地域の固有の浮橋架橋技術としてに定着していったと判断される。しかし江戸中期の社参舟橋は、幕府政権の威力誇示と非現実的な超安全性の確保とを目的として、実用性・機能性をはるかに逸脱したというより、完全に無視した奢侈を極めた非実用的な存在となっていた。

日本浮橋技術における伝統性・時代性・地域性・経済性および地政学的特性が、関東・東海道・美濃路の三地域の御用舟橋舟橋様式の共通性と特殊性・地域性、もしくは特異性に及ぼす影響についての比較調査検討は、現在に至るまでなにも着手されていない状態にある。さらに我が国においては、個々の舟橋についての架橋記録としての史料は存在してはいるものの、正しい史料の理解が得られずこれら史料を誤読・誤解し、あるいは偽造文献・偽造画図資料を浮橋重要史料として採用するなど、歴史意識の欠如もしくは認識なき過失から、文献の誤引用などを含め幾多の弊害が現在生じている。

近世浮橋史において主要な位置を占めている御用舟橋の公式記録のうち、もっとも重要な房川舟橋の幕府による具体的架橋の実体記録の存在は、現在にいたるも確認されていない。徳川実記などにおける徳川将軍の日光社参実施に伴う諸記録は、行事としての社参行程のみが幕府公式史料として記録される。具体的な房川舟橋についての記録は、一例に橋名が記録されているのみで、全く存在していないと云ってよい。すなわち総経費が幕府歳入に匹敵していた、社参経費支出の主要な部分を占めていた房川舟橋の仕様に関しては、享保度社参以前の幕府史料は、将軍社参の行程日時のみを記録するのみで、房川舟橋の建設費用、仕様および施工に関する公式の幕府資料は存在していない。

これまでの古代・中世・近世および明治有料舟橋を通して、舟橋歴史叙述と浮橋用語の解説書・辞書の類が存在せず、浮橋の基本知識を理解するための手段を欠いていることが、専門家においても史料の誤読・誤解をせざるを得ない主要原因の一つであると判断する。これら諸般の事由により博物館紀要などにおけるその所蔵の文書史料・舟橋絵図の解説論文においても、基本的な舟橋技術の理解と用語知識と欠落により、舟橋係留鎖を係留綱とするなど多くの重大な誤謬が生じている。舟橋歴史叙述目的の研究調査と浮橋技術の理解に関しては、従来の各種の土木関連便覧・歴史事典・百科事典・技術用語辞典などでは用をなさないことが多い。特に、近世文書における御用舟橋の係留構法や索具に関する用語法が、それぞれの同一地域の場合でも同じではない場合が多い。むしろこのことが浮橋用語解釈の常態であったとも言え、研究者・専門家の各人各様の理解と解釈が成立している所以でもある。

たとえば近世関東御用舟橋の用語における催合綱は、架橋工事の初期に敷舟の仮配置と整列(アライアンス)を行う目的に用いる綱であるが、その係留綱の端は舟橋の係留杭(男柱)に連結され、橋舟(敷舟)の設置・組立工程が終了して、その位置調整工事の完了後にはそのまま舷側上を引き通した状態で、係留杭に連結され、係留主索である鎖および留綱と機能的には同種の係留機能を有している。明治陸軍工兵操典の用語にも催合綱は中世・近世の係留綱の意で用いられている。しかし、美濃路御用舟橋における催合綱は、仮設工事用として関東御用舟橋と同じ機能を有しているが、その末端は舟橋係留用として兩岸の係留杭(男柱・蛇柱)に結ばれることはなく、橋舟の舷側上にそのまま横たえて静置されるか、兩岸の小杭に仮留され結ばれている。小規模舟橋の例外は認められるが、本質的にはこれら美濃路御用舟橋の催合綱は、係留索の機能をなんら有していないと断定できる。

また東海道御用舟橋の催合綱は、舟橋完成後には兩岸の聖牛・櫓などの仮設係留施設とともに撤去され、舟橋絵図には催合綱は描かれていないことになる。舟橋架橋の係留索・碇の構法や組立施工順序に関する史料は、おのおの分散して記録されているため、御用舟橋構法に関する基盤技術は浮橋技術としての編成は行われていない。このように、御用舟橋における係留構法は、催合綱一つを例としてあげても、このように関東・東海道・美濃路

の3地域における御用舟橋構法は、係留索の相違とともに細部に及んで架橋される地域の伝承技術とともに、河川の特長である地政と流域の政治経済の影響直接受けていると判断されるが、これらに関する研究調査と言及はこれまで何も行われてこなかった。

このように限定された範囲での宿方文書・村方文書と絵図を用いた浮橋史の研究は、技術史の観点から俯瞰的で総合的な手法を用いて、複数の史料による複眼的・俯瞰的な比較検討を行わない限りは、研究者の各人各様の限定された知見により、正確な歴史実態の把握が困難な場合が生じている。場合によってはある程度の推理と洞察を用いて、さらに大胆な仮説の合理的な構築と提案を加えて行うことが必要である。

さらに敷衍して述べれば、これまでに日本浮橋史における構法・仕様の記録は、古代から現代に及ぶ浮橋通史を含めて正確で適切な浮橋技術史が存在していないため、さらには浮橋および関連用語の理解力に乏しいため、原文史料の解説・翻刻の際に基本となる術語の誤解・誤読と独自の判断に基づくと判断される、史実とは異なった内容の翻刻・翻訳・編纂作業により、根本史料である原文の文意・語意が損なわれている場合が多い。具体的一例として、1936年(昭和11)に土木学会編集による「明治以前日本土木史」に採用されている浮橋史は、古代から近世の正確な浮橋通史を述べているものではない。根本史料が存在する近世浮橋に関しても計画のみで架けられることのなかった、それまでの日光社参の房川舟橋仕様とは異なる文政度の社参舟橋計画の仕様を、実際に架けられてきた関東御用舟橋を代表する標準仕様として記述し、全体としても近世浮橋史料の正確な把握が欠如している。また1956年刊行の「明治前日本土木史」が記載する浮橋史の内容も同断であり、近世以前の浮橋史もまた正確な歴史叙述を示していない。

近世浮橋史において主要な位置を占めている御用舟橋の公式記録のうち、もっとも重要な房川舟橋の具体的架橋の実体記録を示す公式幕府史料は、現在においても確認されていない。集約記録自体が存在していたかも不詳である。徳川実記などにおける徳川將軍の日光社参実施に伴う記録は、行事としての社参行程のみが幕府公式史料として記録され、具体的な房川船橋については、一例の架橋存在の記録が行われているのみに過ぎない。すなわち、幕府歳入に相当すると判断されている、社参経費支出の主要な部分を占めていた房川舟橋仕様に関しては、享保度社参以前の幕府史料は、將軍社参の行程日時のみを記録するのみで、房川舟橋架橋の有無、建設費用、仕様および施工に関する公式の幕府資料は一切存在していない。

1930年(昭和5年)に日本工業會により編纂された『明治工業史 第2巻 土木編』には、半ページの浮橋関連の記載内容に明治浮橋の一部が紹介されているが、この明治時代の浮橋が官橋ではなく民営による有料浮橋であった事実は、浮橋史における重要な基本的事項であるにもかかわらず、この著作ではまったく記述されていない。また31橋と記述している明治浮橋は実際には200近くが架橋され、これら明治民営有料浮橋は、建設・経営の主体が示されない限りは政府が架設を行った官橋であると、一般には自動的に誤認識させられることになる。これらの明治工業史・土木編の浮橋記述は、部分的な記録については正確ではあるが、全体として不正確で史実を明らかにしていない。民営の明治有料浮橋の歴史記述は、官による民業の無視を意図的に行ったものと判断されても仕方がない。問題は、これらの同様の誤謬が現代の刊行文献においても、訂正されることがなく追従する傾向が顕著に認められ、あまりにも多くの誤った解釈あるいは誤解を招く記述がいまだに通用していることにある。この工業史は現在、多くの橋梁史にそのまま或いは形を変えて出版されている。

舟橋・浮橋を橋梁の範疇とする世界橋梁史家は少数派に属し、直近の日本土木史研究論文においてもこの傾向は顕著に継続している。近世東海道橋梁史の論文執筆の根本史料の典拠資料として、これまでも多くの図書に引用・参考資料とされてきた宿村大概帳¹¹と分間絵図¹²のみを用い、慶長12年(1607)から宝暦14年(1764)の間に来聘された朝鮮通信使が、10回的美濃路・東海道を往復した際に400回以上架橋された美濃路・東海道の浮橋を記録する、30数編の朝鮮通信使の使行録¹³にまったく言及していない論文¹⁴が存在している。また最近の土木史研究の方法論¹⁵なども浮橋史を構築する観点からは、橋梁史全般における浮橋の具体的な位置づけに欠けている状況にあると判断する。わずかに阿武隈川の橋梁変遷史の最近の研究¹⁶に、民営明治有料浮橋の松齡橋の一例が取り上げられている。この論文は、管見では最近の土木史での明治有料舟橋のような民橋が、調査対象とされる例外的な研究論文といえる。しかし複数の有料浮橋が調査対象から欠落し、また民営賃貸浮橋の具体的な構法、仕様および企業経営に関する指摘は行われていない。

このように、我が国においては個々の舟橋についての架橋記録としての史料は多く存在はし、多くの解説も行われているが、大部分は正しい史料の理解と判断に基づく歴史叙述とは言い難い。史料の誤読や偽造文献・偽造絵図資料が浮橋重要史料として判断され採用されるなど、歴史的意識の欠如もしくは認識なき過失から、誤った文献資料として刊行されている。

明治有料舟橋の構法技術は技術史的にみて海外技術の導入ではなく、日本近世の三大浮橋に、特に神通川舟橋の架橋技術に学んでいることは、実態の近世史料の検討からも明らかである。江戸時代の各藩が設置していた常用舟橋よりも非常に高額な、少なくとも概算5万両(時価約50億円)を浪費した仮設江戸御用房川舟橋は、江戸時代の常用浮橋の概略20倍程度以上の費用を要した過剰装備の御用舟橋技術の明治有料舟橋への導入は、経済性の見地からも当然行われることはなかった。なお、荒川の川口渡り祭りで祭期間中に一時期架けられた仮舟橋の建設費用は、房川舟橋の0.5%の250両(時価2千5百万円)を要したことが史料に記録されている。浪費とする所以は、御用舟橋の構築技術が幕府の権力維持の手段のみであり、明治時代の浮橋架設に何らの技術上の寄与がなかったことにある。

経済的に乏しかった明治の有料舟橋経営者は、ある程度は洪水で橋が流出することを予測した、最小限の耐力をもつ費用効率の非常に高い舟橋構法を考案し施工し経営した。さらに、河川堤防の整備と馬車運送の発達、特に乗合馬車企業の興隆、さらにはバス交通の普及にとともに走行安全を目的とした浮橋の改良、特に護岸堤防上の取付道路からの浮橋床版への急勾配を避けるためと、河川運輸業者・筏業者との軋轢を避けるため、浮体の上に橋脚を乗せて桁下を舟・イカダの自由航行が可能となる高架舟橋が、明治の日本技術者により考案され、これらの高架浮橋は費用対効果の高い有料舟橋として、荒川・利根川・北上川・千曲川など、河川交通が盛んに行われていた大河に多数架けられていた。明治有料舟橋の日本固有の舟橋技術として特記すべき、舟橋技術史における重要な浮橋技術の開発事項である。

これまでに述べたように我が国で独自に開発され、かつ経済性に優れた明治有料舟橋の固有技術の評価は、経営評価とともにこれまでに行われることはなかった。明治浮橋のほとんどを占める有料浮橋については、これらの舟橋の建設・経営のほとんどすべてに対し、政府投資および補助金が投入されることのない純然たる民営有料舟橋であった重要な史実は、無視されて記述されず、また累積欠損はすべて会社破綻時に経営者が負担するしかなかった。すでに昭和初期には明治舟橋知識の大方は、行政府および土木学会および土木技術者の念頭からも払拭されていた。日本の浮橋経営者が参考としていた先行して行われていた、アメリカ合衆国の西漸運動にとともに発展していた、民営有料浮橋の歴史資料の大部分は今日米国政府や公的アーカイブによってされ、浮橋歴史の研究史料の対象とされてきているが、これの歴史文献が我が国に紹介され、研究されることもない。

従って今日における明治民営有料舟橋の歴史叙述は、投下資本の種類と金額、企業経営主体と経営形態・企業経営の解析と評価のみならず、浮体を含めた構法の技術史的検討もまた当然行われてこなかった。さらに、埼玉県明治行政文書に包含されている、明治政府内務省が定めた民営浮橋の営業許可基準を示す布達「命令書」およびこれらの「草案」に始まる歴史的変遷に関する史料は、明治道路・橋梁行政の史料としても重要資料であると判断する。現在に至るまでこの重要史料の翻刻刊行と総合的解析検討が実行されず、明治有料舟橋の史的価値に関する論考はなにも行われてこなかったことが、明治橋梁史をあらたに構築する作業上での大きな阻害要因の一つとなっている。

旧幕藩体制の技術・制度を伝承して発足した明治初期の日本帝国陸軍は、黒鉄・鉄兵と称されていた工兵を各鎮台に配属し工兵隊を創設した。次いで近衛連隊に規範となる工兵隊が編成され、近代軍用浮橋技術は、主としてフランス工兵技術将校により転移された。西南の役の田原坂に最初の陸軍浮橋⁴⁹が架けられた。その後の戦闘における陸軍工兵隊の浮橋架橋史は、特有の軍機保護のため詳細公開資料に乏しく、未だに系統だった史料による歴史が編纂されたことはない。実戦の浮橋架橋の断片的な記録は日清・日露戦争の一部の記録などに存在するが、具体的な浮橋構造と架橋技術の細部を記録するものはなく、戦闘記録に架橋事実の記載があるのみである。日清戦争から第2次世界大戦終結に至る間の日本軍事史には、実戦に用いられた軍用浮橋の公式記録は存在していない。中国大陸における第2次世界大戦中の日本陸軍の浮橋公式架橋記録は、米陸軍航空軍(U.S.Army Air Forces)の戦闘記録⁵⁰の中国戦線(China Theater)での攻撃目標を除いては存在していない。また公開されてい

る日本陸軍浮橋の様詳細は、大正時代までの各年代の工兵操典に記載されているが、公式の陸軍浮橋史は編纂されていない。日本帝国陸軍の工兵隊の公式記録資料は、第2次世界大戦の敗戦によりそのたの軍事史料とともに、そのほとんどが焼却・廃棄処分され、現在でも系統的な工兵操典および工兵隊史は編纂されていない。

現在の一般の浮橋最新技術も国際的な総合的水準の評価では劣勢であると考えられ、海外への浮橋および関連技術の輸出は、途上国への無償援助でない限りは困難な状態である。

古来、中国・ローマの例を引くまでもなく、近代の戦闘行為における軍事技術の水準と効率は、格段の進化を遂げ現在においてもとどまることはない。特に、18世紀半ばからのヨーロッパ先進国の侵略行為と植民地維持のため、アフリカ・中近東・インド・南北アメリカ大陸の侵攻軍および駐屯軍における工兵隊の整備が顕著であった。米国工兵隊の准将軍は、南北戦争の最中にこれら軍事先進国の最新軍事浮橋につきて、特に英国のインド植民地軍の最新浮橋装備と米国で新たな開発がおこなわれ米軍に配備されていた、ゴム浮体を用いた世界最初の軍事浮橋に関する詳細記録を記載した軍事浮橋史⁵¹を出版している。

ヨーロッパ近世浮橋史叙述の傾向は、基本的には日本の場合とほぼ同じである。しかし、日本の近世に該当する欧米の前近代(early modern)の舟橋技術は、科学技術・軍事技術の水準と国力とに連動して発達し、その成果が民生技術に還元適用されるととも、さらに植民地政策・軍事支援や輸出産業に利用されてきた。しかし、古代からの伝統技術を基盤として、現在にまで発展してきている舟橋・浮橋の世界史、特に厳格な意味での技術史はいまだ編成されていないと言える。また舟橋・浮橋の架橋史、なにかんづく技術史としての浮橋史には、統一された視点での包括的・俯瞰的な叙述がなく、普遍性・継続性・統合性を見地からも世界史としては着手できていないと判断する。また個々の資料としては一見末梢的ともみえるが、実際には浮橋歴史の重要な構成要素についての記録が無視され、結果としての基本的・構造的な誤りがしばしば記述されてきたが、これらの指摘と是正が行われたことはない。

また、これまでに存在する浮橋についての歴史叙述は、技術史的検討の対象外であるとされてきた。特に浮橋の浮体とその係留方法・構法仕様および構成材料の種類・性質・品質・経済性の歴史の変遷を叙述する技術史は存在していない。古代繊維・布に関する専門歴史家の著作⁵²に、葎綱が登場することはほとんどない。さらに近世・近代の浮橋史料の量および質の豊富さに比べ、橋梁史や県史の交通・橋梁編での、浮橋に関する正確な史料に関する適切な記述に乏しい現状にある。特に日本の近世および近代明治初期の浮橋には、世界浮橋史としてすぐれた史料が存在しているが、現在まで総括的で系統的な調査検討が行われてきていない。その重要な史料の大部分は翻刻すら行われず、一部の史料が写影資料として公開されているに過ぎない。

浮橋史の記述内容は、おおくの内外の橋梁史・土木工学ハンドブック・構造物技術史・軍事史・軍事技術史において、浮橋に関する記述を有する著作が極めて少ないか、あっても断片的であり通史としての内容・体裁にもかけ引用・参考文献が明確でなく、さらに誤記述を重ねる例が多いのが現状である。典型的な例として土木学会が昭和4年(1929)に刊行した明治以前の土木史には、社参舟橋の例として実際には建造されなかった、文政度房川舟橋の計画仕様を引用している。当然引用文献も掲載されていない。

かつて浮橋が架けるけられていた個所には、これにちなむ地名が多く存在していた。我が国においても明治以前には舟橋に由来する町名および村・大字(大名)・小字(小名)が数多く存在していた。明治の近代化発進以降現在に至る市町村合併により、これらの地名が急速に失われていく趨勢にある。舟橋史との関連における舟橋・船橋の地名およびその由来の記録と統合的・地政学的な解析は、浮橋史の研究だけではなく歴史・地方史・文化史・地政学史の研究においては、等閑視できない事項であり、船橋架橋史に関係するこれら地名の由来と伝承の歴史は、調査研究を行い浮橋史の一端に加える必要がある。しかし、日本以外の東アジアの中国・朝鮮における浮橋関連の地名は少なく、その他の欧米諸国では、ほとんどその名を見ることはない。

このように現在流布している、誤って理解されて記載されている浮橋史が、与えている諸弊害の除去のためにも、その是正を現在可能な範囲で急速に行う必要に迫られている。すなわち、日本浮橋史構築に必要な資料が存在する近世および現代の日本浮橋の場合には、明治行政文書および古文書の各浮橋仕様・構法の解析と絵図による構法技術の解析結果とを系統的・総合的に補完活用して、より正しい時代、用途および架橋河川別の舟橋構法様式の同定と仕様・構法の調査検討を行い、使用材料を含めた技術史の基盤編成が必要となる。

注 第1章 第1節

- 1 『鉄の歴史 第3巻第1分冊、ルードウイヒ・ベック著、中沢護人訳』（たたら書房、1968年）
- 2 ‘Roman Bridges, Colin O’connor’Cambridge University Press 1993
- 3 『歴史、ヘロドトス著、青木巖訳』（新潮社、1968年）
- 4 ‘Man The Builder: An Illustrated History of Civil Engineering, J.P.M.Pannel, London Thomas and Hudson 1977, Reprinted
- 5‘The Odyssey,Homer,translated by A.T.Murray, London Harvard University Press 1960’ [Greek text with English translation on opposite pages]
- 6 『アレクサンドロス大王東征記：付インド誌、上、下巻、アッリアノス著、大牟田章訳』（岩波書店、2001年）
- 7 『内乱記、カエサル著、國原吉之助訳』（講談社、1996年）
- 8 『ガリア戦記、カエサル著、近山金次訳』（岩波書店、1956年）
- 9 『歴史と伝説に見る橋、Wilbur J.Watson, Sara Ruth Watson著、川田貞子訳』（建設図書、1986年）
‘Bridges in History and Legend by Wilbur J.Watson, Sara Ruth Watson, J. H. Jansen, 1937
- 10 日本土木史文献
『明治工業史 土木篇、工学会・啓明会編』（工学会、1929年）
『明治以前日本土木史、土木学会編』（土木学会、1936年）
『明治前日本土木史、日本科学史刊行会編』（日本学術振興会、1956年）
『日本土木史 大正元年～昭和15年、土木学会編』（土木学会、1965年）
『日本土木史 昭和16年～昭和40年、土木学会編』（土木学会、1973年）
『土木工学ハンドブック I・II、土木学会編』（技報堂出版、1989年）
- 11 『近世交通史料集 4 東海道宿村大概帳、5 中山道宿村大概帳、6 日光・奥州・甲州道中宿村大概帳、児玉幸多編』（吉川弘文館、1967-72）【原本 通信総合博物館蔵：文政度から天保度（1840から50年代）にかけて道中奉行所により調査編纂】
全53冊の宿村大概帳に記載されている渡しの舟橋は、中山道武佐宿（滋賀県近江八幡市）の橋のみである。
- 12 『東海道分間絵図、遠近道印作、菱川師宣画、古板江戸図集成刊行会編』（中央公論社美術出版、1960）【元禄3年（1690）刊行の映本 上 江戸日本橋より天竜川まで 下 中の町より三条大橋まで】：文化3年（1806）道中奉行所 が五街道沿線の1/1800の縮尺絵図を3部作成。
- 13 『大朝鮮通信使 第1巻（慶長度・元和度・寛永度）～第7巻（宝暦度）、辛基秀、仲尾宏責任編集』（明石書店、1993年-96年）
- 14 『神奈川県下における近世東海道の橋梁について、伊東孝、斉藤司、伊東孝祐著』（土木史研究 論文集 Vol.24 20051年）
- 15 『土木史研究の方法論についての一考察、馬場俊介、二宮公紀、三島康生著』（第9回日本土木史研究発表会論文集 1989年6月）
- 16 『阿武隈川沿川における橋梁の変遷に関する研究、堀部太郎、藤田龍之、友野泰明著』（土木史研究 論文集 第17号 1997年）
- 17 グスタフ・アドルフ（Gustav Adorf II、1594-1632：在位1611-32）は、三十年戦争（1618-48）に介入し、1632年ドイツで戦死。グスタフ王の戦術は、近代的な火力と展開に浮橋を戦闘に駆使した近代戦の嚆矢とされる。
- 18 ‘Corps History : Royal Engineering Museum History Section Part1~Part20 (Part 1 King’s Engineers and Skilled Levies(1066-1346)~Part 20 The Corps of the Imperial rundown(1945-1994)’
[www.remuseum.org.uk/corpshistory/rem_corps_part1~part20]
- 19 ‘The History of the Royal Engineers Volumes 1-6、 W.Baker Brown,’ Institution of Royal Engineers
- 20 ‘The History of the Royal Engineers、 Whitwooth Porter,’ Longmans, Green 1889
[Google:American Libraries]

21 'Systems of Military Bridges In Use By The United States Army: Those Adapted By The Great European Powers, And Such As Are Employed In British India. Brig.-Gen. Gerge Washington Cullum' D.Van Nostrand 1863

[【books.google.co.jp/books?id=NC0pAAAAYAA】](https://books.google.co.jp/books?id=NC0pAAAAYAA)

【刊行本 Kessinger Publishing Jan. 2010】

22 明治中期までの工兵操典は、フランス工兵争点の翻訳。大正～昭和初期には英国・米国の最新浮橋技術の導入。

23 注 19 に同じ

24 'Royal Engineers Museum·Article· Military Bridging : Mid-20th Century Military Bridging (1920's-1945)'

[【remuseum.org.uk/articles/rem_article_bridges.htm】](http://remuseum.org.uk/articles/rem_article_bridges.htm)

25 'BBC ·WWW2 People's War [An archive of World War Two memories-written by public,gathered by the BBC]

Bridges built by 71st Field Company Royal Enbineers.

[【bbc.co.uk/ww2peopleswar/stories/90/a781290.shtml】](http://bbc.co.uk/ww2peopleswar/stories/90/a781290.shtml)

26 'The Oxford companion to military history, Richard Holmes' Oxford University Press 2001

27 上記文献の Pontoon の項の原文引用 pp.731-732

Pntoon Bridge :

This is a number one of obstacle-crossing devices employed by military engineering. Probably the largest military pontoon bridge ever constructed was used by Xerxes to cross the Hellespont in 480 BC on the way to his ill-fated invasion of Greece. The Greek historian Herodotus described 676 ships anchored and moored together in parallel lines, with a wooden roadway laid over them. Alexander 'The Great' is said to have crossed the Oxus on a bridge laid over floats, but his usual technique was to use rafts. The Romans were great bridge builders and twice used the technique to cross the Rhine. In more modern times, Gonzálo Fernández de Córdoba used pontoons to outflank the French on the Garigliano river in 1503, and the fact it was his skill in installing them quickly and secretly that was commented upon suggests that the technique itself was well known.

The first use of what we now call a pontoon bridge, namely the assembly of prehabricated parts specifically accompanying the army for the purpose, was by Gustavus Adolphus in 1632 when he had a 109 yard (100metre) bridge constructed across a river near the villege of Rain in Bavaria, allowing his army to cross supported by artillery fire and a screen of smoke. The technique was widely copied and the French gave it the name c.1676. It consisted of stretching a cable across the obstacle and attaching flat bottomed boat-like pontoons to it one after another and poling them across, then laying a roadway across them with timber beams. Military engineers would choose the site, but specialist known in the British army as 'tin' boatmen' because of the metal sheathing of the pontoons would construct it. The floats themselves accompanied the army on a train of wagons and were 17-20 feet(5.2-6.1 metres) long.

At the end of Napoleon's disastrous Russian Campaign of 1812, a careless order resulted in the destruction of the retreating army's pontoons, requiring his engineers to built bridge across the Berezina from demolished houses. It required a prodigious display of courage and skill, plus more good luck than anyone had a right to pray for, to save the remains of the Grand Armée from annihilation. Fifty years later measure the Channels they would have to float down resulted in a three week delay in the arrival of pontoons. Burnside's plan a surprise crossing of the Rappahannock: he went ahead anyway and his engineers somehow bridged the river in the face of a well-prepared defence. It would have been better for the Union army if they had failed, as the ensuing battle of Fredericksburg.

One of the most successful version of the pontoon bridge was the 'Birago' bridge (1841), named after its inventor. It consisted of two pontoons that could be carried on trucks with all other equipment necessary for its construction. It was introduced into the all German-speaking armies, and was the basic design for all subsequent military bridging until WWII. Although WWII saw the introduction of the Bailey Bridge and mechanized bridgelayers for shorter spans, an invading army once more crossed the Rhine on pontoon bridges in 1945. Like all good designs, it is simple and flexible and refuses to grow old.

28 『アナバシス：キュロス王子の反乱・ギリシャ兵一万の遠征、クセノホン著、松平千秋訳』（筑摩書房、1985年）

- 29 ‘The invasion of India by Alexander the Great as described by Arrian, Q. Cartius, Diodros, Plutarch and Justin ; being translations of such portion of the works of these and other classical authors as describe Alexander’s campains in Afganistan, the Panjab, Shindh, Gedrosia, and Karmania. With an introd. containing a life of Alexander. By M’Crindle, John Watson’New York, Barnes & Nobel, 1969 【This ed. First published in 1896】
- 30 ‘The Roman Army — A Social & Institutional History by Pat Southern,’Oxford University Press, 2007
- 31 ‘Die Reliefs Trajanssaule C.Cicorius,’ Berlin, 1886-1900
- 32 ‘La Colonna di Marco Aurelio —The Column of Marcus Aurelius Coarelli Pillipo,’ Paterson H. 2008
- 33 ‘The Military Institutions of the Romans (De Re Millitari), Book III Dispositions for Action : Passages of River, by Furavius Vegetius Renuatus, Translated from Latin by Lieutenant John Clark [Text written in 390 AD. British transeletion published in 1767] ‘
www.pw.ntnu.no/~madsb/home/war/vegetius/】
- 34 『日本後記、続日本紀、日本文徳天皇実録、黒板勝美編、国史大系編修会編』（吉川弘文館、1966年）
『訓読続日本紀、藤原継縄〔ほか撰〕、今泉忠義訳』（臨川書店、1986年）
- 35 『一遍上人絵伝 全12巻（48場面）、法眼円伊画』1299年〔神奈川県清浄光寺および京都歡喜寺 所蔵〕
『一遍上人絵伝別巻、小松茂美編：日本絵巻大成』（中央公論社、1978年）
- 36 朱印状・墨印状は戦国時代の領主が、武将・配下・領民などに指示・許可の目的で発給した正式の命令書状。花押・署名の代わりに朱印・墨印を押したので印判状ともいわれる。
- 37 『軍需物資からみた戦国合戦、盛本昌弘著』（洋泉社、2008年）
- 38 「御用舟橋」：徳川幕府財政支出により架けられた一般用橋梁の「御入用橋」に対応する用語として定めた。徳川将軍とこれに準ずる者および朝鮮通信使一行の渡河のために架けられた臨時浮橋。建前としては官橋であるが、江戸初期を除いて費用の大部分は宿方（3割）・村方助郷（7割）が負担した。
- 39 『足立家文書 御関所御用諸記 栗橋関所史料一・二（埼玉県史料叢書13上・下）』（埼玉県、2002—03年）
御用諸記には文政度社参計画と享保度・安永度および天保度の3回の社参に関する資料は、舟橋担当代官の達しにより別帳に記録する旨が、これらの社参のたびに反復記入されている
- 40 『徳川実紀：国史大系 第38巻—47巻、黒板勝美、国史大系編集会編』（吉川弘文館、1964—77年）
「東照宮（徳川家康）御実紀」～「浚明院（徳川家治）御実紀」
『続徳川実紀：国史大系 第48巻—52巻、黒板勝美、国史大系編集会編』（吉川弘文館、1964—77年）
「文恭院（徳川家斉）御実紀」～「慶喜公（徳川慶喜）御実紀」
- 41 『甲子夜話1—6、松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂』（平凡社、1982—83年）
- 42 『石川民部家文書 松伏町史資料 第十六集』（松伏町、2000年）
「十八 天保十三年五月 栗橋中田船橋御用ニ付書留 一冊」、「二八 天保十三年七月 乍恐以書付奉申上候（檜網入用代金内借願）」、「二九 天保十三年八月 房川渡御船橋御入用金請払帳 一冊」、「三四 天保十三年八月〔網打場決定〕」、「三九 天保十三年十月〔檜網見分予告〕」、「四六 天保十三年十一月 乍恐以書付奉申上候（宿継駄賃御定賃銭願）」、「六三 天保十三年十一月 日光御調方御触書写」、「六七 天保十三年十一月 野帳（房川渡御船橋御普請御取懸り日記）一冊」、「七十 天保十三年十一月 日光道中房川渡御船橋諸色帳 一冊」、「七二 天保十三年十一月 房川渡御船橋御入用諸払帳 一冊」、「七三 天保十三年十一月 房川渡御船橋御普請中日記録 一冊」、「八二 天保十三年 御船橋御用留 一冊」、「一〇五 天保十四年正月 房川渡御船橋并前後道繕仕様早見 一冊」、「一〇六 天保十四年正月 御船橋日記 一冊」、「一八八 天保十四年四月 房川渡御船橋掛渡方其外御普請出来形帳 一冊」
- 43 『新編埼玉県史 資料編15 近世6 交通 第3部 臨時大通行第1章 日光社参』（埼玉県、1984年）
「二九〇 触諸書（抄）日光社参の寄人馬 栗橋御舟橋之次第 享保十三年（1728）」
「二九一 埼玉郡小久喜村日光社参御用渡留書 安永五年（1776）三月」
「二九四 大門宿日光社参御用留 文政七年（1824）閏八月」
- 44 『天保度社参かわら版』
「天保度社参かわら版 房川舟橋図（a-1）」江戸東京博物館蔵

- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (a-2)」船橋市西図書館蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (b-1)」東京大学社会情報研究所蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (b-2)」船橋市西図書館蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (b-3)」埼玉県立文書館蔵
- 「天保度社参かわら版用房川舟橋図原画 六面」埼玉県松伏町教育委員会蔵
- 「天保度社参かわら版用房川舟橋図書入舟橋仕様原稿 二面」埼玉県松伏町教育委員会蔵
- 45 『「房川船橋絵図」について、新井浩文著』（埼玉県立博物館紀要 16 埼玉県立博物館、1990 年）
- 46 『石川民部家文書：松伏町史 資料第十六集』（松伏町、2000 年）
- 「二 安永五年三月 日光御社参ニ付御触書拜見印形帳 一冊」、「九 安永五年三月 日光御社参御行列 一冊」、「十一 安永五年七月 日光道中栗橋宿中田宿船橋御普請出来形御入用帳之写 一冊」、「十五 文政七年七月 日光道中栗橋宿中田宿船橋并板橋掛継目論見帳 一冊」
- 47 『朝鮮通信使使行録』は、注 13 に同じ。
- 48 『駿河国富士郡岩本村文書 附、富士川交通史料写：岩本村文書』（国文学研究資料館史料館蔵）
- 「二四 駿州富士川舟橋掛渡品品覚書 一冊 天和二（1682）」、「二五 天和貳年朝鮮人来朝舟橋御入用積高橋積兩冊控帳 一冊 寶永七（1710）」、「四〇四 天和貳年戌八月朝鮮人来朝ニ付 駿州富士川船橋絵図 一鋪 天和二（1682）」、「四〇五 天和貳年戌八月朝鮮人来朝ニ付 富士川船橋絵図 一鋪 天和二（1682）」、「一一〇 朝鮮人来聘ニ付船橋御用帳 一冊 正徳元（1711）」、「一六六 御用之象通行ニ付御触書写 一冊 享保十四（1729）」、「一六七 富士川假船橋御入用積 一冊 享保十四（1729）」、「一七二（御用象船出来注進状） 一冊 享保十四（1729）」、「二一四 朝鮮人就來船橋覺書帳 一冊 延享四（1747）」、「三九四（富士川船橋御普請）入札 一冊 延享四（1747）」、「二一六（朝鮮人来朝御賄ニ使用済ノ諸道具御拂物入札案文 寛延元（1751）」、「二二七 駿州富士川船橋并假橋御普請目論見帳 一冊 寶曆一二（1762）」、「二八〇一一（甲州高瀬船富士川乗通一件岩本・岩淵両村為取替書 二通 文化十二（1815）」、「二九七 富士川定渡船御造営出来形帳 一冊 天保五（1843）」、「三二八 御上洛御用留 一冊 文久五（1863）」、「三三三 東海道富士川定渡船御造営出来形書上帳 一冊 慶応二（1866）」、「二二七 船橋御普請御入用取扱ニ付内取調方控手帳 一冊 明治元（1868）」、「三三九（船橋真景差上願書） 一冊 明治元（1868）」、「三三四 富士川定渡船新規平田船御造立仕様帳 一冊 明治二（1869）」、「三四八 御東幸ニ付富士川御船橋掛渡方仕様御入用仕上帳 一冊 明治二（1869）」、「四六三 富士川交通史料写〔第二冊〕富士川東岸御普請御入用覚 寛政二—文化七（1790—1810）」、「四六三 富士川交通史料写〔第八冊〕富士川高瀬舟・定渡船各造船方覚 享保十七（1732）」、「四六三 富士川交通史料写〔第十八冊〕朝鮮人来朝富士川舟橋関係記録 天和二（1682）」、「四六三 富士川交通史料写〔第十九冊〕富士川船橋破損ニ付朝鮮人歸國掛渡追普請出来形帳（抄寫）寶曆一四（1764）」、「四六三 富士川交通史料写〔第三八冊〕朝鮮人来朝ニ付富士川船橋覺書 天和二（1682）」、「四六三 富士川交通史料写〔第四一冊〕富士川船橋道具覚 天和二（1682）」
- 岩本村文書のほぼ全体は近世の村方文書で構成され、その中には上記に示す朝鮮通信使舟橋文書・絵図資料・明治天皇東幸舟橋など富士川渡の左岸岩本村に関する舟橋の仕様・施工・費用の明細が記録されている。
- 49 『鹿兒島戦争記、篠田仙果著、松本常彦校注：新日本文学大系 明治編 13 明治実録集所収』（岩波書店、2007 年）
- 50 The United States Army Air Force in World War II: Combat Chronology of the US Army Air Force
September 1944
- 51 'Systems of military bridges in use by the United States Army, those adopted by the great European powers, and such as are employed in British India with directions for the preservation, destruction, and reestablishment of bridges, Brigadier General of US Army George W. Cullum'New York, D. Van Nostrand, 1863
- 52 『苧麻・絹・木綿の社会史、永原慶二著』（吉川弘文館、2004 年）

第2節 研究の対象と目的

(1) 概要

本論文の研究対象は、古代から近代までに架けられた日本および諸外国における浮橋と浮橋架設に関する史料を調査し、これら諸資料の調査結果を統合して総合解析を行って、浮橋通史としての編纂をおこなうとともに、同時に主要目的の一つである浮橋構法および構成材料に関する新しい技術史を編纂して、さらに本研究目的の帰結とする浮橋史における技術史・軍事史・社会経済史および文化史の役割とその位置づけを明確にして統合することにある。すなわち本論文の目的は、単なる浮橋通史および浮橋技術史・材料史の研究にのみに関わることだけではなく、歴史の構成要因である軍事史・社会経済史・文化史を基盤資料として、新しい知見に基づく総括的な浮橋史を編成することにある。

この目的のために本研究においては、編年史作成を目的とするたんなる浮橋架橋歴史の調査研究のみでなく、浮橋を構築する技術およびその構成要因である浮体・係留装置・部材と構成材料の発達および変遷に関するれきしについて、専門的・普遍的でかつ総合的・包括的な史料の分析・検討を行うことを本研究の主要としている。また本研究では通常の技術史において、浮橋史料としての価値がほとんど存在しない史料として判断され、なおざりにされてきた宣教師日記・報告書、個人日記・紀行、随筆・小説・詩中の浮橋関連の記録・描写を総合史料の一部として、名所・旅行案内や道中記とともに研究対象として採用している。

これらの諸資料のように、写真映像・絵図記録や案内・日記・文学に記録されている些細な浮橋関連の資料の内容は、時には誇張あるいはあいまい叙述された資料、また資料の量的不足ゆえに等閑視されてきた。些細ともいえる浮橋関連資料でも、浮橋史の根幹を形成する浮橋構造と仕様の変遷の一部でも示していると判断される場合には、各分野にまたがる浮橋研究資料の対象とし、境界を越えた総括的なかつ俯瞰的な研究調査の対象資料とする。

上記の理由を鑑みてまず着手すべき当初の研究において、全体像把握の目的で我が国を含めた古代・中世・近世および近代のより正確な浮橋架橋通史の資料選択をおこない、浮橋史全体像を把握し通史・概史編纂のための調査研究を各専門分野の調査研究と並行して行う。さらには、諸外国を含めた浮橋鋼製部材の浮体・係留装置・杭・床版などの歴史を、浮橋構法技術の発展および使用されてきた術語・用語の変遷の歴史と一体化した調査研究を行う。すなわち、浮橋史・技術史をよりより高度で精度の高い水準での編成を行う目的で、可能な限り多くの浮橋構成部材および構成材料に関する資料を用いて、浮橋用語の用法および意味の推移と同定、構成部材および諸材料の推移発展の歴史を調査・解析し、より高度な新浮橋史の構築を目的とする。

また古今東西の軍事史・戦史・軍記・従軍記における渡河作戦記録は、その手段のみならず川を横断した事実すら収録されにくい傾向にあり、さらに敵前架橋による浮橋技術を示す史料は非常に少ない。すなわち、中世・近世・近代における世界の史書・軍事史およびこれらの解説書には、川の対岸に布陣する敵の側面や背後を突いて勝利したとする結果のみが強調され、渡河手段については無視もしくは省略されることが多い。したがって、浮橋史における軍事架橋に関する調査検討はできるだけ複数の史料を用いて行う。研究の背景で述べたように世界の軍事史の中には、民族・国家主義や宗教の対立で生じた歴史観の差により、史実の叙述に偏倚が存在しているので、本研究に採用した史書・軍事史の選択および解析に際しては、公正な世界史観および宗教観に基づいて行っている。さらに、各時代の地域ごとの戦略・戦術において、敵前渡河および兵站確保に用いられた浮橋の歴史を、散在している各資料を調査し、浮橋史における軍事架橋史の位置づけを行う。

また、資料の不足ゆえに、なおざりにされてきた浮橋関連史料でも、浮橋史の根幹を形成する浮橋構造・仕様とその変遷を示している文献と判断し、各分野にまたがる浮橋研究の対象とし調査研究し、特に近世・近代の日本浮橋の未翻刻史料のを加えた新しい知見に基づき、技術史に重点をおいた歴史叙述の構築を行う。

結論として、これらの事由を鑑みてまず当面の研究においては、我が国を含めた古代・中世・近世および現代のより正確な浮橋架橋通史だけは、概史としても焦眉の急として行う必要がある。さらには、我が国の浮橋構成部材の浮体・係留索・杭・イカリ・床材などと構法の歴史の構築と編成を、技術用語の総括と統一を含めて完成させねばならない。即ち浮橋技術史をより高度で精度の高い水準での編成を行う目的で、可能な限り多くの各浮橋部材および構成材料に関し、これらの推移と発展の構成材料の歴史を調査・解析して、より高度な舟橋史の構

築を目的とする。

各時代別・地域別研究目的と対象の範囲と区分は、下記の(2)－(8)示す条項に従い逐次各浮橋史の記述を行う。

(2) 日本浮橋の歴史

古代から現代に及ぶ浮橋の構法・仕様・および構成材料については、用語を含めた適切な解説史料が存在していないため、これまで原文の文意・語意が少なからず損なわれている翻刻・翻訳史料が存在していることは、すでに具体的例をあげて研究の背景で述べている。本研究では原文資料および術語・用語の誤解・誤読を新しい独自判断により訂正し、新しいの知見による解釈に基づいた翻刻・翻訳資料を、主要研究史料の対象とし採用している。さらに、これまでに別種の別時代の浮橋史料とされて、史料としての正当な調査検討が行われてこなかった、時代不明の文書、絵図・写真史料を含む中世・近世および近代の浮橋資料を、これらの判読解析研究によって得られた知見に立脚して調査解析を行う。本論研究に引用し解析・検討した諸史料・資料の専門分野は、多岐にわたるかつ広い範囲に及んでいる。さらにこれら史料には、明らかな原文の誤り、誤写・誤訳など翻刻刊行に伴う誤謬が存在しているので、重大な誤謬と判断される場合にはできるだけ原史料か写影史料を用い、確認作業を行うことを原則にしている。

近世日本浮橋の研究方針では、膨大な史料の存在は確認されているが特にこれまでは翻刻刊行されていない、多数の浮橋関連の未翻刻・未翻訳・未整理の近世史料を、解説・翻訳研究を行いこの結果をまとめて本研究の重要史料とするとともに、これまでに市町村史に記載されてきている宿方・村方文書の原文・陰影本・翻刻文などの史料―翻刻もしくは解説され刊行されている県市町村史近世資料編の史料を含めた―の再解説・翻訳を含めた原史料および既翻訳史料の再検討を行い、再検討による誤謬の訂正を行うとともに、震込杭打ち工法などこれまでに発見されていない浮橋施工の職種別所要人工・材料単価の解析調査による時系列による建設費用に関する新知見を加え、これらを統合して浮橋構法技術史・材料史に重点を置いた、浮橋史叙述の史料とする。

さらに、個々の資料としては散在して存在し、そのままでは史料の価値が低いとしてこれまでは等閑視されてきた、中世後半から近世・近代初頭の浮橋に関する史料、特にたの別種の史料に紛れて正当な調査検討が行われていない、あるいは過度の評価を受けている資料―近世および近代の絵図・写真を含む諸史料―を系統的に整理して重要史料の基幹とし、さらには翻刻刊行されている文書史料を含めた諸史料の解説・翻訳をおこない、浮橋史構築の構成基盤史料とする。

近世日本浮橋の研究において用いた史料は、すでに研究の背景でのべた朝鮮通信使にかけられた富士川浮橋の岩本村文書、関東御用舟橋では石川民部家文書、木曾川起宿場の宿場文書を主要な研究対象としている。浮橋の構法・仕様・施工および構成材料については、古代から現代に及ぶ適切な浮橋技術史が存在していないため、原文術語の誤解・誤読と独自の判断に基づく翻訳や翻刻により、原文の文意・語意が損なわれていることは、具体的な例を挙げてすでに述べたとおりである。

現在、流通している日光社参の御用舟橋の史料は、幕府綱紀が緩んできた時代の文政度社参計画および天保度社参房川舟橋にかんするものが大部分を占めている。また多くの将軍が御鹿狩の度に架けさせ、享保時代には将軍吉宗が4回架けさせた、江戸川松戸金町舟橋の構法を示す史料は、嘉永年間の将軍家慶が渡った石川民武家文書のみを示されている、江戸川舟橋のみである。すでに述べた「明治以前の土木史」文献においては、架けられたことのない社参房川舟橋の史料を、代表的な社参御用舟橋の典型として誤って採用し、「明治前の土木史」文献においても同様な叙述が行われている。これらの誤謬を正し正確な御用舟橋史料選択し、精緻な史料が残されている天保度社参棒線舟橋構法の同定を行う。土木史記述のソースは同一であると判断されるので、これらの誤謬は正しい史料で修正されねばならない。

現存する各種社参舟橋絵図の近世御用舟橋の的確な根源史料としての追求の研究は行われていない。天保度社参舟橋においては複数の系列・系統に属する舟橋絵図が伝来しているが、そのほとんどは真贋をふくめ伝来・伝承の詳細を明確にする研究はこれまで行われず、史書・研究論文・紀要等には誤った解釈と引用とが少なからず行われている。この是正の目的で多種多様の房川舟橋絵図を研究資料に用い、近世御用舟橋の的確な時代とより正確な仕様の同定を行い、さらに石川民武家文書に記載・記録されている契約条件・仕様書と施工完了報告書(出

来形帳)、請負人の施工日記などの詳細調査を行い、どの舟橋絵図が舟橋代官もしくは請負人直結のものであるかの検討を行うとともに、浮橋請負工事における工事発注側の舟橋代官と施工請負業者間の密接な信頼関係を実証する。

天保度社参にさいして幕府の示唆もしくは指示で発行されたと判断する2系統の各種かわら版に掲載されている、社参房川舟橋の図柄の検討 ―特に書入構法仕様の真贋判定の研究―を、石川民武家文書・一連の舟橋文書・安永度房川舟橋絵図・文政度房川舟橋計画図・天保度房川舟橋絵図・時代不明の古房川舟橋絵図を用いて行い、この明治時代にいたるまで誤引用、模写、誤写を重ねてきた天保度社参かわら版史料の誤謬の原因を追究し、天保度社参御用舟橋仕様の確定を行うとともに天保以前社参の舟橋仕様の検討を行い、この誤って用いられてきた史料の誤謬を是正し、正しい天保度社参舟橋仕様の確定をおこなう。このため、天保度房川舟橋および一連の各種文書および絵図の遡求的な総合研究調査を、各絵図の突合わせおよび関連文書史料の技術資料を用いて解析・調査研究を行い、御用舟橋仕様の偽造・捏造の作成指示者と推定と、幕府に対して行った偽史料提供者の同定をおこなう。かわら版浮橋の図柄と書入舟橋仕様は、天保から明治末に及ぶ錦絵にまで次々と転記・模写を繰り返して、新たに誤写捏造と・創作仕様が各絵図面に記入され描かれ、これが現代の浮橋関連史料、舟橋絵図に利用されさらには公的扱いの舟橋絵図の原典として書入れ仕様とともに引用されている。

幕府初期はもとより、享保度・安永度および天保度社参房川舟橋の仕様を、直接伝える幕府の史料は存在していないが、天保度房川舟橋の施工・仕様を記録する石川民部家文書には、請負契約と架橋工事に至る経緯および請負人の松伏村名主民部が天保度舟橋代官の関保右衛門から工事参考資料として借用し、宛先役所、関連者、日付、諸色単価の部分を省いて写した、安永度房川舟橋および文政度計画舟橋の仕様帳の写文書が収録されている。さらに石川民部が天保度の請負工事に際し、幕府舟橋代官に提出した舟橋御用留帳・仕様帳・出来形帳(房川舟橋完工報告書)および請負人の私的工事記録の船橋日記・野帳などが詳細に記録されている。

これら近世関東御用舟橋における唯一の幕府史料の写しから構成された、近世浮橋の最重要史料と判断される石川民部家文書の解説と解析は、これまで行われることはなかった。この史料の内容のごく一部がこれまで紹介され、引用されているにすぎない。この石川民部家文書は、数多く架けられた御用舟橋の仕様と諸色単価、施工の詳細、工事別職人・人夫の所要人工、幕府支給材と貸与材、助郷提供の諸色の区別などを記録する、現存する関東御用舟橋の最高と目される重要史料の判読・解説をおこない、関東御用舟橋の請負次第、仕様、材料の発注・購買と幕府支給金・支給材・貸与材、施工工事次第、工事別所要人工・単価・工事費特殊工事など、これまで幕府架橋工事で不明とされてきた事項を解明し浮橋史、ひいては土木工事史の史料とする。さらに、同文書が記録する嘉永度鹿鹿狩江戸川浮橋の仕様書・工事記録に、は他の史料には見られない詳細な、係留杭(男柱)の震込杭打施工に用いる機材、施工方法・工程と所要人工が記録されている。

なお、この史料は松伏町(現埼玉県)から翻刻刊行されているが、随所に誤写・誤読・誤訳・誤校正などによると判断される不適切活字の使用および合理性を欠く記述が存在している。この史料の再度の解説作業と訂正翻刻とは、今後の重要な課題であると判断する。

明治初頭から利根川・荒川・千曲川・阿武隈川などおもな養蚕地帯に架けられていた、明治有料舟橋の記録は多数が存在しているといえども、実質的な明治浮橋史は、研究の背景で強調したように存在していない。明治初期からの木造舟橋の構法は、最盛期中期には世界に冠たる技術に達していたと判断する。この明治浮橋技術史を構築し編成するため、現存する明治行政文書史料、県史・地方史・郷土史の史料、写真史料、紀行・文学などの浮橋関連記録を個別および統合検討を行い、民営明治有料舟橋の編年史・技術史・社会経済史・文化史の構築を行う。

本論文研究における主要対象の一つとしている、明治民営有料舟橋の架橋史・技術史および企業経営実態の調査研究を行う。この目的のための主要基幹史料として、主に埼玉県立文書館が収蔵する未解説・未刊行の明治行政古文書のうち、有料浮橋(賃貸橋)に関する行政文書および関連する道路・交通行政文書の悉皆解説調査を行い、これら解説した史料を本論文の最重要資料の一つとして採用し、明治民営浮橋の設計・仕様・施工・部材および材料単価の調査、部門別工事費と総工事費、洪水・暴風による流出および破損による損失、資本金と借入金の金利、企業運営費と橋賃収入な企業経営実態の時系列の調査解析をおこない、明治民営浮橋の歴史の編纂と企業

の社会史的意義の確立を研究目的としている。なお、長野県が昭和11年(1936)に編纂・刊行した長野県町村誌(第1巻北信。第2巻東信・第3巻南信)は、各町村の橋梁について記録し明治浮橋史の重要な史料として、調査研究の対象としている。埼玉県以外の各市町村史が掲載する明治浮橋に関する明治行政文書は、史料総数は多いが、自己完結にかけ断片的な史料で構成されている場合が多いので、特殊な史料を除いては補充保管資料として用いている。

さらに、明治有料浮橋に関しては、これまで研究対象として取り上げられることのなかった、埼玉県明治行政文書の悉皆解読調査と解析を行い、明治交通行政の民営有料浮橋の政府許可基準と民営橋経営政策の実施指導書と判断する、県の依頼に基づいて内務卿・内務大臣が個々の有料浮橋について発令した「命令書案・命令書」の制定と実施過程およびその規制内容の実質と浮橋経営の実態の解明を、埼玉県明治行政文書の調査・解析により行い、明治政府の道路・橋梁行政における民営有料橋政策の実体内容の指摘を行う。また、これまで見逃され等閑視されてきた明治政府の道路交通行政における、[明治民営賃取橋]の非合理・非論理的な民間負担の重要性に関する論考を行う。

すなわち、① 民営橋企業のための資金の捻出・資本の規制と運営方法、② 正式の法令に基づかない政府の民営橋運営規準の規制、③ 近世末期から近代初期の最大輸出産業の蚕糸・蚕種企業体と有料浮橋事業との関係、④ 明治初期の段階から頻発していた浮橋経営破綻企業の累積負債の原因と処理方法、⑤ 破綻企業が明治政府によりどのように「見捨てられ」消滅したのか、⑥ 地方自治体への経営権移行による救済方策の実態と実施方法など、これまで未研究分野の明治有料浮橋の調査研究を、主として埼玉県明治行政文書を史料対象として実施する。

さらに我が国の有料浮橋経営に先行して行われていた、アメリカ合衆国の西漸運動時代の中部平原地区では、有料浮橋の経営が建設資金を自治体公債の発行、または民間企業資金の導入で広く経営が行われていたが、民営有料浮橋との彼我の社会要因の差に基づく政策の対比と、これによって派生する経営基盤の基本的な差異の分析をあわせて行う。

近世までは多数存在していた浮橋に由来する地名は、現在でも急激に減少している。浮橋がかつて架けられていた個所には、多くの場合これにちなむ地名がつけられることが多い。我が国においても舟橋にちなむ町名および村・大字(大名)・小字(子名)が数多く残されていたが、明治近代化以後現在に至る市町村合併により、これらの地名が急速に失われる趨勢にある。浮橋史との関連における舟橋・船橋の地名およびその由来の記録と統合的な解析は、地政学史・地方史・文化史の構築においてはなおざりにできない事項であり、浮橋の架橋歴史に関係するこれら地名の由来と伝承の歴史の分析・考察は、本論文の重要な研究対象の一つとし、浮橋史料の調査研究過程で新しく発見した舟橋・船橋地名に関する知見と各種地名辞典の記述内容とを用いて、現存する地名とともにかつては存在していた舟橋・船橋と関連地名の歴史の研究を行う。ほとんど地名は存在していないが、中国・朝鮮およびヨーロッパにおける浮橋関連の地名に関する調査研究を同時に行っている。

古代の古事記・万葉集・風土記や枕草子・うつほ物語、中世・近世の紀行文学・軍記物語および近代の自然主義文学の舞台や筋書きもしくは背景として、数多く登場する舟橋・浮橋は、世界にその類を見ない卓越した日本文学の所産であり、重要な浮橋史の史料として本研究の対象としている。これに比肩しうる世界文学は、中国における唐・宋・元・明時代の紀行・詩文学のみである。浮橋史・技術史の構成に際しこれらが文化史をも包含する以上は、浮橋に関する文学史料は解題・解説の延長としてではなく、本研究においては浮橋史構成の史料として研究対象に用いている。日記・紀行および文学に登場する浮橋は、複眼的な解析手法により浮橋史の資料として、さらにはデータ処理方法によっては浮橋歴史の一部を構成しうる可能性を有している。ここに田山花袋の作品を引くまでもなく、優れた作家の資料解析と史料調査力は古来優れているものであり、とくに花袋を代表とする日本自然主義作家の近代浮橋の描写は、世界文学史において秀たるものであり本研究の主要対象としている。

私的、公的をとわず日記には、異常事態・現象の行動は記録されるが、日常行動における常態は記録されることは少ないため、この点では無行動と判断される危険が生じてくる。また東西古今の戦記における軍事行動の渡河記録は、その手段のみならず川を横断した事実すら記録されにくい傾向にある。中世・近世における我国の史書・軍記には、川の対岸に布陣する敵の背後や側面について勝利したとする結果のみが強調され、渡河手段につ

いては無視もしくは省略されていることが多い。今日では日清・日露戦争における鴨緑江の敵前渡河および日露戦争の奉天会戦に至るまでの日本陸軍の渡河作戦に、舟橋が用いられていた事実を指摘する人は少ない。また、前線における報道記者の戦闘記録は、記録写真とともに掲載禁止とされることが多く、一部は軍用浮橋記録が敗戦後出版されている。これら、戦史・戦記史料から欠落している重要な軍事浮橋記録を、明治初期からの工兵操典などで補完しより正確な史料軍事浮橋史を編成することを目的としている。

(3) 中国と周辺国、東南アジア諸国、インドおよびオセアニア諸国浮橋

古代から近代までの元帝国を含む中国の歴史は、国家、王権の成立と膨張、政権腐敗と革命による崩壊、武力集団の形成と侵略・統合・王権の確立の歴史を繰り返してきた。この間の大河を超えてあるいは対峙しての軍事行動は、即浮橋の架橋史であり、チンギス・ハーンをはじめティムールなど蒙古帝国およびその後裔国の皇帝・王や武將たちが、ヨーロッパへの西進の大遠征の際に架けた多くの軍事浮橋など、中国西域および以西に架けられた軍事浮橋も中国浮橋史の対象としている。

入唐・入宋した日本人僧侶円仁(794-864)、成尋(1011-81)等の僧たちやその他旅行者・探検家たちの著した旅行記は、中国歴史にも記載されていない優れた浮橋史に関する史料として、漢・唐・宋時代の諸正史・列伝・軍記・詩文・旅行記などに記録されている浮橋資料とともに、中国浮橋史の研究対象の史料に用いている。漢・唐・宋・元・明時代に中国を訪れた西欧および回教圏諸国からの使節・宣教師・巡礼・商人・旅行家などの記録・報告書、あるいは中国から逆に西域を通過して西欧諸国に赴いた人たちの記録には、中国正史などには収録されていない架橋記録が多数掲載されている。これら諸浮橋史料の調査研究により架橋箇所および年代の同定を可能な限りおこない、さらに浮橋技術史としては特に地域性と社会構造の相違に基づく架橋構法の独自性を抽出するとともに、場所・時代を異にする浮橋構法の基本技術の共通性を確認する研究を行う。

ティンギス・ハーン軍の浮橋技術を伝承するティムール帝国の浮橋技術の研究には、カスティリア王がティムールに派遣した使節クラヴィーホ(?-1412)の旅行記録をおもな史料とし、ムガル帝国の17世紀半ばの浮橋史に関する史料には、フランスの旅行家ベルニエ(1620-88)著作のムガル帝国誌を主要史料に用い、その他多数のムガル帝国史・皇帝歴代誌・衰亡史・芸術文化史・地誌を史料としている。

清朝末期の欧米先進国派遣の学術調査団および個人探検調査者の中国奥地探検・調査報告書に記録する浮橋・吊橋の調査研究を行い数値的な諸元を含めた浮橋施工および仕様に関する調査研究を行う。

ジョゼフ・ニーダム(1900-1995)が20世紀半ばに行った中国科学史研究における橋梁史は、古代から20世紀における浮橋を含めた古代から現代までの土木・橋梁技術の実態調査と文献調査に関する英文の最初の優れた中国橋梁技術史であり、重要な橋梁史の参考資料として用いている。中国におけるニーダムの貢献に対する再評価を行うとともに、さらには中国技術史家による最新の中国浮橋技術史の世界史での位置づけと、新華社通信および中国人民解放軍(PLA)の最新軍事浮橋技術、発展しつつある中国奥地開発における大型帯状浮橋技術、河川・湖沼・海峡などに架けられている民生用常設現代浮橋の技術と現状および災害救出用の最新浮橋技術の調査研究を行う。ニーダムは、20世紀半ばにおこなった中国科学史研究において、中国の吊橋・跳橋・石橋(桁橋・アーチ橋)に関する技術実態調査と史書調査を行い発表している。浮橋に関しては歴史遺構および調査時の浮橋は、ほとんど存在していなかったと判断され、宋時代の事物紀原などの既刊の中国史料のなかの数少ない事例を主眼に置いて、英文の中国浮橋技術史の論文を発表している。

(4) 西アジア、中央アジア、北アジアおよびイスラム圏諸国の浮橋歴史

【説明文未記述】

(5) 古代ギリシャおよびローマ帝国の浮橋研究

ローマ史における本研究の対象例として、カエサル『内乱記』には軍事舟橋架橋の記録はあるが、『ガリア戦記』には存在していないことを理由に、カエサルが対ガリア戦では浮橋を用いなかったと主張することはできない。カエサルは、内乱記に浮橋緊急架設の記録とともに、ガリア人の組立式舟構造の詳細を、別途記録していた

ことを記述している。カエサルはガリアでの軍事行動および兵站到、浮橋を用いていたことの蓋然性は高いとする論を主張し、諸ローマ史・軍事史の古典および紀元3-4世紀の軍事浮橋に関する最新の論文を駆使して、新しい視点からのローマおよびその後裔諸国の浮橋史の再編成を目的とした歴史叙述を行う。著述対象とする帝政ローマの初期から、ライン・ドナウの防衛線(*Limes*)の砦と軍団兵士の維持のため、ヒンターランドからの兵員・武器・食糧・秣の補給路が確保されていたが、その街道の渡河箇所の多くに浮橋を含む橋梁が架けられていたことは、個々の史料の有無にかかわらず事実であると洞察される。近年ドイツにおけるこれらローマ浮橋の古文書調査が行われ、アーカイブが充足されつつあるがさらに今後の研究成果の公表が待たれる。

- (6) ヨーロッパ諸国浮橋の歴史
- (7) 南北アメリカ大陸および中部アメリカ浮橋の歴史
- (8) 今・現代浮橋および大型浮揚構造物の歴史
- (9) 舟橋・浮橋および浮揚構造物と環境問題
- (10) 浮体と浮体構成および構成部材の技術史
- (11) 舟橋・浮橋の係留索類および碇・錨の技術史

(6)～(11) 【説明文未記入】

第3節 舟橋および浮橋用語の歴史と基本用語の定義

本著作の記述を行うため、古代から近代にいたる日本語、中国語(漢文)および印欧語系統語における舟橋・浮橋、架橋技術および構成部材についての、特記すべき基本的用語に関する専門用語・学術用語の定義を以下に示す。なお特殊用語、一般慣習的な用語および関連用語の詳細解説は、本論における関係章・節・項においておこなう。たとえば、水経注の浙江条には浮橋の意で橋航を用いているが、このような特殊な用法についての定義と解釈は関連の章で行っている。

この定義をこの節にもうけて、研究方法叙述の冒頭で特に行う意義は、これは漢文史料における梁・杭・航の古義が舟橋・浮橋を意味し、日本古代以降の舟梁・舟橋・浮橋・筏橋に該当していることを理解していない人が、現在の日本の歴史家、技術史家、国漢学者、文学者、翻訳者に存在していることにある。これらの人たちの関与で行われている浮橋関連の中国古典の誤解による翻訳の結果として、原文の誤読・誤翻訳・誤注解がかなり広い範囲で行われ、原文の意味をなさないのみならず、中国および日本における誤った舟橋・浮橋および各種橋梁の知識を世に与えている。本論においてはこれらの誤訳をできるだけ多くの翻訳資料から指摘し、訂正を行うことも本研究目的の一つである。

水上に浮体(pontoon)を連ねて橋の下部構造とする橋梁の、日本語における総称を「浮橋(ふきょう)」として定義する。すなわち欧米語における浮橋を代表する用語である pontoon bridge に、対応する日本語術語として浮橋の用語を用いる。舟艇もしくは舟艇様式の浮体を用いている浮橋の呼称には、日本語での限定用語として「舟橋(ふなばし・しゅうきょう)」を用い、対応する外来語代表としての英語の呼称には boat bridge の用語を採用する。

日本語の舟橋・船橋における舟と船は同義であるので、浮体舟の大小にかかわらず本論文の舟橋には原則として舟の字を採用する。日本古来の木造船を浮体とする浮橋は「うきはし」、舟橋は「ふなばし」と発音し、現代軍用の舟橋には「しゅうきょう」の発音を採用する。船橋を「せんきょう」と称するのは、船舶のブリッジとの混乱招くので採用しない。

ただし、近世擬古文および明治初期の行政文書には、舟橋の意で古代中国語の梁および舟梁を用いている場合が多々見受けられる。しかし、前述したように近世人・現代人のなかにはこれを含めて、この「梁」・「舟梁」などの古代から日本語化していた漢語の用語を、現代日本語の文字通りの「舟の梁(ふなばり; beam)」と誤解している人々がいる。古代中国の浮橋関連史料の翻訳に於いて、この弊害は現在でも顕著である。

中国の史書でのふなばしの用語は、その初期に於いては梁・航に始まり舟梁・浮航・浮桁・橋航などが用いられ、軍事作戦用には兵橋が用いられた。春秋時代には浮梁が標準的な舟橋の用語として用いられた。唐時代には浮橋・船橋が用語として定着した。現代では浮橋が標準的な用語であるが、舟橋・船橋も併用されている。

一般に浮橋^{ふきょう}に対応する英語での標準表記として本研究で用いている pontoon bridge(ポンツーン・ブリッジ)は、舟橋・イカダ橋・浮囊橋および種々の浮体(ポンツーン)を用いた浮橋の総称として、世界的に用いられる場合が多い。本論文では浮体の種類が特定できない場合、舟艇様の浮体を用いている場合など、誤解を招く恐れのある場合のポンツーン・ブリッジの表記には、煩雑ではあるが「舟橋^{しゅうきょう}・浮橋^{ふきょう}」の連記した用語を用いている。振り仮名は原則として省略する。

これまでの舟橋・浮橋に関する土木橋梁史の橋梁種類および構法分類において、浮橋を構造的に見て一般橋梁橋(bridge, Brücke)の範疇として分類・識別されることは、現代においても多分に史家・技術史家、もしくは土木橋梁技術者の恣意的判断にゆだねられている。むしろ、浮橋を橋として認めないのが現代の歴史史料では常態で普通である。また、英語の祖語インドゲルマン語の bridge, Brücke の古義には、橋以外に棧橋・荷揚場の意味があるので、原文および翻訳文献の調査研究においては注意する必要がある。また、浮橋を意味する別の英・米語の floating bridge は、英語(En.)の floating には主意の泳ぐのほかに航海する、漂うの意味が浮かぶと共存し、英国における floating bridge は川もしくは海峡の両岸から鋼索・鎖で交互に曳きあつて運行するフェリーを意味し、浮橋には pontoon bridge のみを用いている。国際的な英文論文では浮橋の英語表記では pontoon bridge と floating bridge の両用語が用いられて、さらに舟橋に意味で boat bridge, ship bridge が英訳に慣用的に用いられているが、本論文では pontoon bridge を浮橋の英訳用語に統一して用いている。

陸軍省が新しく明治25年(1892)に制定した陸軍工兵操典の軍橋定義には、軍橋を固定橋・浮橋・短橋の3種に分類し、固定橋の梁・床・柱構造部分の名称を橋床と橋脚、浮橋の場合には橋床と橋脚船(浮体)の2部分に分割して規定している。土木学会では橋梁構造の部位別区分は、上部構造(superstructure)と下部構造(substructure)の2区分に区別している。本論文における浮橋の上部・下部構造の分別は、旧陸軍の軍橋定義および土木学会道路橋指針規定に準拠して行っている。

しかし、現代の陸上自衛隊の施設科(旧工兵隊)で用いている舟橋・浮橋用語は、明治中期時代のフランス工兵隊操典の直訳語を用いていた旧陸軍工兵操典の前近代的な用語を、たとえば門橋などの用例のように意味不明のまま、そのまま用いている場合がほとんどであり、これが軍事浮橋の用語として民間技術用語を無視して用いられている。さらにこれらの軍隊の特殊用語が、通常エンジニアリングの橋梁用語に定着していくのは、本末転倒のことであると判断され、近世浮橋用語と同様に適切な浮橋および関連技術用語の統一が図られるべき状況下にある。

日本中世・近世浮橋の係留索を構成する係留鎖・係留綱・催合綱・虎綱は、梁・桁材・床板材・唐竹簀子・ねこた筵・筵・柴を含む床版構造および、土・砂の舗装材および高蘭・地覆とともに浮橋における上部構造と規定し、浮体と浮体上の橋脚、橋台、櫓・聖牛を含む係留用杭およびイカリ綱・鎖、各種イカリ、蛇籠、地錨などの係留用の構造および部材を下部構造と規定する。浮橋の平面形状は中国古典浮橋の定義を採用し、係留索(鎖・留綱)を用い全体平面がカタナリを形成する構造を曲浮橋とし、浮体の係留を岩壁での剛連結もしくは碇により固定する形態を直浮橋と称している。

外国語・外来語における浮橋の定義用語の代表として、英語・米語の **pontoon bridge**(ポンツーンブリッジ)を用い、浮橋の主要意味を有していない英語の **floating bridge**(フローティングブリッジ)は、浮橋の意味では原則用いないこととする。米語 **ponton** は、現代以前の米軍工兵隊の軍用浮橋の意味でのみ用いる。外国語史料および古文獻資料の翻訳・解析に際しての日本語用語・術語の統一と解説は、必要に際し該当する章において行うが、より詳細な統合解説は「第十章 浮橋の構成技術史」に示す。

近代・現代の中国文献における舟梁・舟橋・浮橋・筏橋、および英訳の **pontoon bridge, floating bridge, ship bridge, boat bridge, raft bridge** の和訳には、文献引用および浮橋構造様式を特記する場合を除いて、現代中国用語の浮橋を用いる。

第4節 舟橋史に用いた主要史料

(1) 日本浮橋史の歴史史料

1) 史料の概要と解説

本研究は、我が国の明治時代を含む浮橋関連の古文書・古記録原史料と写本・印影本およびこれらの翻刻史料の解読調査研究と内外浮橋の関連史料と翻訳文献および地図・絵図・絵画・画像資料を、総合的な調査解析資料を対象とし、また、本研究に引用し参考とした歴史・技術史・文化史・民俗史・社会史・軍事史・兵器史、専門辞書・便覧・百科全書、戦記・伝記・自伝・日記・ルポルタージュ・新聞記事および文芸資料の年代は、古代から現代に及び地域は世界全域を網羅し資料の専門分野は多岐にわたっているので、本研究に用いる史料および資料概要と解説を本項で述べる。これら諸資料を用いて浮橋通史の基盤構築を行うとともに、さらに敷衍して技術史・社会経済史・文化史・軍事技術史を包含する浮橋史を記述・編纂する目的で史料としている。しかし主要史料と同様に、単独で自立しある程度までは首尾が完結している史料の数は限定されている。その上、近世・近代に架けられた定橋(定置浮橋)・常橋(常置浮橋)の遺跡・遺構は、石造係留杭などのわずかな遺物を除いてはほとんど存続していない。日本近世までの浮橋の構造・仕様・施工、建設費をある程度でも示す単独史料は非常に限定され、そのほとんどは原本が写本もしくはこれらの写映史料である。明治以降の近代浮橋史料といえども同断である。たとえば多数の首尾の整った単独の特定浮橋に関する、史料で構成されている明治有料浮橋の史料群は、埼玉県立文書館所蔵の埼玉県所蔵の未翻刻・未整理状態の【明治行政文書】のみである。

本研究の参考・引用文献に用い解析・検討を行った諸史料および資料の専門分野は、多岐にわたるかつ広範囲に及んでいる。これまでも述べてきたように、これら史料には明らかな原文の誤りと誤刻・誤写・誤訳など翻刻刊行に伴う誤謬が存在しているので、重大な過誤の場合には原則として原史料か写影史料を用いて史料原文の内容の確認を行う。

種々の、従来は一次史料(primary source)、二次史料(secondary source)・三次史料(tertiary source)とされてきた文献に散在している、浮橋関連の共通事項を剖出・選別・抽出しこれらの資料を、本論文研究の目的に沿って再編成し検討を加え、これまでの知見により取捨選択を行った資料は、本研究における重要な史料・資料(source material)とし採用している。本研究で採用する史料・資料の、ア priori な数値的・段階的評価は行わない。したがって、本論文の研究で採用する浮橋史料および資料には、一次史料、二次史料および三次史料の区分けは行わない。

むしろ一次史料・資料が著しく限定され、もしくは一次史料・二次史料に重大な誤謬が存在しているのが、内外浮橋史料の特徴である。このことが、これまでに浮橋技術史のみならず、正確な浮橋通史も存在し得なかったことの理由の一つであると判断する。断片的・散在的な個々の資料、たとえば中世末期の戦国大名が一族衆・国人衆などの家臣団・配下や所領に命じた朱印状などの書状史料は、目的・部門・箇所・時代別の項目に分別して総合・統合し、浮橋史料としての共通性・整合性と適合性の比較検討を行うことにより、本研究の重要な根本資料(source material)として用いている。

また、第二次世界大戦の日本帝国陸軍が中国大陸の侵攻作戦に際し、多数の軍用浮橋を建設していたことは事実であるが、これらの現代軍用浮橋の記録は敗戦により廃棄処分され存在していない。米極東空軍が爆撃の攻撃目標として破壊した日本軍浮橋の米空軍公式記録を、調査することにより史実としての日本軍浮橋の存在が初めて確定できる。

日本浮橋の歴史・技術史研究に用いるに根本資料は、日本近世の文政度・天保度の日光社参利根川房川舟橋、嘉永度江戸川金町御鹿狩浮橋、東海道富士川渡の信使舟橋、木曾川起宿の一連の浮橋史料、利根川・荒川の明治有料浮橋の明治行政古文書史料、金沢藩・富山藩・南部藩の藩史などを除いては、分散・分断されて記録されている収集史料の翻刻・翻訳や写影史料とこれらの解説資料が多く掲載されている。日本浮橋文献のみならず海外文献においても、特に浮橋構造と仕様・架橋技術および建設費用などの技術と経済を記録した史料は、各種の独立した専門別文献史料内に点在・散在しかつ偏在している。浮橋通史および技術史を新しく構成するためには、同種・同系統に属する多数の文献から関連している当該事項を抽出・剖出し、洞察力と経験・学習による知見力をもってこれらに総合的な共通性・関連性の検討を加えて統合を行い、未確定分野については推理を加えた新し

い提案を含めて、初めて重要な文献としての価値が個々の資料に生じてくる。

本論文研究で用いている近世御用舟橋史料のうち、慶長12年(1607)に始まり宝暦20年(1764)に終了した、この157年間の10回の朝鮮通信使江戸来聘に際し、陸路の伏見から江戸間での往還のために美濃路および東海道の河川に架けられた舟橋に関する幕府史料— 目録見書・仕様書・請負工事契約書・出来形書(完工報告書)— は写史料を含めても何一つ残されていない。この間に架橋されたされる約250橋程度と推定される信使御用舟橋に関して、浮橋史・技術史の構成に利用可能な根本資料(source material)としては、現在入手可能な17編の信使使行録の原文と架橋を請負った渡・宿場の宿方文書・渡船場方文書およびおおよび諸史料が記録する、舟橋架橋に提供された漁舟・川荷舟の数量と仕様、漁師および船頭の延べ員数、徴収された膨大な数量の諸色と労務費用の負担記録などの写を主体とする助郷村々に対する覚書・留書・触書などの村方文書を統合・分析・解析を行い、それらの結果を本論文研究の基盤資料・根本資料として行っている。

朝鮮通信使が使行録に記している美濃路・東海道の御用舟橋浮橋の記録は、陸上行程の美濃路・東海道の大河の渡河に用いた浮橋の名称は余すことなく記録し、使行録によれば地ではその規模と構法の概要の記録を行っている。中小河川の浮橋についての渡河記録も行われているが、河川名が省略されている場合が多い。これらの浮橋記録の中には、これまで日本の浮橋記録にない浮橋名称や仕様が記録され、また使行録には幕府関係者・随行案内者からの浮橋関連の聞書も存在し、貴重な美濃路・東海道御用舟橋の史料となっている。

明治民営有料舟橋史の技術史・経営史の研究に用いた根本資料は、利根川水系および荒川水系の民営有料浮橋を記録する埼玉県明治行政文書を主に用いているが、この文書の橋梁関係の史料は明治16年以降の記録であり、明治初頭から明治15年にいたる間の浮橋記録は収蔵されていない。この期間を補完する利根川水系の浮橋史料として、埼玉県と利根川および江戸川を県境とする群馬県の県立文書館に収蔵されている、幕末から明治10年頃までの民営橋の古文書を用いている。ただしこれらの古文書は有料浮橋の出願・許可・架橋・運営の委細を記録する書類ではなく、各件に関する戸長および経営者の願書・嘆願書・届書、埼玉県と群馬県(熊谷県)の県庁間の連絡書、県庁と主務省間の往復書状が主体を占めている。

阿武隈川・北上川・千曲川・長良川・木曾川の明治有料浮橋史料は、福島県・宮城県・岩手県・岐阜県・静岡県および関連県の県史・郡史・市町村史、各県教育委員会編纂・刊行の歴史の道調査報告書、各河川事務所資料(建設省・国土交通省)の河川史ほか、明治時代の地図、地方自治体で編纂・刊行した記念写真集の浮橋写真および個別の浮橋写真を用いている。

系統を別とするそれぞれの孤立した浮橋史料の具体性を把握しにくい場合、具象的な絵図または写真資料は、たとえ時代や河川系列が異なっていたとしても、欠落している技術資料の類推と補完作業を行うことにより、技術史の具体性・実存性と連続性をより高めるための有力な史料となりうる。

日本舟橋・浮橋史に関する本論文の研究は、浮橋にかんする古代から現代に至る史書・古文書、日記・伝記・軍記・物語・紀行・文学などの記録、諸文芸における状況・背景描写、地図・絵図・写真の画像記録など諸資料の総合解析調査を基盤として行っている。

古代から中世中期までにおける浮橋史料のそのほとんどは、単独資料では浮橋史・技術史の構成・構築を行うに足る水準に至っていないが、前述の総合的な解析手法に従い各文献史料に散在する浮橋史料の可能な限りの質の向上を図っている。古代浮橋史編成に用いた史料のうち、平安初期までの正史・伝承記録・文芸については各史料の表題だけを列記し、各史料の解題は第2章日本古代の浮橋の当該節・項で行う。

具体的な浮橋架設の歴史および技術史の萌芽ともいえる史料は、平安時代院政期以降に出現しているが、その多くは鎌倉時代以降にようやく戦国大名が戦闘の際に、配下の武士団、領地・支配地に発した舟橋架橋関連の、朱印状・墨印状の印判状・下知文などの命令指示書の正文・草案・案文などに、舟橋架橋の場所と日時期限、舟橋構成諸色の所要量と調達・配送の次第などの沙汰が示されている。中世末期の浮橋史料には、特に関東平野の諸河川の渡場での渡河方法の概要をまとめた資料をに用いて、中世舟橋の架橋と架橋目的の調査研究および構法・仕様の同定と推定を行う。

また、史料として用いる写史料を含めた舟橋に関する古記録および古写本・古活版本、古舟橋絵図資料、翻刻刊行本および現代文翻訳本の中には、原文自体の多くの誤りとともに写しの作者、翻刻および翻訳者の浮橋に関

する基本的な知識の欠落による、語意・文意の誤解と誤読に基づく誤謬・曲解が多数存在している。さらに、活字本の場合には校正誤りおよびルビの誤りが同時に存在し、これらの文献・資料が訂正されないままに引用・参考されて公開・刊行されている。これらの誤謬を訂正するために多くの史料を用いているが、関連史料は膨大な数に及ぶために本項では主要な史料の解題のみを記し、史料解説とその他の史料の解題・解説は、これらの各関連項で言及する際の史料に明記する。

多数存在する近世の関東御用舟橋絵図の中で、舟橋代官などの作成者・所有者および製作年度が特定され、かつその時代特有の舟橋構法技術を示す資料はごく限られている。しかし、安永度・天保度社参舟橋、文政度社参計画舟橋および嘉永度御鹿狩江戸川金町松戸舟橋の場合には、天保度・嘉永度舟橋施工業者の安永度実施史料および文政度計画史料の詳細記録と写し史料と多数の関連舟橋絵図が残されている。これらを参考として多数の舟橋絵図の中から、舟橋代官所持絵図、施工業者作成絵図もしくはこれら系統図の写図として選別とを行うために、各絵図の図面書入れ仕様および短冊形添付の床版詳細構成図と工法・部材の添付説明資料を、各時代の層別に選別し詳細仕様の識別調査研究により、代官所持または施工業者作成の絵図の同定作業をおこない、識別不能の場合には絵図情報のより確からしさを比較検討し、さらに真贋の判定を行う。舟橋絵図の作業により

御用舟橋技術解明の重要な史料としている。さらに、天保度社参かわら版の房川舟橋仕様のような幕府公認の意図的政策による偽仕様は、存在自体そのことが近世幕政史料を解析を必要とする重要な要因の一つであり、さらに偽文献および偽絵図の存在も社会史・文化史的には有意義な史料としての評価対象としている。

本研究に用いた近世御用舟橋史料のうち、2代将軍秀忠から12代家慶にいたる将軍のうち、6名の将軍・大御所・世子が、前後19回にわたり行った、初代家康の命日の4月17日の廟所日光東照宮に参詣の際に、元和3年(1617)から天保14年(1843)までの226年間に、利根川房川渡に架けられた19回の社参舟橋のうち、現存する最古の関東御用舟橋史料である享保度社参(1728)の歴史と舟橋構法技術の解析については、各地区に散在している村方文書の助郷村役諸色割の御触書留書、日光道中・日光御成道の宿方文書、推定享保度房川舟橋絵図と添付短冊形床版構造図を主な史料とし、その他の文書記録類も合わせて史料に用いている。江戸時代後期の関東御用舟橋史料は、安永度(1776)・文政度計画(1822)・天保度(1843)の社参に架けられた利根川房川舟橋および嘉永2年(1849)の江戸川御鹿狩舟橋の施工仕様を記載する『石川民部家文書』を、近世浮橋諸資料のうち最も精度の高い御用舟橋の構造仕様・材料施工・施工人工と工賃と江戸後期の御料農民の社会生活を記録する最重要な史料としている。

この史料の特色は、近世中期以降における関東御用舟橋の構法技術と仕様の解明と架橋費用の概算ができる史料であるとともに、政治状況と社会環境が激しく変動した、江戸幕府後期の安永度(1776年)から天保度(1849年)までの73年間の、職人階層の賃金水準、舟橋構成材料(鉄製品(釘・鋸)・苧綱・苧縄・檜綱・藁綱・藁縄・棕櫚縄の価格、杭材・製材(檜・杉・松)・竹材および杉・松丸太材の価格、葎・俵・ねこた類の藁製品価格、および苧綱を含む仮設資材・機材(轆轤・車知・滑車・手綱)類の損料価格などの変遷を示している点である。近世の米穀類・味噌醬油類・油脂類・薪炭類、衣服類など庶民生活必需品の価格変動史と社会底辺階級の動乱史に関する史料は多数存在しているが、この石川民部家文書はこれまでは未調査であったが近世都市型建設産業経済史の一部を構成可能な根源史料であると判断する。

この史料の記録が示す安永度社参(1776)から天保度社参(1843)に架けての顕著な建設物価の上昇が、安永時代ごろまでは幕府の権威のもとで幕閣および高級官僚により維持されてきたが、文政時代には財政破綻により伝統様式の墨守もとの若干の弥縫策の改善では、豪華な将軍日光社参の架橋が不可能となっていた。実施が困難となっていた、豪華な関東御用舟橋の基本構造・構法とその構成部材の種類と性能・品質の選択基に与える影響に関する研究を行うための重要な史料としている。さらに、嘉永度御鹿狩りに江戸川金町宿に架けられた、御用舟橋の係留杭(男柱)および虎杭の杭打ち作業に用いられた、震込作業の道具・工法および所要人工と杭打工程に関する具体的な史料は、これまでの橋梁技術史の論考に論議されていない、近世橋梁史のなかでは突出した高精度なものである。

10回の朝鮮通信使の来聘に際し架けられた御用舟橋の朝鮮通信使舟橋史料のうち、天和2年(1682)から宝暦元年(1751)間の信使用富士川舟橋史料については、村方文書『岩本村文書』を最主要文献としている。木曾川起

宿場の宿方文書史料が所収する道中奉行の触書の留書、舟橋道具倉庫の舟橋用材の棚卸調査記録・貸出記録、道中奉行・幕府順検使・舟橋代官などの現地における行動・指示の記録を主要文献としている。また、江戸時代来聘の12回の通信使のうち、10回の信使はそれぞれ数編ずつの使行録を漢文で記し、その文中に美濃路および東海道の旅程における舟橋を記録している。現在調査可能な30篇の使行録の原典を史料として用いて内容の悉皆調査を行い、日本側史料には架橋記録の存在していない信使御用舟橋の架橋記録を指摘するとともに、時系列的な信使舟橋構法の変化の推移と、近世社会の変化が御用舟橋仕様の変遷に与える要因効果の調査研究の重要史料としている。

美濃路信使御用舟橋の研究は、尾張藩が管理を行っていた美濃路信使御用舟橋の起川宿方文書および墨俣宿方文書を主要文献として採用している。これら宿方文書には、関東御用舟橋における勘定奉行所および歴代の担当舟橋代官による直接厳重管理がされていない、ある程度緩やかな管理規準で記録されている、関東御用舟橋とは別種の技術資料価値を有する多数の慶長初期からの宿場記録が収録され、その大部分は県市町村史誌で公開されあるいは写映史料・電子化史料として公開されている。

近世浮橋史の研究史料として引用し解析・検討した諸史料・資料の専門分野は、多岐の広い範囲に及んでいる。ただしほとんどの史料は、『石川民部家文書』および『岩本村文書』のように、舟橋構造の具体的仕様と施工方法、所用材料と諸色価格および各工事・工種ごとの所要人工と職人別労務賃金などの工費算定の史料となる系統的・総合的な史料を示すものではない。

美濃路舟橋絵図は関東御用舟橋・東海道御用舟橋の場合とは異なり、故事来歴不明の流出した各種写景観図や文人画的な素描が多く、架橋時代と由来を示す題箋を記すものや具体的工法を示すものはほとんど存在していない。例外として、年代不明の墨俣川舟橋絵図面に、具体的な係留構法の図柄と係留索の色分別種類の区分けと本数および橋床版上・敷舟舷側上での配置を具体的に示すものが存在し、数少ない美濃路舟橋の係留索を具体的に示している貴重な史料としている。さらに、『宝暦信使記録』（韓国国史編纂委員会蔵）と題されている、宝暦度信使がわたった美濃路・東海道舟橋が連続して描かれていた絵図の卷子本を、裁断して冊子本として編纂し直したと判断する舟橋絵図帳に収録の舟橋絵図のなかに、舟橋構法を示す若干の略図が収録されている。これら絵図には日本の史料には記録されていない舟橋絵図と構法が記録されている。この『宝暦信使記録』は同時代の同一目的における御用浮橋はこの絵図帳のみであり、近世浮橋技術史の重要史料として採用している。

係留鎖に関する具体的な仕様および施工記録は、関東御用舟橋の場合と同様に係留構法に関する多くの関連資料が存在するにも関わらず、なにも一つ存在していない。しかし、この幕府の機密保持のために仕様が記録されていない、江戸御用舟橋の係留鎖の歴史と仕様に関する調査研究の目的で、浮橋関連資料中に存在する係留鎖に関連した記録は、どのような些細な断片資料でも分類と解析を行い近世御用舟橋の係留構法の史料として用いている。これらの詳細な文献資料は、第3章 江戸御用舟橋技術論考でその各資料に関する解題で記述している。

明治元年、明治天皇東幸に際して旧幕府関係者が架けた馬入川舟橋の施工過程を示す絵図資料は、題箋および絵図中の書入説明を一切欠いているが、舟橋施工次第を精密な画法で各工程に分割し、緻密かつ写実的に描写した各工程には、これまでこれまで具象化されて紹介されてこなかった貴重な絵図である。この絵図卷子本は、近世御用舟橋の最も優れた舟橋施工絵図を代表するものであり、古代からの舟橋絵図の中で唯一の苧綱の現場製綱方法と杭震込打構法を示している絵図である。

利根川水系および荒川水系にかけられた明治有料浮橋の史料は、そのほとんどが埼玉県所有の明治行政古文書として、荒仕分けされ表題を除いては未翻刻の状態で収蔵されている。史料の内容は埼玉県内の各有料浮橋架橋・賃橋経営の願書と埼玉県と経営希望者の諸打合記録、県令(知事)からの内務卿・内務省への伺書と指示命令書の書状記録、浮橋別の内務省の行政指導要綱(案)の県への指示・連絡記録、浮橋の構造・建設費・収入および長期間の経営見込書、有料浮橋営業許可申請および営業期間延長用の図書、各年度における経営状況の報告書、国の県に対する命令書(賃貸橋許可基準の行政通達)、さらには経営破綻あるいは再建・経営権譲渡などに関する多数の文書が、ほとんど未整理の状態で埼玉県立文書館に保管されている。これまでのこれら史料にかんしては、主として舟橋絵図の紹介および個々の技術資料が県史などに転載されるのみで、賃貸橋関連文書の系統だった翻刻・分析・解析と個別・統合・総合調査研究は行われてきていない。これらの民営有料舟橋に関する膨大な[明

治行政文書] 群は、明治時代の行政史・社会史・経済史・交通史・橋梁技術史・明治有料橋経営史を新しく構成するための貴重で重要な基盤資料である。

現存している資料はすくないが、幕末から明治初頭のダゲレオタイプおよび湿板法による舟橋記録映像は、近世末から近代初頭にかけての舟橋構法技術の文献を補完する貴重な史料として研究対象に用いている。これらの史料の一部は、ウェブ検索、長崎大学図書館などで電子化された映像からも入手できる。

また、古代から浮橋技術を進展させてきた軍用浮橋についての旧軍史料は、明治初期から昭和初期までの工兵操典として残されているが、初期の工兵操典の浮橋技術は、フランス工兵隊操典の直訳に基づいていた。工兵隊架橋演習記録写真など散在しているが、近代での実戦の公的架橋記録は存在していない。昭和初頭からの軍用浮橋技術は、個々の陸軍工兵隊私記録・日記、米軍の浮橋の捕獲記録・爆撃破壊記録、中国大陸戦線での報道不許可写真、従軍記録などを日本工兵隊浮橋技術史の重要資料としている。

2) 飛鳥・奈良・平安時代 (5世紀-1185) 文献

a. 史書・歴史物語

史書：

『古事記』・『日本書紀』・『続日本紀』・『日本後記』・『続日本後記』・『日本三大実録』・『延喜式』・『日本紀略』・『類聚三大格』

歴史物語：

『大鏡、松村博司校注：日本古典文学大系新装版』（岩波書店、1992年）
『水鏡・大鏡、黒坂勝美、国史大系編集会編：新訂増補 国史大系 第21巻 上』（吉川弘文館、1966年）
『今鏡・増鏡、黒坂勝美編：新訂増補 国史大系 第21巻 下』（吉川弘文館、2001年）
『栄華物語 上中下巻、与謝野寛〔ほか〕編纂校訂』（現代思潮社、1983年）
『将門記、塙保己一編、続群書類従刊行会校：羣書類従 第20輯 合戦部 第1所収』（群書類従刊行会、1952年）
『将門記 1-2、梶原正昭訳注』（平凡社 東洋文庫、1975-76年）

b. 風土記

『出雲風土記』・『常陸風土記』

『風土記 補遺 江刺郡、宇多郡、府城仙台、宮城県史編纂委員会編：宮城県史 第28 資料編第6』（宮城県史刊行会、1961年）

c. 日記・記録

『小右記 1-3、藤原実資著：増補史料大成 別巻 1-3』（臨川書店、1989年）
『範国記、平範国著：続々群書類従 塙保己一編 所収』（続群書類従完成会）
『參天台五台山記、成尋著、近藤瓶城編：改訂史籍集覧 第26冊 所収』（臨川書店、1984年 [近藤活版所明治35年刊の複製]）
『時範記、平時範著：書陵部紀要 14・17・32号所収』（宮内庁書陵部、1962、1965、1980年）
『中右記 1-7、藤原宗忠著、増補史料大成刊行会編：増補史料大成第9巻一第15巻』（臨川書店、1980年）
『長秋記 1-2、源師時著、増補史料大成刊行会編：増補史料大成第16巻一第17巻』（臨川書店、1981年）
『兵範記 1-5、平信憲範著、増補史料大成刊行会編：増補史料大成第18巻一第22巻』（臨川書店、1981年）
『台記、藤原道長著、増補史料大成刊行会編：増補史料大成 第24巻』（臨川書店、1989年）
『山槐記 1-3（仁平元年 - 建久5年）、藤原忠親著、増補史料大成刊行会編：増補史料大成 第26-第28巻』（臨川書店、1989年）
『大鏡、水鏡、黒坂勝美、国史大系編集会編：国史大系第21巻上』（吉川弘文館、1966年）
『後鳥羽院熊野御幸記、藤原定家著：羣書類聚第18輯 塙保己一編 所収』（群書類従完成会、1959年）

d. 歌集

『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今集』・『千載集』・『実方集』・『山家集』・『後選和歌集』・『国歌大観』
[歌集刊行本の文献詳細は省略]

e. 文芸

『枕草子、清少納言著、池田亀鑑、岸上慎二校注：日本古典文学大系 第19 所収』（岩波書店、1958年）

- 『源氏物語 1、紫式部著、安部秋生校注：校注古典叢書』（明治書院、1984年）
『うつぼ物語、正宗敦夫編纂校訂：複製日本古典全集』（現代思潮社、1982年[日本古典全集刊行会昭和4-8年刊の複製]）
『とわずがたり、後深草院二条著、久保田淳校注・訳：新編古典文学全集 47所収』（小学館、1999年）

f. 辞書・年表

- 『和名類聚鈔、源順著、正宗敦夫編纂校訂：複製日本古典全集』（現代思潮社、1987年）
『古事類苑 地部第2 三十八 橋上、橋下 四十 渡、神宮司序編』（吉川弘文館、1970年[復刻版]）
『色葉字類抄 3巻/橘忠兼編』（古典保存会(黒川真前蔵3巻本の複製)、1926-28年) [813.-Ta946i](#)
『大和名所記：和州日跡幽考、林宗甫著』（臨川書店、1990年 [延宝9年刊の複製]）
『平安時代史事典、古代学協会・古代学研究所編』（角川書店、1994年）

g. その他の史料

- 『撰閣政治と王朝文化、加藤友康編』（吉川弘文館、2002年）
『封内風土記、田辺希文奉君命撰』（宝文堂出版販売、1975年）
『平泉実記・平泉旧跡志・平泉雑記、相原友直著』【kotobank.jp/word/相原友直】
『図説和船史話、石井憲治著』（至誠堂、1983）
『古代出雲、門脇禎二著』（講談社、2003年）
『検非違使を中心とした平安時代の警察状態、谷森饒男著』（柏書房、1980年）
『検非違使の研究・庁例の研究、小川清太郎著』（名著普及会、1988年[複製]）
『古代中世の技術と社会：技術の社会史 第1巻/三浦圭一編』（有斐閣、1982年）

2) 中世 一鎌倉・室町時代から戦国・安土桃山時代（1192-1600）

a. 史書・古文書

- 『今鏡、増鏡、黒坂勝美、国史大系編集会編：国史大系第22巻下』（吉川弘文館、1966年）
『吾妻鏡 前編、後編、黒坂勝美編：新訂増補国史大系 第32巻、33巻』（吉川弘文館、2007年）
『三長記、藤原長兼著、増補史料大成刊行会編：増補史料大成 第31巻』（臨川書店、1986年）
『梅松論・源成集、矢代和夫、加美宏校注：新選日本古典文庫 3』（現代思潮社、1975年）
『太平記：国民文庫本 巻1-巻40』（J-TEXT 日本文学電子図書館）
『北条家印判状、萩原龍夫・杉山博編：新編武州古文書 上・下』（角川書店、1975・78年）

b. 物語・軍記・日記

- 『古事談、源頭兼著、黒坂勝美、国史大系編集会編：新訂増補国史大系 第18巻 所収』（吉川弘文館、1965年）
『続古事談：羣書類聚第27輯 雑部第3 所収』（群書類従完成会、1959年）
『平家物語 校訂1-10/栃木考惟、谷口耕一編』（汲古書院、2001-05年）
『源平盛衰記、近藤瓶城編：改定史籍集覧編外3-5（上中下）』（臨川書店、1984年 [近藤活版所明治35年刊の複製]）
『明德紀、応仁記、塙保己一編、続群書類従完成会校：羣書類聚 第20輯 合戦部第1 所収』（続群書類従完成会、1959年）
『内宮氏経卿神事日次記、荒木田氏経著：続々群書類従 第1神祇部 国書刊行会編 所収』（国書刊行会、1985年 [明治39年刊の複製]）
『真田三代記・越後軍記、中村考也校：帝国文庫 第18編』（博文館、1929年）
『小田原北条記、江田逸志子著、岸正尚訳』（教育社、1986年）
『信長公記 16巻、角田文衛、五来重編：史籍集覧 第22冊 [近藤瓶城原編]』（臨川書店、1967年）
『越登賀三州記、富田景周著、日置謙校重訂』（石川図書館協会、1973年）
『関東兵乱記・豆相記・河越記、塙保己一編：群書類従 第14輯 合戦部 巻384-399 所収』（経済雑誌社、1894年) [YDM102561](#)
『[増補]検非違使、丹生谷哲一著』（平凡社、2008）
『武士の成長と院政、下向井龍彦著：日本の歴史 07』（講談社、2009年）
『源平の争乱、安田元久著』（新人物往来社、1987年）
『源平の争乱、上杉和彦著』（吉川弘文社、2007年）

- 『頼朝の天下草創、山本幸司著：日本の歴史』(講談社、2009年)
- 『秀吉の天下統一戦争、小和田哲男著』(吉川弘文社、2006年)
- 『関ヶ原合戦と大坂の陣、笠谷和比古著』(吉川弘文社、2007年)
- c. 紀行・文学・芸能・事典・辞書
- 『梅花無尽蔵、万里集九著、玉村竹二編：五山文学新集 第6巻所収』(東京大学出版会、1972年)
- 『新編日本古典文学全集 48 中世日記紀行集』(小学館、1994年)
- 「海道記、長崎健校注・訳」、「東関紀行、長崎健校注・訳」、「春の深山路、春日井雅有著、外村南都子校注・訳」、「十六夜日記、阿仏尼著、岩佐美代子校注・訳」、「東路のつと、宗長著、伊藤敬校注・訳」
- 『中世日記紀行文学全評釈集成 第7巻 所収』(勉誠出版、2004) [KG143-H11](#)
- 「廻国雑記、高橋良雄著」、「佐野のわたり、瀬田勝郎著」、「東路のつと、伊藤伸江著」、「武蔵野紀行、石川一著」、「宗長日記、岸田依子著」
- 『中世日記紀行集：新編日本古典文学全集 48 所収』(小学館、1994年)
- 「海道記、長崎健校・訳」、「東関紀行、長崎健校・訳」、「春の深山路、戸村南都子校・訳」、「覧富士記、稲田利徳校・訳」、「東路のつと、伊藤敬校・訳」
- 『宗長日記、島津忠夫校注』(岩波文庫、1975年)
- 『謡曲百番、西野春雄校注：新日本古典文学大系 57』(岩波書店、1998)
- 「四番目物 古称、佐野の舟橋、世阿弥作」
- 『大蔵家伝之書 古本能狂言 第5巻所収』(臨川書店、1976年)
- 「船橋」
- 『謡本五種』(東都 戸倉屋喜兵衛、須原屋茂兵衛、安永五年(1776))
- 「外題：春日龍神、野守、鶴飼、錦木、舟橋」
- 『古事類縁 第4地部3、神宮司〔編〕』(吉川弘文館、1971年)
- 『名語記、経尊著、田山方南校閱』(勉誠社、1983年) [KF92-38](#)
- 『京町鑑、葦田鈍永撰：新修京都叢書 第3巻 所収』(臨川書店、1976年)
- 『羣書類従 第18輯、日記部、塙保己一編 所収』(群書類従完成会、1959年)
- 『夫木和歌抄 1-5、藤原長清撰』(宮内庁書陵部、1984-88年)
- 『山家集、西行著、佐々木信綱校訂』(岩波書店、1957年)
- 『和漢音釈書言字考節用集：節用集大系第81、82巻』(大空社、1995年)
- 『東京市史稿 橋梁編第1〔承和2年(835)～享保18年(1733)〕、東京市役所篇』(臨川書店、1973年〔東京市役所昭和11年刊の複製〕)
- 『日本中世史事典、阿部猛、佐藤和彦編』(朝倉書店、2008年) [GB8-J11](#)
- d. 舟橋関連史料・資料
- 『豊田町誌 別編1. 付録1 東海道と天竜川池田渡船史料(梅松論)、豊田町誌編さん委員会編』(豊田町、1999年)
- 「一 鎌倉幕府、鎌倉の称名寺長老劔阿に天竜川橋の管理を命ず 元享四年(1324)八月」(神奈川県立金沢文庫蔵)
- 「二 新田義貞軍、天竜川に浮橋を架ける 建武二年(1335)十二月」
- 『北区史 資料編 古代中世2』(東京都北区、1995年)
- 「舟橋関連北条氏政印判状 440(天正2年(1574)3月)、456(天正4年(1576)9月)、462(天正5年(1577)8月)、495(天正13年(1585)10月)、509(天正14年(1586))、520(天正16年(1588)) 527」
- 『北区史 通史編 中世』(東京都北区、1996)
- 「第二編 一一五号：応永23年、鎌倉稻荷社の修理費用を岩淵郷橋銭から充当する(鎌倉幕府政所執事・二階堂行崇文書)」
- 「第四編 四・五・九号(平家物語)、一一・一二号(義経記)：頼朝の隅田川浮橋」 [GC67-E318](#)
- 『群馬県史 資料編5 中世1、古文書・記録、群馬県史編さん委員会編：』(群馬県、1978年)
- 「2404」、「3353」

- 『群馬県史 資料編 6 卷 中世 2 編年史料 1. 鎌倉時代/群馬県史編さん委員会編』(群馬県、1984 年)
- 『群馬県史 資料編 7 卷 中世 3 編年史料 2. 室町時代/群馬県史編さん委員会編』(群馬県、1986 年)
- 「室町時代 1761 梅花無尽蔵、3353 北條家朱印状 長尾文書、3354 長尾顕長判物 長尾文書」
- 「戦国時代 2404 上杉輝虎書状写 歴代古案 (史料繁集 古文書編、統群書類従完成会)」
- 『一遍上人絵伝、小松茂美編：日本絵巻大成別刊』(中央公論社、1978 年)
- 『朝野旧聞哀藁 全 26 卷、林述斎監修、史籍研究会編 (汲古書院、1982-84 年)
- 『慶長国絵図 越前国；江戸幕府撰慶長国絵図集成、川村博忠編』(柏書房、2004 年)
- 『合戦記・豆相記、埜保己一編 羣書類聚 第 21 輯』(統群書類従完成会、1960 年)
- 『史籍雑纂 第 1 集 日向記 卷 1-13、落合兼朝等編』(図書刊行会、1911 年)
- 『慶長年中卜斎記、成島道筑校正、近藤瓶城編：改訂史籍集覧 第 26 冊第 70』(臨川書店、1984 年)
- 『寛政修諸家譜 第 1-第 22』(統群書類従完成会、1964-67 年)
- 『家忠日記、松平家忠著』(臨川書店、1968 年)
- 『戦国遺文 後北条氏編 第 1 卷-第 5 卷』(東京堂出版、1989-93 年)
- 『改訂房総叢書 第 1 輯 第 2 卷 合戦』(改訂房総叢書刊行会、1959 年)
- 「国府台合戦記・国府台合戦物語」
- 『鷲宮町史 史料 3 中世』(鷲宮町、1982 年)
- 「下総旧事[関宿台宿および網代宿に対する舟橋架橋命令書状] 天正五年 (1577) 七月」
- 『新編埼玉県史 資料編 5 中世 1 古文書 1』(埼玉県編、1982 年)
- 『新編埼玉県史 資料編 6 中世 2 古文書 2』(埼玉県編、1985 年)
- 『新編埼玉県史 資料編 7 中世 3 記録 1』(埼玉県編、1985 年)
- 『新編埼玉県史 資料編 8 中世 4 記録 2』(埼玉県編、1986 年)
- 『北区史 資料編 古代・中世 1, 2』(東京都北区、1994, 95 年)
- 『荒川 人文 I 荒川総合調査報告書 2』(埼玉県編、1987 年)
- 『日本歴史地名大系 第 18 卷 福井県の地名』(平凡社、1981 年)
- 『日本歴史地名大系 第 10 卷 群馬県の地名』(平凡社、1981 年)
- 『近代足利市史 第 3 卷 原史・古代・中世・近世 第 1 章 古文書・記録 第 2 編中世第 5 節 戦国時代』(足利市、1979 年)
- 「二六一 東路の津登/柴屋軒宗長 (群書類従十八) 永正六年 (1509) 九月」
- 『静岡県史 史料編 5 (中世 1)、8 (中世 2)、7 (中世 3)』(静岡県、1889-96)
- 「北条家朱印状 永禄十一年 (1568) 五月 [富士川舟橋道具以下、不破失様ニ可拵置]」
- 『越中史料 第 1 卷、中越史談会編』(清明堂、1904 年)
- 「肯構泉達録 越中旧事記、野崎雅明著」
- 『鈴木幸八氏所有文書：歴史地名大系 10 群馬県』(平凡社、1987 年)
- 「北条家朱印状」、「長尾顕長判物」
- 『戦国遺文 後北条氏編 第 1 卷-第 6 卷、杉山博ほか編』(東京堂出版、1989-95 年) [GB271-E12](#)
- 『新編武州古文書、杉山博、萩原竜夫編』(角川書店、1975 年)
- 『金沢北条氏の研究、永井晋著』(八木書店、2006 年) [GC56-18](#)
- 『戦国大名北条氏、浅野晴樹、斎藤慎一編：中世東国の世界 3 所収』(高志書院、2008 年)
- 『戦国時代の終焉、斎藤慎一著』(中央公論社、2005 年)
- 『中世東国における河川水量と渡河、齋藤慎一著』(東京都江戸東京博物館研究報告 第 4 号、1999 年)
- 『中世の舟橋 河川の渡河と交通、齋藤慎一』(東京都葛飾区郷土と天文の博物館、2003 年)
- 『軍需物資から見た戦国合戦、盛本昌広著』(泉洋社、2008 年)
- 『足利時代史、田中義成著』(講談社、1979 年)
- 『邦訳日葡辞書 (Vocabulário da Lingoa de Iapah)、土井忠生ほか編訳』(岩波書店、1980 年)
- 『フロイスの日本覚書、松田毅一・E. ヨリクセン著』(中央公論社、1993 年)

- 『中世の土木と職人集団、三浦圭一著：日本技術の社会史 第6巻土木 所収』（日本評論社、1984年）
- 『技術の社会史 第1巻 古代・中世の技術と社会、三浦圭一編』（有斐閣、1982年）
- 『損色の研究、川上貢著』（日本建築学会論文集、44号、1951年）
- 『日本建築史論考、川上貢著』（中央公論社出版、1998年）
- 『軍需物資から見た戦国合戦、森本昌広著』（洋泉社、2008年）
- 『中世の東海道をゆく、榎原雅治著』（中央公論社、2008年）
- 『中世関宿城下とその機能—網代宿を中心として—、新井浩文著』（『千葉県立関宿城博物館研究報告 創刊号、1995』）

3) 近世 —江戸時代（1603—1867）

a. 江戸幕府の史料

- 『柳営日次記、国立公文書館 内閣文庫蔵』（雄松堂フィルム出版、1981年）
- 『徳川実紀、黒板勝美、国史大系編集会編：国史大系 第38巻—47巻』（吉川弘文館、1964—77年）
- 「東照宮（徳川家康）御実紀」、「台徳院（徳川秀忠）御実紀」、「大猷院（徳川家光御実紀）」、「厳有院（徳川家綱）御実紀」、
- 「常窓院（徳川綱吉）御実紀」、「文昭院（徳川家宣）御実紀」、「有章院（徳川家継）御実紀」、「有徳院（徳川吉宗）御実紀」、
- 「惇信院（徳川家重）御実紀」、「浚明院（徳川家治）御実紀」
- 『続徳川実紀、黒板勝美、国史大系編集会編：国史大系 第48巻—52巻』（吉川弘文館、1964—77年）
- 「文恭院（徳川家斉）御実紀」、「慎徳院（徳川家慶）御実紀」、「温恭院（徳川家定）御実紀」、
- 「昭徳院（徳川家茂）御実紀」、「慶喜公（徳川慶喜）御実紀」

b. 利根川・江戸川、荒川水系舟橋

- 『足立家文書 御関所御用諸記 栗橋関所史料一・二：埼玉県史料叢書13上・下』（埼玉県、2002、03年）

- 「1 元禄10年（1697）3月～享保6年（1721）7月」
- 「2 享保6年（1721）7月～寛保3年（1743）10月」
- 「11 文化12年（1815）8月～文政3年（1820）8月」
- 「12 文政3年（1720）3月～文政5年（1822）12月」
- 「19 天保7年（1836）10月～天保9年（1838）12月」
- 「20 天保9年（1838）11月～天保11年（1840）9月」
- 「21 天保11年（1840）9月～天保12年（1841）7月」
- 「22 天保12年（1841）7月～天保13年（1842）11月」
- 「23 天保13年（1842）12月～天保15年（1844）4月」
- 「24 天保14年（1843）3月1日～天保14年3月16日」

- 『石川民部家文書：松伏町史資料 第十六集』（松伏町、2000年）

- 【安永・文政・天保度社参および嘉永度金町御用舟橋資料】
- 「二 安永五年三月 日光御社参ニ付御触書拝見印形帳 一冊」
- 「九 安永五年三月 日光御社参御行列 一冊」
- 「十一 安永五年七月 日光道中栗橋宿中田宿船橋御普請出来形御入用帳之写 一冊」
- 「十五 文政七年七月 日光道中栗橋宿中田宿船并板橋掛継目論見帳 一冊」
- 「十六 文政八年十月 乍恐以書付奉申上候〔作徳米呈上願〕」
- 「十八 天保十三年五月 栗橋中田船橋御用ニ付書留 一冊」
- 「二八 天保十三年七月 乍恐以書付奉申上候（檜綱入用代金内借願）」
- 「二九 天保十三年八月 房川渡御船橋御入用金請払帳 一冊」
- 「三四 天保十三年八月〔網打場決定〕」
- 「三九 天保十三年十月〔檜綱見分予告〕」
- 「四六 天保十三年十一月 乍恐以書付奉申上候（宿継駄賃御定賃銭願）」
- 「六三 天保十三年十一月 日光御調方御触書写」
- 「六七 天保十三年十一月 野帳（房川渡御船橋御普請御取懸り日記） 一冊」

- 「七十 天保十三年十一月 日光道中房川渡御船橋諸色帳 一冊」
- 「七二 天保十三年十一月 房川渡御船橋御入用諸払帳 一冊」
- 「七三 天保十三年十一月 房川渡御船橋御普請中日記録 一冊」
- 「八二 天保十三年 御船橋御用留 一冊」
- 「一〇五 天保十四年正月 房川渡御船橋并前後道繕仕様早見 一冊」
- 「一〇六 天保十四年正月 御船橋日記 一冊」
- 「一八八 天保十四年四月 房川渡御船橋掛渡方其外御普請出来形帳 一冊」
- 「二〇八-三 天保十四年六月 差上申御請証文之事（後褒美受取苗字帯刀請証文）」
- 「二二二 天保十五年四月 [碇場入用他金子請取書]」
- 「二二五 天保十五年四月 奉請取金子之書事（碇上ヶ諸入用ニ付御下ヶ金）」
- 「二二六 天保十五年六月 [残釘返品ニ付代銀戻願]」
- 「二二六 天保十五年六月 覚（返品釘代金渡）」
- 「二五八 七月（弘化二年）[碇二頭見当候為知状]」
- 「二六一 十月（弘化二年）[出府相成兼ニ付依頼]」
- 「二七五 日光道中武州栗橋宿総州中田宿境房川渡御船橋掛渡絵図 一冊」
- 「二七九 覚（残釘御払代金）」
- 「二九一 享保十年二月 小金中野牧御鹿狩ニ付被仰渡書写 一冊（嘉永度御鹿狩関連文書に混入）」
- 「三九一 嘉永二年正月 [大転太石拾い集め方御指図依頼]」
- 「三九七 嘉永二年正月 松戸金町御船橋仕様早見 一冊」
- 「四〇三 嘉永二年正月 御鹿狩勢子人足御割賦帳 一冊」
- 「四〇七 嘉永二年正月 [大転太石集方ニ御指図依頼]」
- 「四二八 嘉永二年二月 [船橋仕立方御指図 一冊]」
- 「四三四 嘉永二年二月 松戸御船橋野帳 一冊」
- 「五二〇 嘉永二年閏四月 武州東葛飾領金町村総州小金領松戸宿境江戸川渡船場船橋掛渡御普請出来形帳 一冊」
- 「天保度かわら版の原図、舟橋仕様原稿」
- 『五街道分間絵図』（独立行政法人東京国立博物館蔵）
- 「日光道中 中田宿部分図」
- 『古房川舟橋絵図 [安永度社参以前に比定]』（埼玉県立博物館蔵）
- 「日光山御社参栗橋船橋絵図」
- 『安永度房川舟橋絵図』
- 「房川船橋安永度之通掛渡方絵図舟」 個人蔵
- 「中田栗橋両宿船橋絵図」 埼玉県立博物館蔵
- 「房川御船橋絵図」
- 『文政度房川舟橋目論見絵図』
- 「中田栗橋両宿間利根川船橋絵図」 埼玉県立博物館蔵
- 「文政度出来分房川船橋模様替絵図」 個人蔵
- 『天保度房川舟橋絵図』
- 「武州栗橋房川渡目論見絵図」 埼玉県立博物館蔵
- 「日光道中武州栗橋総州中田宿境房川渡御船橋掛渡絵図」 松伏町教育委員会蔵（石川民部家文書所収）
- 「日光御参詣之節舟橋之図」 独立行政法人東京国立博物館蔵
- 「房川御舟橋図」 栃木県立博物館蔵
- 『天保度社参かわら版』
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (a-1)」 江戸東京博物館蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (a-2)」 船橋市西図書館蔵

- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (b-1)」東京大学社会情報研究所蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (b-2)」船橋市西図書館蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図 (b-3)」埼玉県立文書館蔵
- 『天保度社参かわら版原図』松伏町教育委員会蔵 (石川民部家文書 所収)
- 「紙本彩色房川舟橋絵図 6面:6種類」、「房川舟橋仕様原図 2枚:1種類」
- 『日光山紀行、烏丸光廣著、岸上質軒編校訂:続々紀行文集第37編 所収』(博文館、1901年)
- 『小金の御狩、成島峰雄著、岸上質軒編校訂:続々紀行文集第37編 所収』(博文館、1901年)
- 『資勝卿記、日野資勝著:大日本史料 第十二編之五十五』(東京大学史料編纂所、2000年)
- 『武蔵国郡村誌 第1巻-第15巻』(埼玉県立図書館、1953-55年)
- 『新編埼玉県史資料〔資料編14 近世5 村落・都市 第4部見聞記〕(足立家文書 埼玉県立文書館所蔵)』(埼玉県、1991年)
- 「二二七 自天保四年(1833)至嘉永二年(1849)足立老人噂之聞書:天保弘化之聞書 弘化3年(1846)春(栗橋町足立正路家文書)」
- 『新編埼玉県史 資料編15 近世6 交通 第3部 臨時大通行第1章 日光社参』(埼玉県、1984年)
- 「二八九 日光社参古河詰助郷留書 享保十三年(1728)」
- 「二九〇 触諸書(抄) 日光社参の寄人馬 栗橋御舟橋之次第 享保十三年(1728)」
- 「二九一 埼玉郡小久喜村日光社参御用渡留書 安永五年(1776)三月」
- 「二九四 大門宿日光社参御用留 文政七年(1824)閏八月」
- 『新編埼玉県史 別編1 民俗1 第5章 生産・生業II 第3節 家造り』(埼玉県、1984年)
- 『新編埼玉県史 別編1 民俗1 第6章 交通・運輸・通信 第2節 道路と川』(埼玉県、1984年)
- 『新編武蔵国風土記稿、間宮士信ほか編、埼玉編 上下全四冊』(内務省地理局 明治17年(1884)刊複製、千秋社、1981年)
- 『浦和市史 第三巻 近世資料編〔1〕-〔4〕』(浦和市、1981-85年)
- 「会田落穂集 26 銭買込置触請書 元文二年(1737)閏十一月」
- 「御社参御用留 安永四年(1775)十月ヨリ申(1775)迄 西御本陣(会田)平八)」
- 「日光御参詣御用留 天保十三年(1842)三月より天保十四年(1843)九月:新染谷村名主勇左衛門留書」(1 卯年日光社参に関する道路取調心得 寅三月)、(24 人馬継立先触)、(72 老中水越前守他大通行について 天保十三年(1842)八月)、(80 砂利値段積り方書上げ 天保十三年八月)、(96 砂利運送につき船数、日数等取調 天保十三年十月)、(126 砂利運送についての請書天保十三年十月)、(293 栗橋御船橋拝見 天保十四年(1843)四月六日)、(303 銭相場につき再通達 天保十四年四月)」
- 『久喜市史 資料編2 近世1 第6章 交通と助郷』(久喜市、1986年)
- 「169 日光御社参御触書書写帳〔武州埼玉郡舟橋架橋助郷村々〕安永五年(1776)正月(大宮市 福島熊男家蔵 No.332)
- 「169 日光御社参御触書書写帳 栗橋中田之間船橋 村役人足諸色帳 安永四年(1775)閏十二月(福島熊男家蔵)
- 「169 栗橋中田之間 御舟橋人足諸色帳御割賦御請印帳 武州埼玉郡組合村々 安永五年(1776)正月(福島熊男家蔵)
- 「169 栗橋中田之間 御舟橋人足諸色帳御割賦請印帳 武州埼玉郡組合六十八ヶ村 安永五年(1776)二月(福島熊男家蔵)
- 『越谷市史 第4巻 史料2』(越谷市、1972年)
- 「大沢町 古馬筥」
- 「越谷宿 往還諸御用留」
- 「越谷宿 伝馬」
- 『越谷市史 続資料編1』(越谷市、1981年)
- 「西方村 旧記 巻・弐・参」
- 『春日部市史 第3巻〔3〕 近世史料編 3ノ1 粕壁宿用留』(春日部市、1982年)
- 「一三四 朝鮮人来聘国役金西分御達 文化十年(1813)十一月」
- 「一五九 去亥来聘国役金并西分会所入用取立書留 文化十三年(1816)」
- 「三六八 伊奈半左衛門御役被付旨御廻状 文政7年(1824)八月」
- 「五一四 新造舟御極印願 文政九年(1826)八月」

- 『岩槻市史 近世史料編4〔2〕地方史料下』(岩槻市、1982年)
- 「商工・舟運 十六 砂利運搬請負書 文政七(1824)(原田家旧蔵文書)」
- 『荒川の水運：歴史の道調査報告書 第7集、さきたま資料館編』(埼玉県教育委員会、1987年)
- 『利根川の水運：歴史の道調査報告書 第10集/さきたま資料館編』(埼玉県教育委員会、1989年)
- 『妻沼町誌 第三節 近世』(妻沼町、1977年)
- 「妻沼村名主御用留帳 覚〔徳川家康妻沼に泊まる〕文禄三年(1594)二月」(荒井金四郎所蔵)
- 『群馬県史資料 古文書 近世』(群馬県立文書館蔵)
- 「1/86 岸武雄文書 乍恐以書付奉願上候(仮舟橋の船賃余力分を関所小破入用の足会い願：宛稲垣藤四郎役所)文化二年(1805)」
- 「3/12 浜名寛文書 上野国名所聞書(佐野の舟橋他)」
- 『群馬県邑楽郡誌、群馬県邑楽郡教育会編』(群馬県邑楽郡教育会、1917年)
- 『古河市史 資料 近世編(町方・地方)、古河市史編さん委員会編』(古河市、1982年) GC45-22
- 『古河市史 資料 近世編(藩政)、古河市史編さん委員会編』(古河市、1982年)
- 『古河市史 資料 通史編、古河市史編さん委員会編』(古河市、1988年)
- 『利根川の水運』(埼玉県教育委員会史料集、1989年)
- 『荒川：人文I 荒川総合調査報告書2.、埼玉県編』(埼玉県、1987年)
- 『甲子夜話1-6、松浦静山著』(平凡社、1982-83年)
- 『耳袋1,2、根岸鎮衛著、鈴木棠三編注』(平凡社、1972年)
- 『はだか日本史、八雲山人著』(松書房、1958年)
- 「かわら版」
- 『三田村鳶魚全集 第1巻 - 第27巻』(中央公論社、1976 - 77年)
- 『江戸の入札(いれふだ)事情：都市経済の一断面、戸田行夫著』(塙書房、2009年)
- 『江戸川図志、山本欽太郎著』(塙書房、2001年)
- 「城下町閑宿と境河岸の繁栄」
- b. 馬入川(相模川)・酒匂川・片瀬川舟橋関係
- 『甲申旅日記、小笠原長保著、岸上質軒編校訂：紀行文集続々第37編所収』(博文館、1901年)
- 『太平年表録、藤間柳庵著：茅ヶ崎市史史料集 第5集 所収』(茅ヶ崎市、2007年)
- 『相模国三浦郡久里浜村 長島家文書』(神奈川県立公文書館蔵)
- 「覚〔朝鮮通信使来朝につき馬入川船橋御用船〕」
- 『相模国大住郡戸田村 小塩家文書』(神奈川県立公文書館蔵)
- 「証文之事〔馬入川船橋御用御普請請負につき〕宝暦十三年(1763)九月」
- 『土屋家旧蔵文書史料(38)相模国鎌倉郡大船村の名主甘粕家の史料 所収』(東京大学経済学部図書館蔵)
- 「10-0 証文之事〔今年朝鮮人来朝ニ付馬入川船橋御用御普請〕享保四年(1719)五月」
- 「12-0 覚〔舟橋人足竹木諸式入用金受取(宛大船村名主)](延享五)辰(1748)三月」
- 「13-0 覚〔朝鮮人御用ニ付舟橋再懸ヶ渡郡役入用金受取(宛鎌倉郡大船村名主)]延享五(1748)(1748)三月」
- 「14-0 指上申一札之事〔人足、馬入舟橋入用等差出につき(宛木原七郎兵衛門内上村清兵衛・関口治部重門)]寛延二(1749)(1748)十一月」
- 「14-0 差上申一札之事〔朝鮮人来朝につき人馬入用高割馬入村差出し定 寛延2年(1848)11月〕」
- 「16-0 一札之事 宝暦13年9月」
- 『新編相模国風土記稿 第1-第5：大日本地誌体系第36巻一第40巻』(雄山閣、1933年)
- 『土屋家旧蔵文書(38)相模国鎌倉郡大船村の名主：甘粕家の史料 所収』(東京大学経済学部図書館文書室蔵)
- 『藤沢市史 第5巻 通史編 第3章 第1節』(藤沢市、1974年)
- 「音無川・境川」
- 『藤沢市史料集30 東海道藤沢宿 役人史料1』(藤沢市文書館、2000年)

- 「朝鮮人一件御用留帳 延享三（1746）十一月ヨリ」※
- 「御触書 [来辰年朝鮮人来朝ニ付] 延享四年卯（1747）五月」
- ※本史料は、『寒川町史 2 資料編近世（2）』にも所収
- 『藤沢市史料集 31 旅人が見た藤沢（紀行文・旅日記抄）1』（藤沢市文書館、2007年）
- 『平塚市史 4 資料編近世（4）、平塚市編』（平塚市、1984年）
- 「34 馬入川船橋役金割返し帳 一冊 延享二年（1745）七月」
- 「相州三浦郡金谷村（福本三郎家文書）一冊 延享五年（1748）正月」
- 「朝鮮人来朝ニ付」
- 『新横須賀市史 資料編近世 1』（横須賀市、2007年）
- 「No. 156 藤沢人馬并馬入舟橋御用覚 一冊 延享四年（1750）六月四日ヲ」
- 『相州三浦郡金谷村 福本三郎家文書/横須賀史学研究会編：相州三浦郡林村（木村家）文書・相州三浦郡金谷村（福本三郎家）文書（2）所収』（横須賀市立図書館、1976年）
- 「延享辰正月廿六日ニ馬入へ召出 [朝鮮人来朝ニ付馬入川船橋御掛り堀江清次郎様御手代ヲ諸色御割付目録御請書等控]
- 『寒川町史 2 史料編近世 2』（寒川町、1993年）
- 「朝鮮人一件御用留帳 一冊 延享四年カ（1750）11月四日ヲ」（藤沢市 皆川邦直氏所蔵文書）
- 『逗子市史 資料編 2 近世 2』（逗子市、1988年）
- 「覚 [宝暦年中朝鮮人来朝につき、馬入川船橋掛船の儀 宝暦十四年（1764）三月」（新宿 草柳博氏所蔵文書）
- 『茅ヶ崎市史 1 資料編 上 古代・中世・近世、茅ヶ崎詩編』（茅ヶ崎市、1977年）
- 「No. 67 乍恐書付を以奉申上候 [天保度社参助郷御免願] 天保十四年（1843）九月」
- 「No. x y 乍恐書付を以奉申上候 [助郷・伝馬役の御免願] 元治元年（1864）四月」
- 『朝鮮通信使と神奈川—延享年中・宝暦年中の通信使来日と神奈川のかかわり—、神奈川県立公文書館編』（神奈川県、2008年）
- 『馬入川舟橋絵図』（平塚市博物館所蔵）
- 「明治天皇東幸馬入川舟橋絵図 一卷」
- 『静岡県史 資料編 13 近世 5』（静岡県、1990年）
- 「差上ヶ申一札之事 [相州酒匂川船橋掛船分担] 明暦元年（1655）十一月」（沼津市 勝呂安氏所蔵文庫）
- 『伊東市史 資料編、伊東市史編纂委員会編』（伊東市、1962年）
- 「差上ヶ申一札之事 [相州酒匂川船橋掛船分担] 享保四年（1719）五月」
- 「玖須美区有文書 二四伊豆東浦組之内十四箇村惣代上申書書写 宝暦十四年（1764）四月」
- c. 富士川
- 『駿河国富士郡岩本村文書 附、富士川交通史料写』（国文学研究資料館史料館蔵）
- 「二四 駿州富士川舟橋掛渡品品覚書 一冊 天和二（1682）」
- 「二五 天和貳年朝鮮人来朝舟橋御入用積高橋積兩冊控帳 一冊 寶永七（1710）」
- 「四〇四 天和貳年戌八月朝鮮人来朝ニ付 駿州富士川船橋絵図 一鋪 天和二（1682）」
- 「四〇五 天和貳年戌八月朝鮮人来朝ニ付 富士川船橋絵図 一鋪 天和二（1682）」
- 「一一〇 朝鮮人来聘ニ付船橋御用帳 一冊 正徳元（1711）」
- 「一六六 御用之象通行ニ付御触書写 一冊 享保十四（1729）」
- 「一六七 富士川假船橋御入用積 一冊 享保十四（1729）」
- 「一七二（御用象船出来注進状）一冊 享保十四（1729）」
- 「二一四 朝鮮人就來船橋覚書帳 一冊 延享四（1747）」
- 「三九四（富士川船橋御普請）入札 一冊 延享四（1747）」
- 「二一六（朝鮮人来朝御賄ニ使用済ノ諸道具御拂物入札案文 寛延元（1751））」
- 「二二七 駿州富士川船橋并假橋御普請目論見帳 一冊 寶暦一二（1762）」
- 「二八〇—一（甲州高瀬船富士川乗通一件岩本・岩淵両村為取替書 二通 文化十二（1815）」

- 「二九七 富士川定渡船御造當出来形帳 一冊 天保五 (1843)」
- 「三二八 御上洛御用留 一冊 文久五 (1863)」
- 「三三三 東海道富士川定渡船御造當出来形書上帳 一冊 慶応二 (1866)」
- 「二二七 船橋御普請御入用取扱ニ付内取調方控手帳 一冊 明治元 (1868)」
- 「三三九 (船橋真景差上願書) 一冊 明治元 (1868)」
- 「三三四 富士川定渡船新規平田船御造立仕様帳 一冊 明治二 (1869)」
- 「三四八 御東幸ニ付富士川御船橋掛渡方仕様御入用仕上帳 一冊 明治二 (1869)」
- 「四六三 富士川交通史料写〔第二冊〕富士川東岸御普請御入用覚 寛政二—文化七 (1790—1810)」
- 「四六三 富士川交通史料写〔第八冊〕富士川高瀬舟・定渡船各造船方覚 享保十七 (1732)」
- 「四六三 富士川交通史料写〔第十八冊〕朝鮮人来朝富士川舟橋関係記録 天和二 (1682)」
- 「四六三 富士川交通史料写〔第十九冊〕富士川船橋破損ニ付朝鮮人歸國掛渡追普請出来形帳 (抄寫) 寶曆一四 (1764)」
- 「四六三 富士川交通史料写〔第三八冊〕朝鮮人来朝ニ付富士川船橋覺書 天和二 (1682)」
- 「四六三 富士川交通史料写〔第四一冊〕富士川船橋道具覺 天和二 (1682)」

【岩本村文書のほぼ全体は近世の村方文書で構成され、その中には上記に示す朝鮮通信使舟橋文書・絵図資料・明治天皇東幸舟橋など富士川渡の左岸岩本村に関する舟橋の仕様・施工・費用の明細が記録されている。】

『清水市史 上巻 資料編近世一 清水市所蔵史料五 文書之部、清水市史編さん委員会編』(清水市、1966 年)

- 「一二 請負申富士川船橋御役船之事 天和二年 (1682)」
- 「二八 請負申富士川船橋御役船之事 正徳元年 (1711)」
- 「三一 請取申舟頭御扶持方之事 正徳二年 (1712)」
- 「五二 覚 一 富士川船橋 五艘 延享四年 (1747) 正月)」
- 「五三 請負申富士川船橋御役船之事 宝暦十四年 (1764)」

『清水市史 上巻 資料編近世一 清水市所蔵史料五 冊子之部、清水市史編さん委員会編』(清水市、1964 年)

- 「九四 御役付并猟船旧記 清水町 文化九年 (1812) 五月」

『富士宮市史 上巻 第八章 第二節 富士川渡船 (3) 富士川舟橋、富士宮市史編纂委員会編』(富士宮市、1971 年)

- 「岩本村日記 (岩松地区文書：山崎家文書) 建久元年 (1190) —天明六年 (1876)」(『富士市史資料目録第 2 輯所収』)
- 「富士川船橋役御人足割帳 (富士宮市黒田中野文書 延享五年 (1748) 二月)」

『富士川町史 第三編 第五章、富士川町史編纂委員会編』(富士川町、1962 年)

- 「富士川の渡船」

『信使東海道舟橋絵図 宝暦信使記録道中所々船橋之絵図一冊 (韓国国史編纂委員会蔵)』

- 「富士川本瀬舟橋絵図及び枝川舟橋絵図」

d. 大井川・天竜川関係

『近世交通史料集八 徳川法令集上 (徳川実記二—三四七)』(吉川弘文館、1978)

- 「155 徳川忠長大井川に浮橋を架し、家光の怒りを買う 寛永三年 (1626) 七月二十一日条」

『日本交通史論叢/大島延次郎』(国際交通文化協会、1939)

- 「大井川の渡渉論」

『福田町史 資料編 3 於保：近世 第九章 第一節 朝鮮通信使、福田町史編さん委員会編』(福田町、1997 年)

- 「二八八 延享五年 朝鮮通信使の通行にかかるとの諸廻状の記録 (1) 延享五年 (1748) 正月— (47) 同年五月」
- 「山名郡上大原村、二年後の朝鮮人通行を控えて天竜川船橋役等の覚 宝暦十二年 (1762) 八月 (松岡神社蔵)」

『豊田町誌 別編 1. 付録 1 東海道と天竜川池田渡船 渡船史料、豊田町誌編さん委員会編』(豊田町、1999 年)

- 「六一 四四カ村一札事：[朝鮮人通行時天竜川船橋などの出願に要する経費負担を決める] 宝暦十二年(1762)八月」
- 「六二 天竜川御舟橋江村役ニ指出候品々書付：[山名郡上大原村、二年後の朝鮮人通行を報告す] 宝暦十二年 年 八月」
- 「六三 乍恐以口上書を申上候：[西岡笠村外一六カ村、来年の朝鮮人通行を控えて過去の天竜川船橋御用猟船は高二百石につき一艘と報告す] 宝暦十三年七月」

- 「六四 覚；[池田村山本八郎御役所、来年の朝鮮人通行を控えて船橋御普請のため諸色の提出を命ずる] 宝曆十三年(1763)8月」
- 「六五 天竜川御舟橋請負証文：[胡桃平村の作次郎川袋村の船橋御用を請負う] 宝曆十三年8月」
- 「六六 朝鮮人通行：[朝鮮人来聘往路宝曆十四年(1764)二月七日通行、復路三月二六日通行]」（春野町渡辺鉄夫氏蔵）
- 「六七 覚 [山本八郎の手代が胡桃村へ宛手た船橋御用物請取の覚書] 宝曆十四年(1784)四月」（春野町渡辺鉄夫氏蔵）」
- 「一八五 東幸につき天竜川に船橋を架す 明治元年(1868)六月」（磐田市水野辰郎氏蔵『水野家覚書』）
- 『静岡県史 資料編 13 近世 5』（静岡県、1990年）
- 『静岡県史編纂資料』（静岡県立図書館蔵）
- 「92. 宮本求馬日記抄」
- 「120. 宮本求馬新居渡船掛日記」
- 『三州吉田船町史稿 卷1-3、佐藤又八著、歌川学校訂』（佐藤公彦、1971年）
- 「吉田橋新築請負入札・修復工事入札目録・工事仕様・資材労務費の記録」
- 『豊橋市史 第6巻 近世史料編上』（豊橋市、1976）
- 「船町 指出之覚」
- 「三州吉田御修復入札目録」
- 『磐田市通史編中巻近世』（磐田市、1991年）
- 『浜松市史 2 近世編』（浜松市、1971年） [215.4-H151h2](#)
- 『新編岡崎市史 3 近世、新編岡崎市史編さん委員会編』（新編岡崎市史編さん委員会、1992年） [gc135-166](#)
- 『三河美やげ』（西尾市岩瀬文庫所蔵）
- 「矢作橋掛直御普請杭震込之図及び詞書」
- 『信使東海道舟橋絵図 宝曆信使記録 道中所々船橋之絵図一冊（韓国国史編纂委員会蔵）』
- 「富士川本瀬船橋絵図及び富士川枝川舟橋絵図」、「天竜川船橋絵図」
- e. 美濃路舟橋 [起川(水曾川)・墨俣川(長良川)・小熊川(境川)・佐渡川(揖斐川)] 関係
- 『信使東海道舟橋絵図 宝曆信使記録 道中所々船橋之絵図一冊（韓国国史編纂委員会蔵）』
- 「起川船橋絵図」、「小熊川船橋絵図」、「墨俣川船橋絵図」、「佐渡川船橋絵図」
- 『尾西市史資料編 1 2. 起宿諸事覚書』（尾西市、1984）
- 「起宿渡船につき書上げ 元禄三年（1690）」
- 『尾西市史資料編 3 起宿交通編、尾西市史編さん委員会編』（尾西市、1988年）
- 「濃州沢渡・美江寺・呂久 船橋道具割帳 慶長十六年」（佐渡川舟橋史料）
- 「上様就御上洛沢渡御舟橋道具割帳覚 寛永十一年三月」（佐渡川舟橋史料）
- 「覚(鎖請取状) 享保十一年(1726)七月」
- 「覚(碇・鎖送状) 享保十一年十一月」
- 「起村船橋道具諸色之覚帳一冊(北蔵入置船橋道具諸色の覚及び南之蔵ニ入置船橋道具諸色の覚 元文三年(1738)八月(享保十九年(1743)写)」
- 「起川舟橋御用諸色川上ケ仕人足帳一冊 延享五年（1748）」
- 「朝鮮人留覚 脇本陣文書 宝曆十二年(1762)四月より宝曆十四年（1764）四月まで」
- 「御用留日記 脇本陣文書 覚[船橋諸色番他人足数] 寛政二年（1790）正月」
- 『和本国秘録 第八冊：蓬左文庫』（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）
- 「国秘録：起川船橋略絵図」
- 『起川船橋絵図』（尾西市図書館所蔵）
- 『岐阜県史 史料編 近世第1、第2、第3』（岐阜県、1965、66年）
- 「第1部 交通 八四 御上洛之時御蔵入・給所分伝馬人足手形遺帳 寛永十一年（1634）七月」
- 「第2部 領主 五四・五五・五六・五七 幕領代官、七五 濃州舟橋道具割帳」

- 「第3部 商業 二四八 高山町諸色値段取調帳」(岐阜県立図書館所蔵)
- 『美濃加茂市史 史料編2 近世7 交通・商業、美濃加茂市編』(美濃加茂市、1977年)
- 「四二〇 木曾井川並所々覚書(抄)寛文五年(1665)」(蓬左文庫所蔵)
- 「四四一 大田村持船届 明治七年(1874)十月」(美濃輪利男氏所蔵)
- 「四四二 上古井村船頭持船届 明治七年(1874)十月」(美濃輪利男氏所蔵)
- 『墨俣町史 第七章 墨俣宿 船、墨俣町史編纂委員会編』(墨俣町、1956年)
- 「墨俣宿船橋御用留帳(舟橋御用船): [家康上洛時の江戸川(長良川)舟橋用] 慶長十六年(1611)二月」(岐阜県蔵本)
- 「墨俣宿船橋御用留帳 墨俣宿舟橋道具割写 慶長廿年(1615)四月」(岐阜県蔵本)
- 「墨俣御舟橋白口縄のわり(舟橋御用船)寛永三年(1626)五月」(岐阜県蔵本)
- 「奉書: [船橋架橋費支払の件、老中土井利勝・酒井忠久・安藤重信ほか二名から岡田左京へ指示] 寛永十一年(1634)五月」(岐阜県蔵本)
- 「墨俣川舟橋仕様 本陣文書 延宝四年(1676)二月」(岐阜県蔵本)
- 「朝鮮人来朝御用留(船橋材料請負)本陣文書 宝暦十三年(1763)二月」(岐阜県蔵本)
- 「朝鮮人来朝に付墨俣川船橋御用縄村々割賦帳 宝暦十三年(1763)三月」(岐阜県蔵本)
- 「墨俣宿船橋御用留(舟橋御用縄・藤綱請負)覚 本陣文書 慶長十六年(1611)二月」(岐阜県蔵本)
- 「朝鮮人来朝之覚(江戸御巡見)本陣文書 宝永七年(1710)」(岐阜県蔵本)
- 『墨俣川舟橋絵図』
- 「墨俣川朝鮮人通過之節船橋之図 [年代不詳]」(個人蔵)
- 「墨俣川渡場船橋之図 [年代不詳]」(個人蔵)
- 「墨俣川舟橋絵図(計画図)文久二年(1862)」(個人蔵)
- 『佐屋町史 資料編3 第3章 将軍の上洛、佐屋町史編纂委員会編』(佐屋町史編纂委員会、1983年)
- 「史料〈三二七〉源敬様御代御記録 [佐屋川渡の舟橋架橋] 寛永十一年(1634)閏十一月」
- 「史料〈七二四〉銭買帳 文久三年(1863)正月」
- 『愛知県歴史の道調査報告書3 佐屋街道、愛知県教育委員会文化財課編: 愛知県文化財報告書 第58集』(愛知県教育委員会、1990年)
- 『愛知県歴史の道調査報告書4 美濃街道・岐阜街道、愛知県教育委員会文化財課編: 愛知県文化財報告書 第59集』(愛知県教育委員会、1990年)
- f. 朝鮮通信使使行録および信使関連資料
- 『海行摺載1-4/朝鮮古書刊行会編: 朝鮮群書大系 続々 第3-6輯』(京城、朝鮮古書刊行会、1914) YD5-H-330-5
- 『丁未・慶長度(1607)使行録、大系朝鮮通信使: 善隣と友好の記録第1巻、』(明石書店、1996年)
- 「回答兼刷還使 副使 慶暹『海槎録』」
- 『甲子・寛永度(1624)使行録、大系朝鮮通信使: 善隣と友好の記録第1巻』(明石書店、1996年)
- 「回答兼刷還使 副使 姜弘重『東槎録』」
- 『丙子・寛永度(1636)使行録、大系朝鮮通信使: 善隣と友好の記録第2巻』(明石書店、1996年)
- 「通信使 正使 任統『丙子日本日記』」
- 「通信使 副使 金世濂『海槎録』」
- 「通信使 従事官 黄扉『東槎録』」
- 『癸未・寛永度(1643)使行録、大系朝鮮通信使: 善隣と友好の記録第2巻』(明石書店、1996年)
- 「作者不詳 『癸未東槎日記』」
- 『乙未・明暦度(1655)使行録、大系朝鮮通信使: 善隣と友好の記録第3巻』(明石書店、1995年)
- 「通信使 正使 趙珩『扶桑日記』」(写)
- 『壬戌・天和度(1682)使行録、大系朝鮮通信使: 善隣と友好の記録第3巻』(明石書店、1995年)
- 「通信使 訳官 洪禹載『東槎録』」

- 『辛卯・正徳度（1711）使行録、大系朝鮮通信使：善隣と友好の記録第4巻』（明石書店、1993年）
- 「通信使 正使 趙泰億『東槎録』」
- 「通信使 副使 任守幹、從事官 李邦彦『東槎録・内題東槎日記』」
- 「通信使 押物通事 金顕門『東槎録』」
- 『己亥・享保度（1719）使行録、大系朝鮮通信使：善隣と友好の記録第5巻』（明石書店、1995年）
- 「通信使 正使 洪到中『東槎録』」
- 「通信使 製述官 申維翰『海游録』」
- 『戊辰・延享度（1748）使行録、大系朝鮮通信使：善隣と友好の記録第6巻』（明石書店、1994年）
- 「通信使 從事官 曹蘭谷『奉使日本時間見録』」
- 「通信使 軍官 洪景海『隋槎日記』」
- 『甲申・宝暦度（1764）使行録、大系朝鮮通信使：善隣と友好の記録第1巻』（明石書店、1994年）
- 「通信使 正使 趙曦『海槎日記』」
- 「通信使 書記 成大中『日本録』」
- 『海游録 上・下、申菁川維翰著、細井肇訳』（自由討研社、1922年）
- 『朝鮮通信使絵図集成、辛基秀ほか著』（講談社、1985年） [YP14-1346](#)
- 『広島藩・朝鮮通信使来聘記、呉市入船山記念館編、頼祺一監修』（呉市、1990年）
- 『朝鮮通信使：江戸時代の親善外交特別展、岐阜市歴史博物館編』（岐阜市、1992年）
- 『朝鮮通信使の研究、李元植著』（思文閣出版、1997年）
- 『朝鮮通信使—江戸日本の誠信外交—、仲尾宏著』（岩波書店、2007年）
- g. 尾張藩・富山藩・金沢藩・福井藩・南部藩・仙台藩・庄内藩関係
- 『愛知県歴史の道調査報告書3. 佐屋街道：文化財調査報告書 第58集、愛知県教育委員会文化財課編』（愛知県教育委員会、1990年）
- 『愛知県歴史の道調査報告書4. 美濃街道・岐阜街道：文化財調査報告書 第59集/愛知県教育委員会文化財課編』（愛知県教育委員会、1989年）
- 『慶長 越前国絵図、江戸幕府撰慶長国絵図/川村博忠編』（柏書房、2004年）
- 『越中旧事記・越中地誌、青木北海著：越中資料叢書』（歴史図書館、1973年） [GC89-10](#)
- 『呻吟味御触書、高瀬保編：越中史料集成4』（桂書房、1992年） 「」
- 『三壺記、日置謙編：加賀藩史料 第3編（寛永十八年—寛文二年）所収』（清文堂出版、1980年）
- 『加賀藩史料第1編—第15編 泰雲公御年譜・政隣記ほか』（清文堂出版、1980—81年）
- 『参勤交代道中記 加賀藩史料を読む、前田敏男著』（平凡社、1993年）
- 『大日本大橋見立相撲番付：岩国橋屋和兵衛発行』（金沢市立玉川図書館 [村松コレクション]）
- 『片簞記、伊藤作右衛門著：福井県郷土叢書 第2集所収』（福井県立図書館、1955年）
- 『宮川五郎右衛門家文書：福井県史 通史編 近世一 所収』（福井県、1994年）
- 「第三章 第四節 越前・若狭の浦々 二 浦々の負担 高木舟橋と裏方」
- 『越前国名蹟考、井上翼章編：福井県郷土叢書 第5集所収』（福井県郷土誌研究会、1958年）
- 『奥州道中増補行程記、清水秋全著』（盛岡市中央公民館所蔵）
- 『雑書 南部藩家老席日記 第1巻—第16巻（1644—1738）』（盛岡市中央公民館所蔵、雄松堂フィルム出版（35mmマイクロフィルム 158リール））
- 『家老席日記覚書 盛岡南部家文書 慶応編』（岩手県立博物館覚書編集委員会編、新南部叢書別巻、東洋書院、2000年）
- 『封内風土記考 第1巻—第3巻、田辺希文著、鈴木省三校：仙台叢書第1—5輯』（宝文堂、1975年）
- 『岩手県史 第4巻 近世編 第1 仙台藩 附一ノ関藩』（杜陵印刷、1963年）
- 『岩手県史 第5巻 近世編 第2 盛岡藩 附八戸藩』（杜陵印刷、1963年）
- 『宮城県史 第26巻 資料編第4、宮城県史編集委員会編』（宮城県史刊行会、1958年）
- 「風土記御用書出（安永風土記）登米郡、桃生郡、牡鹿郡、本吉郡」

- 『一関市史 第7巻 資料編2、一関市史編纂委員会編』（一関市、1977年）
- 『盛岡御城下古絵図、石井鶴亭画』（盛岡市中央公民館蔵）
- 『天保國絵図 出羽国庄内領』（国立公文書館蔵）
- 『山形県歴史の道調査報告書〔2〕、〔3〕奥の細道1、2』（山形県教育委員会、1979、80年）
- 『山形県歴史の道調査報告書〔14〕奥の細道総集編』（山形県教育委員会、1981年）
- 『山形県歴史の道調査報告書〔11〕浜街道』（山形県教育委員会、1981年）
- h. そのた舟橋関係近世史料
- 『近世交通史料集 1-6、児玉幸多校訂』（吉川弘文館、1967-72年）
- 「1. 五街道書物類寄上」、「2. 五街道書物類寄下」、「3 御伝馬方旧記」、「4. 東海道宿村大概帳」、「5. 中山道宿村大概帳」、「6. 日光・奥州・甲州道中宿村大概帳」
- 『中山道宿村大概帳、児玉幸多校訂：近世交通史料集5』（吉川弘文館、1971年）
- 「武佐宿」
- 『近世交通史料集 8・9 幕府法令上・下編、児玉幸多編』（吉川弘文館、1978、79年）
- 『五街道取締書物類寄 下 式拾之帳、児玉幸多校訂：近世交通史料集2』（吉川弘文館、1968年）
- 「川口善光寺開帳中 荒川通り仮橋掛渡之儀ニ付、相伺候書付 文政十一年（1828）正月」
- 『慶長年中卜齋記、近藤瓶城編：改訂史跡籍集覧 第26冊所収』（臨川書店、1984年【近藤活版所明治35年刊の複製】）
- 『武江年表12巻、斎藤幸成（月岑）著：江戸叢書巻の十』（名著刊行会、1964年）
- 『群馬県史 資料編13、群馬県史編さん委員会編』（群馬県、1985年）
- 「空ヶ橋仕来り御尋書上帳 延享二（1745）」
- 『子持村誌、角田恵重編』（子持村教育委員会、1968年）
- 「近世 交通四（一）三国街道1. 空ヶ関所 2. 北牧宿」、「（二）沼田道西通り」
- 『日光・奥州・甲州道中宿村大概帳』（近世交通史料集6/児玉幸多校訂、吉川弘文館、1972）
- 『木曾街道六十九次、歌川広重作』（東京国立博物館所蔵）
- 「武佐宿」
- 『夢の百橋、葛飾北斎作』（社団法人 日本浮世絵博物館蔵）
- 『近世交通史料集9 幕府法令 下、児玉幸多校訂』（吉川弘文館1979）
- 「將軍進發につき東海道宿々疲弊状況書上 慶応元年（1865）」
- 『東京市史稿 橋梁編 第1「承和2年（835）-享保18年（1733）」、第2「享保19年（1743）-安永3年（1774）」、東京市役所編』（臨川書店、1973年）
- 『東京市史稿 市街編 全87巻』（臨川書店、1993-98年）
- 『寛政重修諸家譜 第1-第22巻、堀田正敦等編』（続群書類従完成会、1964-66年）
- 『江戸幕府役職武鑑編年集成 第1巻（正保元年-寛文12年）-第36巻（慶応3年-明治元年）、深井雅海、藤実久美子編』（東洋書林、1996-99年）
- 『御府内備考 第1巻-第6巻、蘆田伊人編修校訂：大日本地誌大系 第1巻-第6巻』（雄山閣、2000年）
- 『飛州誌、長谷川忠崇著：活字本飛騨叢書1』（住井書店、1909年）
- 『斐田後風土記 上、富田礼彦著：大日本地誌大系第23巻』（雄山閣、1977年）
- 「首巻 藤橋・舟橋・籠渡」
- 『紀行文集 続 岸上質軒編校訂：続帝国文庫第24編』（博文館、1909年）
- 「丙辰紀行、林道春著」、「こし路紀行、礎一峰著」
- 『近世紀行集成、板坂耀子校訂：叢書江戸文庫 17』（図書刊行会、1991年）
- 「壬申紀行、貝原益軒著」、「未曾有記、遠山景晋著」
- 『東西遊記1,2(1782-88)、橘南谿著、宗政五十緒校注』（平凡社、1974年）
- 『東遊雑記 奥羽・松前巡見私記、古川古松軒著、大藤時彦解説』（平凡社、1964年）
- 『菅江真澄遊覽記 第1-第5(1783-1808)、菅江真澄著、内田武志、宮本常一編訳』（平凡社、1965-68）

- 『北行日記、高山彦九郎著、竹内利美ほか編：日本庶民生活史料集成第3巻 探検・紀行・地誌東国編』（三一書房、1969年）
- 『東北遊日記、吉田松陰著：活字本吉田松陰全集10巻 日本思想大系54巻』（岩波書店、1978年）
- 『曾良 奥の細道随行日記、河合曾良著、翻刻本編者山本安三郎』（小川書房、1943年）
- 『諸国名橋奇覽、葛飾北斎作』（群馬県立博物館所蔵）
「こうつけ佐野ふなはしの古づ」
- 『夢の百橋、葛飾北斎作』（日本浮世絵博物館所蔵）
- i. 近世和船・筏およびイカリ、ろくろ・しゃち、係留網・鎖、舟橋構成材料、施工・請負関係史料
- 『地方凡例録 卷之九上、大石久雄原著、大石信敬補訂、大石慎三郎校訂：日本史料選書1. 地方堤防全書 地方凡例録』（近藤出版社、1969年）
「牛の種類と分布(棚木牛・笈牛・菱牛・尺木牛・聖牛・大聖牛)」
- 『土木工要録5冊(天・地・人・付録図2丁)内務省土木局編、高津儀一著』（有隣堂、1881年）
- 『日本の水制、山本晃一著』（山海堂、1996年）
- 『日本の伝統的河川工法I、II、宮野章著』（信山社、2002年）
- 『河川伝統技術データベース：分類別リスト(水制・護岸)』（国土交通省）
【milit.go.jp/riverpamphlet_jirei/kasen/rekisibunka/kasengijyutsu07_03.html】
- 『利根川図誌、赤松宗旦著、柳田國男校訂』（岩波書店、1994年）
- 『揖保川高瀬舟史料、宇野正三編』（宇野正三、1992年）
- 『利根川高瀬船、渡辺貞二著』（崙書房、1990年）
- 『船鑑 享和二年(1802)幕府作成』（船の科学館所蔵）
- 『和漢船用集 第一巻—第十二巻、金澤兼光著、住田正一編』（巖松堂書店、1944年）【宝暦十一年（1761）刊行】
「巻第五 舟名敷川御座船并江湖舟之部」
「巻第十 船處之名部 附銅鐵之具」
「巻第十一 用具之部 附網類之部」
- 『近世日本の川船研究 上・下、川名登著』（日本経済評論社、2003 - 04年）
- 『今西家船繩墨私記坤、今西幸蔵著：日本庶民生活史料集成 第10巻所収』（三一書房、1970年）
- 『農具便利論、大蔵永常著、堀尾尚志翻刻・現代語訳・解題：日本農書全集 第15巻所収』（農山漁村文化協会、1977年）
「杭打船并二杭打之図」、「杭拔道具・杭拔船」、「石釣船の図」、「二挺立轆轤船の図」、「岡轆轤の図」
- 『岡崎市史 矢作史資料編、岡崎市矢作史料編纂委員会編』（国書刊行会、1988年）
「図版七三 矢作橋杭打図額（橋杭震込作業絵馬）延宝二（1674）三刃碧海郡矢作河」（矢作神社蔵）
- 『人倫訓蒙図彙、源三郎〔絵〕：日本古典全集第3期〔第6〕』（日本古典全集刊行会、1928年）
- 『人倫訓蒙図、田中たち子、田中初男編ならびに解説：家政学文献集成 続編第9冊』（渡辺書店、1969年）
- 『斐太後風土記 上・下：大日本地誌大系第23,24巻』（雄山閣、1977年）
「卷之十七 益田郡阿多野郷」
「附録 国産諸品賣出價概記 明治三年（1870）」
- 『江戸後期産物帳集成 第8巻 飛騨・山城・紀伊』（科学書院、2000年）
- 『天工開物、宋応星撰、藪内清訳注』（平凡社、1969年）
- 『天工開物の研究、藪内清編：京都大学人文科学研究所研究報告』（恒星社厚生閣、1953年）
「前編 天工開物の研究、藪内清他」、「後編 天工開物訳注・原文」
- 『農業全書 卷六 三. 草之類、宮崎安貞編録、貝原楽軒冊補、土屋喬雄校訂』（岩波書店、1948）【徐光啓編『農政全書』を参考に編集】
「第二 麻苧（からむし）」、「第三 麻（大麻・油麻）」、「第五 櫻欄（しゅろ）」
- 『重訂本草綱目啓蒙1-4、小野蘭山著、正宗敦夫編集校訂：復刻日本古典全集』（現代思潮新社、2006年）
- 『和漢三才図会、寺島良安編、複製 和漢三才図会刊行会編』（東京美術、1995年）

「卷第三十四 船橋類、橋船具」

『天保国絵図 出羽国 (庄内領)』(国立公文書館収蔵)

『七十一番職人歌合、職人尽絵、彩画職人部類；江戸古典叢書/編集委員 青木国夫 [等]』(恒和出版、1977年) M32-28

『職人尽図、狩野吉信筆、三原昭治編』(防日新聞社、1987年)

『職人歌合、網野善彦著』(岩波書店、1892年)

『江戸買物独案内、中川芳山堂編』(渡辺書店、1972年 [文政7年(1824)版の複製本])

『江戸名所絵図 第1冊-第10冊、斎藤幸雄著』(新典社、1979-84年 [大和屋文庫所蔵の複製])

『東海道名所図会、秋里籬鳥ほか』(複製版 新典社、1984年)

『西関宿誌、北村常次郎著』(北村常次郎、謄写版、1960年)

『関宿誌、奥原謹爾著』(関宿町教育委員会、1973年)

『技術の社会史 第2巻 在来技術の発展と近世社会、佐々木潤之助編』(有斐閣、1983年)

『建築指図を読む、川上貢著』(中央公論社美術出版、1988年) KA74-G14

『日本建築史論考、川上貢著』(中央公論社美術出版、1998年) KA71-E4

『図説 藁の文化、宮崎清著』(法政大学出版局、1995年)

『江戸参府旅行日記(日本誌)、ケンペル著、斎藤信訳』(平凡社、1997年) 原著名[Geschichte von Beschreibung]

「第二章 長崎から江戸に至る水路ならびに陸路」、「第十一章 浜松から江戸まで」、「第十五章 江戸から長崎まで」

『江戸参府随行記、ツェンペリー著、高橋文訳』(平凡社、1994年)

「日本への航海 出島」

『江戸参府紀行、ジーボルト著、斎藤信訳』(平凡社、1967年)

「一八二六年江戸参府紀行の序」

「六 京都から江戸への旅」

『ジーボルトの日本報告、シーボルト、栗原福也編訳』(平凡社、2009年)

「出島植物園よりバタフィアへ送付する植物のリスト 出島 1827年11月」

『苧麻・絹・木綿の社会史、永原慶二著』(吉川弘文館、2004年)

『明治以前日本土木史 第四編 第五章 橋梁 舟橋』(土木学会、1936年)

「福井舟橋」、「房川船橋」

『近世史用語事典、村上直編』(新人物往来社、1993年)

『図説 江戸町奉行事典、笠間良彦著』(柏書房、1991年)

『江戸の本屋さん 近世文化史の側面、今田洋三著』(平凡社、2009年)

4) 日本近代および現代の浮橋史料

a. 明治政府道路行政史料・新聞記事など

『布達第七百三十五號』(明治元年(1868)9月12日)

「駅遞規則：一 駅遞乃法則ハ総テ駅遞司ニテ確定シ府藩縣其法則ヲ守リ遠近諸道一般ニ取締可申事」

『太政官布達第二百二號』(明治4年(1871)4月15日)

「諸道所々假橋新設從來手當廢止ニ付舊制並ニ意見ヲ開申セシム」

『太政官布達第六百四十八號』(明治4年(1871)12月14日)

「治水修路架橋運輸ノ便ヲ興ス者ニ入費税金徴収を許ス」

『大蔵省第十三號』(明治6年(1873)2月11日)

「生糸改会社規則ヲ定メ会社ヲ設立セシム」

『大蔵省番外(號外) 達』(明治6年(1873)8月2日)

「河港道路修築規則」

『太政官達第六十號』(明治9年(1876)9月8日)

- 「道路ノ等級ヲ廃止シ國道縣道里道ヲ定ム」
- 『内務省達乙第十七號』(明治11年(1878)4月9日)
- 「人民架橋ノ橋梁渡津軍隊行進ノ節賃錢請求ヲ許サス」
- 『内務省達乙第六十二號』(明治14年(1881)12月9日)
- 「私費架設ノ橋梁渡津及開鑿ノ道路等憲兵通行ノ節賃錢ノ請求ヲ許サス」
- 『内務省達乙第六十六號』(明治15(1882)年12月9日)
- 「人民私費架設ノ橋梁渡津道路等電信配達ノ時ニ限り賃錢ノ請求ヲ得ス」
- 『内務省達乙第三十一號』(明治16年(1883)6月19日)
- 「郵便局印鑑所持ノ郵便脚夫ニ対シ人民私費開設ノ橋梁渡津及私費開鑿ノ道路ニ於テ賃錢ノ請求ヲ得ス」
- 『東京府令第五十三號』(明治27年11月11日)
- 「本年勅令第十五號消防組規則ニ依リ設置シタル消防組員ニシテ火災警防演習等ニ際シ一定ノ服装ヲ為シ人民私設ノ道路橋梁渡津ヲ通行スルトキニ限り其ノ賃錢ヲ請求スヘカラス」
- 『勅令第百八十一號』(明治35年5月29日)
- 「朕土木監督署技監俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム 土木監督署技監ノ年俸ハ三千円トス」
- 『内務省訓令第十號』(明治38年(1905)4月1日)
- 「内務省土木出張所處務規定」
- 『内務省史 第3卷、大霞会編』(原書房、1980年) AZ333-20
- 「第二編 第五章 土木行政」
- 『内務省の社会史、副田義也著』(東京大学出版会、2007年) AZ333-H10
- 『戸長役場 史料論(四・完)、丑木幸男著』(史料館研究紀要第8号、1997年)
- 『資料 御雇外国人、ユネスコ東アジア文化研究センター編』(小学館、1975年)
- 『交通運輸の発達と技術革新 歴史的考察、山本弘文編』(国際連合大学、1986)
- 「第2章 移行期の交通運輸事情—1896~1891(明治元~24年) — I 政策/(増田廣實著)(1)明治初期の運輸政策」**明治民営有料橋の記述なし**
- 『橋梁史年表』(海洋架橋調査会、1965年)
- 『日本道路史年表』(日本道路協会、1972年)
- 『主要建造物年表』(東京建設業協会、1989年)
- b. 明治天皇の巡幸の浮橋
- 『駿河国富士郡岩本村文書 附、富士川交通史料写』(国文学研究資料館史料館蔵)
- 「三四八 御東幸ニ付富士川御船橋掛渡方仕様御入用仕上帳 一冊 明治二(1869)」
- 『豊田町誌 別編1. 付録1 東海道と天竜川池田渡船 渡船史料、豊田町誌編さん委員会編』(豊田町、1999年)
- 「一八五 東幸につき天竜川に船橋を架す 明治元年(1868)六月」(磐田市水野辰郎氏蔵『水野家覚書』)
- 『明治天皇行事年表、矢吹活禪編集』(東京大学出版会、1982年)
- 『明治天皇巡幸 内務省史第3卷、大霞会館編』(原書房、1980年)
- 『明治ニュース事典 第1卷 慶應4年—明治10年、明治ニュース事典編纂委員会・毎日コミュニケーションズ出版部編集』(毎日コミュニケーションズ、1983年)
- 『明治ニュース事典 第3卷 明治16年—明治20年、明治ニュース事典編纂委員会・毎日コミュニケーションズ出版部編集』(毎日コミュニケーションズ、1984年)
- 「明治18年8月12日官報：岡山から三石に御着御」
- b. 関東地方の明治有料舟橋史料
- 『明治行政文書』[略記号 埼玉県=埼. 群馬県=郡. 東京市・東京府=東、明=明治行政文書]
- 『郡. 文書館史料2062 著名社寺鉅泉等調書 明治十五年(1882)』(群馬県立文書館蔵)
- 「上野国橋梁船賃表 明治十六年(1883)2月」

- 『郡. 文書館史料 M76 1/3、M76 2/3』(群馬県立文書館蔵)
- 『郡. 文書館史料「M76 3/3 渡船場 駅甲第一号 船橋架設之儀伺「明治十六年(1883)十一月」(群馬県立文書館蔵)
- 『郡. 文書館史料 近世1、番外[黒崎芳衛家文書]「吾妻川船橋関係並びに歌舞伎興行願」』
- 『郡. 文書館史料「上野国勢多郡北第三区小一区岩神村(現、群馬県前橋市岩神町)地図」』
- 『埼. 明 1736 - 1-25 利根川通中瀬村地先船橋 [中瀬舟橋] 関係書類 1882. 12. 13-1899. 04. 31』
- 『埼. 明 1546 - 1-40 利根川通妻沼村地先船橋 [妻沼舟橋] 関係書類 1884. 03. 14-1898. 01. 15』
- 『埼. 明 1761 - 1-6 利根川通小島村地先船橋 [小島舟橋] 関係書類 1888. 07. 24-1888. 10. 26』
- 『埼. 明 1751 - 1-7 利根川通大越村地先船橋 [大越舟橋] 関係書類 1886. 03. 18-1892. 05. 20』
- 『埼. 明 1766 - 1-17 利根川通新郷村地先船橋 [川俣舟橋] 関係書類 1888. 02. 20-1897. 12. 02』
- 『埼. 明 1744 - 1 利根川通群馬県下名和村埼玉県下旭村間船橋 [八斗島船橋] 関係書類』 1888. 7. 24-1888. 10. 26』
- 『埼. 明 2941 思川、渡良瀬川船橋関係』
- 『埼. 明 1762 - 1-8 荒川通馬室村地先船橋 [馬室舟橋・御成河岸舟橋] 関係書類』 1889. 02. 25-1894. 10. 25』
- 『埼. 明 1909 - 1-34 荒川通古谷村地先船橋 [上江橋] 関係書類 1884. 02. 02-1899. 12. 27』
- 『埼. 明 1910 - 1-37 荒川通平方村地先船橋 [開平橋] 関係書類 1883. 06. 22-1897. 05. 24』
- 『埼. 明 1762 - 1-8 荒川通馬室村地先船橋 [御成河岸舟橋・馬室橋] 関係書類 1883. 6. 22-1897. 5. 24』
- 『埼. 明 1708 - 2-3 荒川通戸田橋関係書類 1875-80』
- 『埼. 明 [私営工事] 1720 - 1 荒川通戸田橋関係書類 1881. 2』
- 『埼. 明 [私営工事] 1720 - 2 渡良瀬川通向古河村地先船橋 [渡良瀬浮橋] 関係書類] 出願仕様明細書 1883. 5』
- 『埼. 明 [私営工事] 1720 - 3 古谷本郷浮橋二件同時出願関係書類 1890』
- 『埼. 明 [私営工事] 1720 - 4 荒川通川口町地先船橋 [川口船橋] 命令書 1891』
- 『埼. 明 [私営工事] 1720 - 6 北埜. 柏土村、茨城県西葛飾郡悪土新田西村間船橋関係書類』
- 『埼. 明 [私営工事] 2429 - 1-2 2.2 戸田橋賃銭揚高届]、2.2 妻沼橋賃銭揚高届]、2.3 中瀬橋賃銭揚高届] 1895. 01-1895. 12』
- 『埼. 明 1751 - 5 報告統計(県土木部) 明治十一年-明治28年』
- 『埼. 明 2429 - 1 明治二十八年戸田橋決算報告書 1896. 1-1896. 12』
- 『埼. 明 1718 - 1-2 渡船橋梁免許台帳 1877. -1885』
- 『埼. 明 1752 - 1 渡船橋梁免許台帳 1886』
- 『埼. 明 [特殊事業] 2530 - 1-3 明治三十九年(1907) 上江橋決算 1908』
- 『埼. 明 [特殊事業] 2530 - 1-7 明治三十九年(1907) 明治架橋会社決算 1908』
- 『埼. 明 [特殊事業] 2530 - 1-12 明治三十九年(1907) 妻沼橋決算 1908』
- 『埼. 明 [雑款] 2530 - 3 町村土木補助事業 県土木部土木課起草 1907. 05. 13』
- 『埼. 行政文書 1119 大正九年地理部統計: 第拾貳 賃銭橋 1920』
- 『東. 北区史 資料編 第二編 近代 第五節 渡船・船橋』(東京都北区、1996)
- 「149 船橋架設に関する川口町長の具申書 1902. 11. 28」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「150 船橋架設に関する岩淵町長の添申書 1902. 11. 29」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「151 賃取船橋架設願の件につき取調書 1902. 11. 28」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「156 上流町村長から岩淵・川口間架橋に対する請願書 1905. 11. 09」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「157 志・赤塚両村長から船橋架設違反工事差止上申書 1905. 11. 14」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「158 北豊島外二郡回漕業者及び船持総代から船橋除去の請願書 1905. 11. 21」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「162 北豊島外二郡回漕業者及び船持総代から船橋除去の請願書 1905. 12. 01」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「166 荒川筋私設船橋竣工検査復命書及び出張ノ概要 1906. 04. 09」(明治三十九年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)
- 「168 船橋賃銭追加願 1912. 03. 22」(明治四十五年文書類篇・土木 東京都公文書館蔵)

『東京府北豊島郡岩淵町埼玉県北足立郡川口町地先荒川架渡船橋設計図』

『新編埼玉県史 資料編 21 近代・現代 3 産業・経済 1 第一部 殖産興業期 —明治前期— 第二章 新しい交通・通信制度の発足 第一節 明治前期の内陸交通、第四章 在来工業の動向と近代工場の設立 第一節 蚕糸業の展開』(埼玉県、1982年)

第二章:「4 戸田橋架橋願 明治6年」、「5 運輸諸会社一覧 明治7年8月付」、「6 管内渡船箇所及賃銭書 [利根川筋 19ヶ所、荒川筋 15ヶ所、古利根川筋 15ヶ所、庄内古川筋 7ヶ所、渡良瀬川筋 3ヶ所]」

第四章「52. 生糸改会社設立願」、「56. 明治10年代における蚕糸業の概況」、「60. 明治23年における本県製糸の現況」

『新編埼玉県史 資料編 21 近代・現代 3 産業・経済 1 第二部 —明治後期— 第二章 鉄道の発達 第一節 私有鉄道の敷設、第二節 舟運と道路輸送』(埼玉県、1982年)

「91. 明治20年代荒川流域舟運の概況」、「92. 明治20年代中川流域舟運の概況」、「93. 公益道路調」

『横浜市史 資料編 第1 外国貿易諸色』(横浜市、1960年) 213. 7-Y6852y2

『横浜市史 第三巻 上 明治前期の横浜』(横浜市、1963年) 213. 7-Y6852y2

『近代足利市史 第4巻 資料編 近現代1 行政・教育』(足利市、1975年)

「渡良瀬川緑町渡舟橋 明治9年(1876)11月」、「渡良瀬川東町渡 明治9年11月」

『利根川半田渡舟橋写真』(金幣アルバム、1890年代)

c. 長野県の明治有料舟橋史料

『長野県町村誌 第1巻—第3巻/長野県編纂』(長野県町村誌刊行会、1936年)

「第1巻 北信編」、「第2巻 東信編」、「第3巻 南信編」

『長野県史 近代史料編 第7巻 交通・運輸・橋梁等』(長野県、1981年)

「一六三 伊奈県宛伊奈郡飯島町宮下権四郎外小田切川等橋普請につき伺い 明治四年(1871)六月」

「一六四 小諸県宛佐久郡塩名田宿等千曲川付郷廃止橋銭取立之儀につき申上書 明治四年(1871)九月」

「一六五 小諸郡中之条・諏訪郡両村間千曲川船橋設置申付けに付上田県伺 明治四年(1871)十月」

「一六六 筑摩県塩尻出張所橋梁等民間設置差許 太政官布告回達 明治五年(1872)一月」

「一六七 大蔵省宛埴科郡屋代宿千曲川船橋民間新営につき長野県伺 明治五年(1872)四月」

「一六八 大蔵省宛更科郡丹波島宿犀川渡船請負賃銭改正に付長野県伺 明治五年(1872)五月」

「一六九 長野県渡船賃無許可請取禁止達 明治六年(1873)五月」

「一七〇 内務卿宛犀川市村渡舟場船橋新営許可長野県伺 明治六年(1873)」

「一七五 県令宛水上内郡赤沼村千曲川立ヶ花船橋村営架設許可嘆願書 明治十五年(1882)三月」

「一七六 県令宛下高井郡木島村等千曲川木島飯山間船橋渡賃取立許可願 明治十五年(1882)五月」

「一七八 県下著大橋規模等調 明治十六年(1883)十二月」

「一八〇 更科郡更科村・第一区長等千曲川二郡橋維持締約書 明治二十三年(1890)十二月」

「一八一 知事宛県会丹波島橋・篠ノ井橋」 県費買収建儀書 明治三十年(1897)十一月」

「一八二 知事宛更科郡町村長丹波島橋・篠ノ井橋」 県當移管上申書 明治三十年(1897)」

「一八三 千曲川屋島福島船橋会社規約書 明治三十一年(1898)二月」

「一八五 知事宛下高井郡中野町長等千曲川立ヶ花橋県費架設請願書 明治四十年(1907)十二月」

「一八六 知事宛県会千曲川立ヶ花橋県費木橋架替意見書 明治四十年(1907)十二月」

「一八七 知事宛県会千曲川村山橋架替意見書 明治四十年(1907)十二月」

「一九一 県下路線・構造別橋梁調べ 十二 著大橋梁ノ一(長三十間以上) 県當ニ係ルモノ、十三 著大橋梁ノ二(長三十間以上) 郡市町村費・寄付金・私費ヲ以テ架設セシモノ 大正二年(1913)十二月現在」

『長野県歴史の道調査報告書 31 千曲川、長野県教育委員会編』(長野県教育委員会、1991年)

『長野県歴史の道調査報告書 32 犀川、長野県教育委員会編』(長野県文化財保護協会、1992年)

『須坂市史』(須坂市、1981年)

『天竜川の橋、日下部新一著:語りつぐ天竜川 第3巻 所収』(中部建設協会、1994年)

『東春近村誌、東春近村誌編集委員会編』(東春近村誌刊行会、1972年) gc119-56

『上水内郡並長野市史料写真帖、信濃教育会上水内会編』（信濃教育会上水内会、1924年）YD5-H-416-98
『須坂・小布施・高山・若穂百年史：写真集』（須坂新聞社、1981年）
『中山道塩名田宿千曲川舟橋写真』（長崎大学図書館所蔵）
『なつかしの写真館 小舟渡橋』（勝山市・上志比村、2002年）

d. 東北および北陸地方の有料舟橋史料

『岩手県史 第8巻 近代篇3』（杜稜印刷、1963年）
「四 陸運会社の出現」、「五 道・橋・船・人力車」
『北上川の橋、岩根哲也著』（日刊岩手建設工業新聞社、1995年）
『北上川の舟運』【miyaginet08/kitakami/hunaunn/hunaunn01.htm】
『北上川舟橋写真』
「米谷ノ船橋」、「登米町来神橋（米谷ノ船橋）」、「錦桜橋（中田町）」、「狐禅寺舟橋（一関市立博物館蔵）」
『図説盛岡四百年 下巻1 明治・大正・昭和編：世相・生活文化 近代百年の歩み、吉田義昭、及川和哉編著』（郷土出版社、1991年）
『岩手県 歴史の道調査報告書 奥州道中、岩手県教育委員会事務局文化財課編：岩手県文化財調査報告書36集』（福島県教育委員会、1979年）
『福島県史 第11巻 資料編 第6（近代資料第1）交通（陸上）』（福島県、1964年）
「二一四 賃橋賃渡船明細表 明治二十七年（1894）」
「二一七 松齡橋賃請求継続許可 明治三十六年（1903）一月」
「二二二 回漕に関する取調書 明治三十一年（1898）十月」
『福島市史資料叢書、福島市史編纂委員会編：第25輯』（福島県教育委員会、1971年）
「明治初期御用留帳」
『福島市史資料叢書、福島市史編纂委員会編：第27輯、28輯「新聞資料集成 明治の福島1,2」』（福島県教育委員会、1973, 74年）
「1-五八 松齡橋事件の紛議落着 明32・6・2 民報」、「2-二五 松齡橋賃の廃止 明37・8・2 「2-八二 松齡橋架橋計画 明40・9・18 民友」、「2-一八九 松齡橋仮橋成る 大元11・2 民友」
『福島市史資料叢書、福島市史編纂委員会編：第36輯、第40輯、第43輯』（福島県教育委員会、1982, 1984, 1985年）
「信達二郡村誌1」、「信達二郡村誌2」、「信達二郡村誌附録」
『福島県土木史 第6編、橋梁福島県土木部監修』（福島県建設技術協会、1990年）
「第2章 道路橋に関する技術的基準の変遷」、「第3章 大化の改新から江戸時代までの橋梁」、「第4章 明治時代の橋梁」、「第5章 大正時代の橋梁」
『福島県 歴史の道調査報告書 奥州道中、福島県教育委員会編：福島県文化財調査報告書 第121集』（福島県教育委員会、1983年）
『文化福島』（福島県文化振興事業団、2002年、5月号）
「奥安達百目木駅八景図」
『文化福島』（福島県文化振興事業団、2004年、11月号）
「福島県下岩代国福島町境界大隈川紅葉山及舟橋真景図」（福島市 安斉勇雄蔵）
『あぶくま川データベース 郡山出張所グラフィティ Vol.1.55. : 国土交通省 福島河川国道事務所 郡山出張所』
『明治19年の錦桜橋（賃取船橋）』（中田町元町長三浦五郎蔵）
『宮城県史 第3 近代史』（宮城県史刊行会、1964年）
『丸森町史 史料編、丸森町史編さん委員会編』（丸森町、1980年）
『丸森町史 通史編、丸森町史編さん委員会編』（丸森町、1984年）
『本宮町史 第3巻（通史編3）近現代 第1章 近代国家の発足と本宮地方』（本宮町、2001年）
「4 蚕糸業」、「橋梁および舟運」

- 『本宮町史 第10巻各論編 第Ⅲ編 建設・災害・開発 第1章 一般土木 第1節 道路交通』(本宮町、1993年)
- 『東蒲原郡史 資料編6 近現代』(東蒲原郡史編さん委員会、2003年)
- 「一六七 常浪川城山下の渡しを船橋とする約定証書 明治九年(1888)三月」
- 「一六八 船橋架設に付き身元保証書 明治二十一年(1876)十月」
- 『神通川舟橋写真』(富山市郷土博物館蔵)
- 『福井県史 資料編10 近現代1 6 運輸・土木1 道路と港湾の整備』(福井県、1983年)
- 「一六三 九頭竜川通架橋の建設 明治八年(1875)八月」
- 『福井県土木史/福井県建設技術協会編』(福井県建設技術協会、1983年)
- e. その他の有料舟橋史料
- 『豊田町史 通史編 第1章 近代国家と豊田』(豊田市、1996年)
- 『豊田町史 別編1 附録1. 東海道と天竜川池田船橋』(豊田市、1999年)
- 「渡船史料197 池田船橋の仕様書・見積書・願書 明治6年(1873)6月」
- 『明治前期関東平野地誌図修成:1880(明治13)年~1886(明治19)年、地図資料編纂会編』(柏書房、1989年)
- f. 大正有料舟橋史料
- 『埼.大正行政文書1119 渡船・道路・賃銭橋調査』
- 「第拾貳賃銭橋 大正九年(1920)」
- 『埼.大正行政文書 内務省土木局長発第一五八号 統計材料調査方之件照会[土木局統計表記載例]』
- 『埼.大正行政文書1991 江戸川通西宝珠花村地先船橋関係書類』
- 『関宿町誌、奥原経営編』(奥原経営、1923年)
- 『庄和町之百年』(庄和町教育委員会、1975年)
- 「六 宝珠花の船橋(宝橋)と永久橋」
- 『春日部・庄和町の歴史 粕壁宿と西宝珠花河岸』(春日部市郷土資料館、2007年)
- 『福島県史 第12巻 資料編第7(近代資料第2) 経済(交通)』(福島県、1966年)
- 「八三 松齡橋鉄橋架設理由書 大正十三年(1924)十一月」
- 『長野県史 近代史料編 第7巻 交通・通信 橋梁等。』(長野県、1981年)
- 「各郡長宛県内務部長私永橋梁等公営化につき通牒 大正九年(1920)一月」
- 「大正13年(1924)12月県下路線・構造別橋梁調べ」
- g. 昭和および現代の浮橋
- 『大札記念国産振興東京博覧会について、倉橋藤次郎著』(倉橋藤次郎、1928年)
- 『大札記念国産振興東京博覧会協賛会事務報告(東京都公文書館蔵)』(大札記念東京博覧会協賛会、1928年)
- 『茨城県条例 第39号「利根川の船橋及び渡船施設通行の等の料金徴収条令」』(昭和42年(1977)10月14日公布)
- 『茨城県規則 第73号「利根川の船橋及び渡船施設通行の等の料金徴収条令施行規則」』(昭和42年(1977)11月15日制定)
- 『西関宿誌 関宿関所と船橋、著喜多村常次郎著』(喜多村常次郎、1960年)【謄写版】
- 『関宿誌、奥原謹爾著』(関宿町教育委員会、1973年)
- 「関宿橋と境橋」
- 『下総 境の生活史』(茨城県境町、2005年)
- 「バス路線の開通と船橋の架設」
- 『新編埼玉県史 資料編22 近代・現代4 産業・経済2 第4節 恐慌期。』(埼玉県、1986年)
- 「81 東武鉄道昭和五年(1930)前期事業報告書(昭和5年第66回)」
- 『境舟橋写真』(境町歴史民俗資料館蔵)

- 『関宿舟橋写真』(関宿城博物館蔵)
- 『川口舟橋写真』(東京都北区飛鳥山博物館蔵)
- 『東葛流山研究 第14号』(流山市立博物館友の会事務所、2007年)
「東葛の湖沼と河川」
- 『運河に架かる橋：ランダム・ウオーク・イン・コーベ26、神戸市立図書館編集』(神戸の本棚 第26号、1998.03.10)
- 『大洲市誌 写真版、大洲市誌編纂委員会編』(大洲市誌編纂会、1974年)
- 『大洲市誌 市制、四十周年記念版増補 改訂、大洲市誌編纂委員会編』(大洲市誌編纂会、1996年)
- 『写真集 明治大正昭和：ふるさとの思い出184、大槻幹雄著』(図書刊行会、1981年)
- 『佐賀市の川と橋』(佐賀市建設部監理課、1993)
「喜瀬川宇治端渡しの舟橋」

h. 日本陸軍浮橋

・工兵全般

- 『陸軍省沿革史：自明治32年至大正15年、陸軍省編』(最南堂書店、1969年)【陸軍省昭和4年刊の複製】AZ661-1
- 『失敗の本質：日本軍の組織論的研究、戸部良一〔他〕』(ダイヤモンド社、1984年)
- 『日本兵器沿革史』(陸軍文庫、1880年) YDM51183
- 『日本陸軍工兵史、吉原矩著』(九段社、1958年)
- 『軍備拡張の近代史：日本軍の膨張と崩壊、山田朗著』(吉川弘文館、1997年)
- 『大本営陸軍部6、防衛庁防衛研修所戦史室編』(朝雲出版社、1973年)
- 『日本工兵写真集、日本工兵写真集編集委員会』(原書房、1980年)
- 『帝国および列国の陸軍：昭和13年版』(陸軍省、1983年) A651-109
- 『日本陸軍の軍事技術戦略と軍備構想について—第一次世界大戦後を中心として—、横山久幸著』(『防衛研究所紀要』第3巻、第2号2000.11)
- 『昭和陸軍の研究 上・下著保阪正康著』(朝日文庫、2006年)AZ663-H47
- 『帝国陸軍陸戦兵器ガイド：1872-1945、UTP実行委員会著、松代守弘監修』(新紀元社、1997年)
- 『防衛用語辞典、真邊正行編著』(国書刊行会、2000年)
- 『新軍事情用語集：英和・和英対訳、金森國臣編』(日外アソシエーツ、2007年) A112-H401
- 『日米軍事情用語辞典 英和・和英』(Ginowan City, Okinawa Japan, Yojushorin)、[『A Dictionary of Military Terms, By Major J. H.T. Creswell, Major J.Hiraoka, Major R. Namba, first edition 1942』のファクシミリ版]
- 『備兵二千年史、菊池良生著』(講談社、2002年) GG75-G1
- 『補給戦：何が勝敗を決定するのか、マーチン・ファン・クレフェルト著、佐藤左三郎訳』(中央公論社、2006年)
Supplying War, Martin van Crevelt, Cambridge University Press, 1977
- 『工兵入門、佐山二郎著』(光文社、2001年)
- ##### ・近代初期の工兵(明治から昭和初期)
- 『歩兵隊銃兵概則 明治十年』(陸軍省、1877年)
- 『達乙第五十一号 工銃両兵器具名称左之通改訂候條此旨相達候事 陸軍卿西郷従道 明治十七年』(陸軍省、1884年)
「工兵(銃兵)、工銃両兵」
- 『陸達第七十三号 工兵操典第2編 架橋之部別冊ノ通改正セラル 明治二十五年、「別冊：工兵操典 第二編 架橋」陸軍大臣伯爵大山巖、(1892.10.12)』
- 『工兵操典 第2編 架橋 明治二十五年』(川流堂、1892年)
- 『架橋教範草案：縦列材料之部、応用材料之部 明治三十四年』(陸軍省、1901年)
- 『工兵操典草按』(陸軍省、1901年)
- 『架橋教範草案：縦列材料之部/応用材料之部 明治三十五年』(厚生堂、1902年)
- 『架橋教範草案：応用材料之部 明治三十八年』(厚生堂、1905年)

- 『架橋教範草案 陸軍典範令全書其 21 縦列之部、応用之部、陸軍省編 大正二年』(兵林館、1913 年)
- 『工兵操典 軍令第四号、陸軍省編 大正二年』(兵用図書、1913 年)
- 『架橋教範 大正七年』(兵用出版、1918 年)
- 『架橋教範 軍令陸第二十号、陸軍省編 昭和四年』(兵用図書、1929 年)
- 『鹿児島戦争記、篠田仙果著、松本常彦校注：新日本文学大系 明治編 13 明治実録集所収』(岩波書店、2007 年)
- 『秘蔵写真日露戦争 写真構成：別冊歴史読本第 9 号 戦記シリーズ』(新人物往来社、1999 年)
- 『津川町の歴史と文化財』(津川町教育委員会、2004 年)
- 「四二 麒麟橋の変遷」
- 『元帥上原勇作傳 上・下、元帥上原勇作傳記刊行会編』(元帥上原勇作傳記刊行会、1938 年)
- 『伏見の工兵部隊 ―工兵はそこで何をしていたのか―/武島良成著』(京都教育大学紀要、No. 109, 2006)
- 『現代日本土木史第 2 版、高橋裕著』(彰国社、2007)
- 『大札記念国産振興東京博覧会 事務報告』(東京都公文書館蔵)
- 『大札記念国産振興東京博覧会について、倉橋藤治郎著』(倉橋藤治郎著、1930 年)
- 『日本兵器沿革志』(陸軍文庫、1880)
- ・ 昭和の工兵隊浮橋：ノモンハン戦争・日中戦争から第 2 次世界大戦終結まで
- 『工兵操、/尚兵館編 昭和十六年』(尚兵館、1941 年) 771-155
- 『現代史資料 41 マス・メディア統制 2/内川芳美編』(みすず書房、1975 年)
- 「二 支那事変初期陸軍関係記事取締状況 昭和十二年 (1937) 七月」
- 「五 支那事変関係記事取締通牒 昭和十二年 (1937) 九月」
- 『支那事変作戦日誌/井本熊男著』(芙蓉書房出版、1998 年)
- 『ジューコフ元帥回顧録 革命・大戦・平和、ゲ・カ・ジューコフ著、清川勇吉〔他〕訳』(朝日新聞社、1970 年)
- 「第 7 章 ハルハ川 (ノモンハン) の宣戦なき戦争」
- 『ノモンハン 草原の日ソ戦 ―1939 上、下、アルヴィン・D. クックス著、岩崎俊夫・吉本晋一郎訳』(朝日新聞社、1989)
- GB521-E125
- 『ノモンハンの夏、半藤利一著』(文芸春秋社、1998 年)
- 『ノモンハン 隠された戦争、鎌倉英也著』(日本放送出版協会、2001 年)
- 『モンハンの戦い、シーシキン〔他〕著、田中克彦編訳』(岩波書店、2006 年)
- 『不許可写真 1, 2、西井一夫著』(毎日新聞社、1998-09 年)
- 『活躍する佐藤部隊田中隊の鉄道隊 (1938 年、蕪湖 (安徽省))：秘蔵写真が語る戦争、朝日新聞 2006-9-14 記事』(朝日新聞出版、2009 年)
- 『栄光の鉄道部、鉄道第五連隊戦友会慰霊団編集』(鉄道第五連隊戦友会、1981 年)
- 『陸軍工兵隊学校の訓練』(科学朝日、昭和十八年 (1942) 七月号)
- 『日本陸軍便覧：米陸軍省 テクニカル・マニュアル 1944)、米陸軍省編著、菅原完訳』(光文社、1998 年) 【原著 Hnadbook On Japanese Military Force, United States War Department, 1944】
- ‘The United States Army Air Force in World War II: Combat Chronology of the US Army Air Force September 1944’
- 『米軍が記録したニューギニアの戦い、森山康平編著』(草思社、1996 年)
- 『ある工兵の陣中生活記録 北支派遣第七旅団工兵隊、繁田良作著、香川節編』(ふだん記全国グループ、1979 年) GB554-811

i. 近・現代文学・紀行・旅行案内の浮橋

- 『日本旅行日記 1, 2 巻、アーネスト・サトー著、庄田元男訳』(平凡社、1992 年)
- 『明治日本旅行案内 中巻ルート編 [I]・下巻ルート編 [II]、アーネスト・サトー編著、庄田元男訳』(平凡社、1996 年)
- 「ルート 3 東京から東海道を経て京都へ」、「ルート 8 東海道から身延山を経て甲府へ」、「ルート 10 大井川渓谷。大日峠を越えて静岡へ」、「ルート 11 秋葉山と天竜川」、「ルート 20 東京から中山道を経て草津 (近江) へ」、「ルート 24 東京から清水峠を越えて新潟へ」、「ルート 30 善光寺から新潟 (北国街道) へ」、「ルート 31 越中・加賀・越前を経て高田から近

江(北国街道)へ」、「ルート32 上田から保福寺峠を越えて松本へ」、「ルート34 越中と飛騨」、「ルート51 東京から奥州街道を経て青森へ」

『みちの記、森鷗外著：鷗外全集 第22巻所収』(岩波書店、1973年)

『石川啄木修学旅行日記：盛岡中学校校友会誌第4号所収』(盛岡中学校校友会、1902年、7.12)

『三千里上・下、河東碧梧桐著』(講談社、1989年)

『田山花袋全集、田山花袋著 全17冊』(文泉堂書店、1974年)【花袋全集刊行会 昭和11-12年刊の複製】

『定本花袋全集、田山録弥著：第1巻-第26巻、別巻』(臨川書店、1993-95年)

『千曲川スケッチ、島崎藤村著：島崎藤村全集第2巻所収』(筑摩書房、1957年)

『転機、伊藤野枝著：伊藤野枝全集 上 所収』(学藝書林、1970年)

『佐野だより、木下尚江著：木下尚江著作集 第1巻所収』(明治文献、1972年)

『遠野へ、水野葉舟著：水野葉舟資料3』(葉舟会、1987年)

j. 技術書・地図・写真・絵画・新聞記録史料

『技術の社会史 第3巻 西欧技術の移入と明治社会/海野福寿編』(有斐閣、1982)

『明治前期手書彩色関東実測図(内務省地理局地誌課/東京日報社、明治十二年)：第一軍管地方二万分一迅速図原図複製版 坤の部/迅速測図原図複製版編集委員会編』(東京地図センター、1991)

「埼玉県武蔵国児玉郡」、「群馬県上野国那波郡」、「群馬県上野国緑埜郡」

『置県百年記念写真 ふくいの百年/日刊福井編』(日刊福井、1981)

「明治末期の小舟渡舟橋」、「昭和8年頃の小舟渡舟橋」

『大洲市史 写真版』(大洲市史編纂委員会、1987)

「渡場浮亀橋」、「亀山浮亀橋」

『明治・大正・昭和 大洲ふるさとの思い出写真、大槻幹雄著』(図書刊行会、1981年)

『福島市史資料叢書 第31輯、第31輯、福島市史編纂委員会編』(福島県教育委員会、1978, 80年)

「新聞資料集成 大正の福島1, 2」

『福島市史資料叢書 第35輯、第37輯、第39輯、福島市史編纂委員会編』(福島県教育委員会、1982, 83, 84年)

「新聞資料集成 昭和の福島1, 2, 3」

(2) 中国と周辺国、東南アジア諸国・インドおよびオセアニア浮橋の主要文献

1) 中国の浮橋

『詩経、書経、易経、塚本哲三編：漢文叢書 第1巻』(有朋堂、1927年)

『春秋左氏伝 上・下、塚本哲三編：漢文叢書 第23巻、24巻』(有朋堂、1927年)

『春秋左氏伝 上・中・下、小倉芳彦訳』(岩波書店、1988-89年)

『老子、莊子、小川環樹編：世界の名著第4巻』(中央公論社、1968年)

『史記列伝上・下、司馬遷著、重野安釋校訂：漢文大系 第6巻、第7巻』(富山房、1973年) US1-16

『史記列伝、司馬遷著、小川環樹〔他訳〕』(岩波書店、1975年)

『史記準準書・漢書食貨伝、加藤繁訳注』(岩波書店、1996年)

『塩鉄論、恒寛著、佐藤武敏訳』(平凡社、1970年)

『六韜・三略、北村佳逸著』(立命館出版部、1943年)

『三国志 正史1 魏書1-4、陳寿著、裴松之注、今鷹真〔他〕訳』(筑摩書房、1992-93年)

『正史 三国史英傑伝1-4、陳寿著、裴松之注、中国の思想研究会編訳』(徳間書店、1994年)

『完訳三国志 1-8、羅貫中著、小川環樹〔他〕訳』(岩波書店、1983年)【小説：三国演義の翻訳】

『魏書積老志、魏収、塚本義隆訳注』(平凡社、1990年)

『魏書食貨誌・隋書食貨誌、渡辺信一郎訳注』(汲古書院、2008年)

『呉書：古典研究会叢書 漢籍之部第6巻』(汲古書院、1988年)

- 『隨書、唐太宗編、志村=幹、荻生茂卿区読』(古典研究会、1971年)【明万歴10年南監本の元禄10年複製の複製縮刷版】
- 『山海経：中国古典大系8巻所収』(平凡社、1969年)
- 『水経注疏 渭水編上、東洋文庫中国古代地域史研究班編』(平凡社、2008年)
- 『水経注 (抄)、森鹿三郎訳：中国古典文学大系21』(平凡社、1974年)
- 『洛陽伽藍記、楊銜之著、入矢義高訳：中国古典文学大系21』(平凡社、1974年)
- 『讀史方輿紀要、顧祖禹著』(台北 新興書局、1956年) [222.002-Ko387-s](#)
- 『讀史方輿紀要索引支那歴代地名要覧、青山定雄編』(東方文化院、1939年) [299.203-A241d](#)
- 『入唐求法巡礼行記 卷第一、第二、円仁撰、鈴木學術財団編集：大日本仏教全書 第七二巻 史傳部十一 所収』(講談社、1972年)
- 『入唐求法巡礼行記1,2、円仁著、足立嘉六訳注、塩入良道補注』(平凡社、1970、85年)
- 『円仁唐代中国への旅 入唐求法巡礼行記の研究、エドウィン・O・ライシャワー著、田村完誓訳』(原書房、1984年)
- 『行曆抄、円珍著』(古典保存会、1934年) [188.4-E83g](#)
- 『円珍、佐伯有清著、日本歴史学会編』(吉川弘文館、1990年)
- 『白氏文集71巻、白居易著』(新華書店、1955年)
- 『白氏長慶集諺解、森考太郎・尾崎知光編』(和泉書院、1986年)
- 『唐兩京城坊攷、除松撰、愛宕元訳注』(平凡社、1994年)
- 『遼史：二十五史 第七巻所収』(開明書店、1935年)
- 『遼史、島田生郎著』(明德出版社、1975年)
- 『資治通鑑、(北宋) 司馬光編：和刻本山名本3』(汲古書院、1973年)
「巻第二百一十二 唐記二十八 玄宗至道大聖天大明孝皇帝 上之下」
- 『国訳資治通鑑 1-4、司馬光編、加藤繁、公田公太郎訳注』(景仁文化社、1996年)
- 『蒲津橋讃、張説著』(維基文庫)【zh.wikisource.org/zh-tw/蒲津橋讃】
- 『唐代関内道軍事地理研究、穆渭生著』(陝西人民出版社、2008年)
- 『宋史食貨志訳注 第1、和田清編：東洋文庫論叢第44』(東洋文庫、1960年) [222.053-W19s](#)
- 『宋史食貨志訳注 2-6、中島敏編：東洋文庫論叢第59、60、62、63、67』(東洋文庫、1999-2006年) [222.053-W19s](#)
- 『參天臺五臺山記、成尋著、近藤瓶城編：史籍集覧 改訂第26冊所収』(近藤出版部、1902-26年)
- 『伏見宮家九条家旧蔵諸録起集、宮内庁書陵部編 所収：[図書寮叢刊]』(明治書院、1970年)
「三二 渡宋記、戒覺著」
- 『入蜀記、陸游著、岩城秀夫訳』(平凡社、1986年)
- 『吳船録・欖轡録・駉鸞録、范成大著、小川玉樹訳』(平凡社、2001年)
- 『夢梁録 南宋臨安繁昌記、吳自牧著、梅原郁訳注』(平凡社、2000年)
- 『東京夢華録：宋代の都市と生活、孟元老著、入矢義高・梅原郁訳注』(平凡社、1996年)
- 『宋清明上河図虹橋建築的研究、杜連生著』(文物、1975年、4期)
- 『事物紀原、(宋) 高承撰、胡文煥校、鶴飼信之点：和刻本類書集成 第2輯 長沢規久也編 所収』(汲古書院、1976年)【明
曆2年京都武村市兵衛刊本の複製】 [UR11-8](#)
- 『中国の城郭都市、愛宕元著』(中公新書、1991年)
- 『元史訳文証補、洪鈞撰、那珂通世校』(文求堂、1902年)
- 『長春真人西遊記、李志常著、岩村忍訳：世界ノンフィクション全集19所収』(筑摩書房、1961年)
- 『耶律楚材西遊録、耶律楚材著、中野美代子訳：世界ノンフィクション全集19所収』(筑摩書房、1961年)
- 『十八史略 上・下、林秀一著：新釈漢文大系 20,21』(明治書院、1967年)
- 『モンゴル帝国の歴史、デイヴィッド・モーガン著、杉山正明、大島淳子訳』(角川書店、1993年)
- 『モンゴル軍、S.R. ターンブル著、稲葉義明訳』(新紀元社、2000年)
- 『モンゴル軍のイギリス人使節、ガブリエル・ローナイ著、榎優子訳』(角川書店、1995年)
- 『マルコ・ポーロ東方見聞録、マルコ・ポーロ著、青木一夫訳』(校倉書房、1960年)

- 『東方見聞録、マルコ・ポーロ著、青木富太郎訳』（社会思想社、1969年）
- 『東方見聞録1,2、マルコ・ポーロ著、愛宕松男訳注』（平凡社東洋文庫、1970-71年）
- 『チムール帝国紀行、クラヴィーホ著、山田信夫訳』（桃源社、1979年）
- 『遙かなるサマルカンド、クラヴィーホ著、リシュアン・ケーレン編、杉山正樹訳』（原書房、1989年）
- 『中国誌、ガスパール・ダ・クルス著、日笠博司訳』（講談社、2002年）
- 「第7章 内陸部にあるいくつかの建築物について」
- 「第9章 この地にある船舶と舟艇について」
- 『韃靼漂流記、園田一亀著』（平凡社、1991年）
- 『チベットの報告、I・デシペリ著、F.D.フィリップ編、薬師義美訳』（平凡社、1991-92年）
- 『中国奥地紀行1,2、イザベラ・バード著、金坂清則訳』（平凡社、2002年）
- 『東洋紀行1,2,3、グスタフ・クライトナー著、小谷裕幸、森田明訳』（平凡社、1992-93年）
- 『伊東忠太見聞野帳 清国1,2、伊東忠太著』（柏書房、1990年）
- 『支那写真講義 第1巻7号』（支那通信部、1917.04）
- 『臺灣名所写真帳、石川源一郎編』（石川源一郎、1899年）
- 『中国技術の研究、田中淡編』（京都大学人文科学研究所、1998年）
- 『文明の滴定 科学技術と中国の社会、ジョゼフ・ニーダム著、橋本敬造訳』（法政大学出版局、1974年）
- 『中国の科学と文明 第1巻 序編、ジョゼフ・ニーダム著、礪波護〔他〕訳』（思索社、1991年）
- 『中国の科学と文明 第8・9巻 機械工学 上・下、ジョゼフ・ニーダム著、長岡哲郎〔他〕訳』（思索社、1,991,1978年）
- 『中国の科学と文明 第10巻 土工学、ジョゼフ・ニーダム著、田中淡〔他〕訳』（思索社、1978年）
- ‘The mongols’, David Morgan’ Oxford, New York, B.Blackwell, 1986
- ‘The Mission of Friar Rubruck : his journey to the court of the Great Khan Mongke, 1253-1255 /translated by Peter Jacson’ Hakluyt Society, 1990
- ‘The Mongol empire and its legacy /edited by Reuven Amitai-Preiss and David O.Morgan’ Brill, 1999
- ‘Science and Sivilization in Chaina Volume 4 Physics and Physical Technology Part 3 Civil Engineering and Autics, Joseph Needham’ Taipei, Cares Books 1986

2) インドの浮橋

- 『ムガル帝国誌1,2、ベルニエ著、蔵田信子訳』（岩波書店、2001年）
- 『東洋紀行1,2,3、G・クライトナー著、小谷裕幸、森田明訳』（平凡社、1992-93年）
- ‘The Mughal Empire/F.Richards’N.Y.,Cembridge University Press, 1996
- ‘An Atlas of the Mughal Empire : Political and economic maps with detailed notes,bibliography, and Index / Ifran Habid — Centre of Advanced Study in Histry, Aligarh University , 1982’

(3) 西アジア、中央アジア、北アジアおよび イスラム圏諸国の浮橋

1) アッシリア・バビロニア・ペルシャの浮橋

- 『古代技術、ハーマン・ディールス著、平田寛訳』（創元社、1943年）
- 『歴史、ヘロドトス著、松平千秋訳：世界の名著5』（中央公論社、1970年）
- 『アナバシス、クセノポン著、松平千秋訳』（筑摩書房、1985年）
- 『アレクサンドロス大王東征伝記、付インド伝 上・下、アッリアノス著、大牟田章訳』（岩波書店、2001年）
- 『プルタルコス英雄伝 上・中、プルタルコス著、村川堅太郎編』（ちくま学芸文庫、1996年）
- 『アレクサンドロス大王 上・下、ロビン・レイン・フォックス著、森夏樹訳』（青戸社、2001年）
- ‘The invasion of India by Alexander the Great, as described by Arrian, Q. Curtius, Plutarch, and other classical authors as describe Alexander’s campains in Afganistan the Panjab, Sindo, Gedorosia, and Kamania ; with an introduction containing a life of Alexander , International Books and Periodicals Supply Service, 1972’

2) イスラム圏諸国およびオスマントルコ帝国の浮橋

『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガールの旅行記、家島彦一訳注』（東京外国語大学アジアアフリカ言語研究所、1969年）

『シナ・インド物語、アブー・ザイド著、藤本勝次訳』（関西大学出版・広報部、1976年） [GE211-8](#)

『イブン・ジュバイルの旅行記、イブン・ジュバイル著、藤本勝次、池田修訳』（講談社、2009年）

『大旅行記1-6、イブン・バットゥータ著、家島彦一訳』（平凡社、1996-2002年）

『マホメットとアラブの大征服、F. ガブリエリ著、矢島文夫訳』（平凡社、1971年）

『コンスタンチノーブル陥落す、S. ランシマン、護雅夫訳』（みすず書房、1983年）

『アラビア科学史序説、矢島祐利著』（岩波書店、1977年）

『アラビア科学の歴史、ダニエル・ジャカール著、遠藤ゆかり訳』（創元社、2006年）

『アラビア文化の遺産、ジクリト・ブンケ著、高尾利数訳』（みすず書房、2003年）

『イスラム技術の歴史、A. Y. アルハサン、D. R. ヒル著、多田博一〔他〕訳』（平凡社、1999年）

『イスラム社会の発展、本田實信著』（講談社、1985年）

『地中海の覇者ガレー船、アンドレ・ジスベール、ルネ・ビュルレ著、遠藤ゆかり、塩見明子訳』（創元社、1990年）

『The Caliphate : its Rise, Decline and Fall from Original Source, William Muir, Kensinton Pub Co, 2004』

(4) 古代ローマおよびローマ帝国の浮橋歴史史料

1) ローマ建国からカエサルまで

『ローマ建国史、リーウィウス著、鈴木一洲訳』（岩波書店、2007年）

『ローマ史 上下、テオドル・モムゼン著、杉山吉郎訳』（杉山吉郎、2008年）

「上 共和制の成立と地中海諸民族の闘争史

「下 共和政の権力闘争と君主制への歴史

『ローマ史（抄）、テオドル・モムゼン著、長谷川博隆訳：ノーベル賞文学全集 21 所収』（主婦の友社、1972年）

『ポエニ戦争、バルナル・コンベ＝ファルニー著、石川勝二訳』（白水社、1999年）

『カルタゴ戦争 265-146BC、テレンス・ワイズ著、折原透訳』（新紀元社、2000年）

『ハンニバルアルプス越えの謎を解く、ジョン・プレヴェア著、村上惇夫訳』（白水社、2000年） [GA47-G6](#)

『ガリア戦記、カエサル著、金山近次訳』（岩波書店、1965年）

『ガリア戦記・内乱記、カエサル著、国原吉之助訳；カエサル文集』（筑摩書房、1981年）

『内乱記、カエサル著、国原吉之助訳』（講談社、1996年）

『英雄伝 1, 2、プルタルコス著、柳沼重剛訳』（京都大学出版会、2007年）

『The Ten Books on Architecture/Vitruvius/Translated by Morris Hicky Morgan, Dover Publications, Inc., 1960』

2) ローマ帝国時代

『ギリシャ・ローマ世界地誌、ストラボン著、飯尾都人訳』（竜溪書舎、1994年）

『年代記 上・下、タキトゥス著、国原吉之助訳』（岩波書店、1961年）

『ゲルマーニア、タキトゥス著、泉井久之助訳注』（岩波書店、1961年）

『同時代史、タキトゥス著、国原吉之助訳』（筑摩書房、1996年）

『皇帝伝 上・下、スエトニウス著、国原吉之助訳』（岩波書店、1996年）

『ローマ帝国衰亡史 1-9、ギボン著、村山勇三訳』（岩波書店、1951-54年）

『ローマ帝国衰亡史 1-9、ギボン著、中野好夫、朱牟田夏雄訳』（筑摩書房、1976-92年）

『ローマ帝国衰亡史、ウォールパンク著、吉村忠典訳』（岩波書店、1963年）

『ローマ皇帝歴史、クリス・カー著、月村澄江訳』（創元社、1986年）

『ローマ人：歴史・文化・社会、J. P. V. D. ボールスドン編、長谷川博隆訳』（岩波書店、1971年）

- 『ローマ帝国：ある帝国主義の歴史、J. P. V. D. ボールストン著、吉村忠典訳』（平凡社、1972年）
- 『ギリシャとローマ、村川堅太郎、秀村欣二著：世界の歴史2』（中公論社、1988年）
- 『ローマ五賢帝：輝ける世紀の虚像と実像、南川高志著』（講談社、1998年）
- 『海のかなたのローマ帝国、南川高志著』（岩波書店、2003年）
- 『ローマ皇帝群像1,2、アエリウス・スパルチアヌス〔他〕著、南川高志訳』（京都大学学術出版会、2004、2006年）
- 『歴史1,2、ポリュビオス著、城江良和訳』（京都大学学術出版会、2004、2007年）
- ‘Dio’s Roman History/Cassius Dio, With an English translation by Eanest Cary ; on the basis of the version Baldion Foster, London , Willam Heidenman 1924 937-D558d, 837-C345d
- ‘The Millitary Institutions of the Romans (De Re Millitari), BookIII Dispositions for Action : Passages of River, by Furavius Vegetius Renuatus, Translated from Latin by Lieutenant John Clark [Text written in 390 AD. British transeletion published in 1767] [www.pw.ntnu.no/~madsb/home/war/vegetius/]
- ‘Handbook to life in Ancient Rome/Lesley Adkins, Roy Adkins’ Oxford University Press,1994
- ‘Roman Bridges/ Colin O’Connor’Cambridge University Press 1993
- ‘Die Reliefs der Trajanssäle/Conrad Cichorius’Berlin 1866,1900
- ‘Cichorius Plate of Trajanssäle’[Wikimedia Commons]
- ‘La Colonna di Marco Aurelio Illustrata a cura del comuned i, C.Caprino [et al.]’Rome L’Erma di Bretshneider 1955
- ‘The Roman Army : A Social & Institutional History/Pat Southern’Oxford university Press 2006
- ‘La Colonna di Marco Aurelio—The Column of Marcus Aurelius, Coarelli Pillipo’Paterson H. 2008
- ‘Representations War in Ancient Rome in both visual imagery and literary accounts,Edited by Sheila Dillton and Katherine E. Welch’Cambridge University Press 2006
- ‘Hate and War : The Column of Marcus Aurerius, Iain Ferris’ The history Press Ltd 2009
- ‘[livius.org/mo-mt/mogontiacum/mogontiacum.html]’

(5) ヨーロッパ諸国の浮橋

ヨーロッパ古代・中世および近世の浮橋海外舟橋に関する本論文の研究は、主として古代から現代に至る中国・オリエント・欧州・南北アメリカ浮橋史記述のため、翻訳刊行物を史料及び資料の主体に用いている。漢文史料に関しては、できるだけ原史料を調査対象としているが、翻訳刊行物はできるだけ複数の史料・資料を用い、不審が解決されない場合は、可能な限り原著の調査を行っている。ただし、舟橋関連の技術史関連記述を行っている外国原著数は少なく、既に述べたように西欧古典文化に基軸を置くものが多い。

現在、多くの著作権が消滅している海外刊行物、世界の都市の公文書館などが有する史料および各地の資料館・記念館・公共放送機関などが独自に調査取材と編纂を行った舟橋関連の史料を、インターネットのウェブサイトから直接入手が可能となっている。特に近代舟橋技術史の構築の重要資料である、英国王立工兵隊の浮橋史及び米国南北戦争における浮橋構法技術の最新史料は、これら電子化された文書・画像のアーカイブズから得られることが多い。一部の特殊な橋梁技術史を除いて、橋梁史および戦略・戦術・用兵・戦争、兵器などの専門図書には、浮橋に関する具体的な記述はほとんど存在していない。英国王立工兵隊の歴史・技術史料および米国南北戦争における浮橋技術の最新史料は、刊行図書類ではなくこれら電子化された文書・画像史料から得られることが多い。戦略・戦術・用兵・戦争、兵器などの専門図書には、具体的な軍用浮橋の技術史記述はほとんどなく、例示する架橋の引用・選択に関しても不適切と判断される記述が存在している。

ローマ軍団の社会・経済基盤史としての専門書には、すぐれた著作が多いが軍用浮橋に関する記述は、兵站や携帯装備としてわずかな紙数が割かれ、浮橋構造・構法・材料に関する情報は、特定著述を除いては数少ない。

オリエント・ギリシャ・ローマ古代史およびメソアメリカ・アンデス文明に関する史料は、英文史料か和訳・英訳・独訳された史料を主に用いている。

1) ヨーロッパ古代・中世の舟橋

『列強論、ランケ、渡辺茂村岡哲訳：世界の名著続11』（中央公論社、1974年）

- 『宗教改革時代のドイツ史、ランケ著、渡辺茂訳：世界の名著続11』（中央公論社、1974年）
- 『シャルルマーニュの時代、J. プサール著、井上泰夫訳』（平凡社、1973年）
- 『シャルルマーニュの時代、デヴィッド・ニコル著、桑原透訳』（新紀元社、2001年）
- 『橋の文化史、ベルト・ハインリッヒ著、宮本裕訳』（鹿島出版会、1991年）
- 『ヨーロッパの中世都市、エーディト・エネン著、佐々木克己訳』（岩波書店、1987年）
- 『物語 ストラスブールの歴史、内田日出海著』（中公新書、2009年）
- 『中世日本と西欧：多様と分権の時代、近藤成一、小路田信泰直、ローベルト・ホレス、デトレフ・タランチェフスキ編』（吉川弘文館、2009年） **GB211-J41**
- ‘Ancient Europe 8000B.C. – A.D.1000:Encyclopedia of the Barbarian world/Peter Bougucki & Pan J. Crabtree,edition of chief’New York, Thomson /Grab 2004’
- ‘Historical Map of the Battle of the Garigliano –December 27, 1503, by United States Military Academy Department of History’ [www.emersonkent.com/]
- ‘A History of Warfare/Bernard Law Montgomery’ N.Y. Word Publishing Company 1968
- ‘Die europaishe Stadt des Mittelalters/Edith Ennen’

2) ヨーロッパ近世・近代の浮橋

- 『スペイン継承戦争：マールバラ公戦記とイギリスハノーヴァー朝誕生史、友清理士著』（彩流社、2007年）
- 『三十年戦争、シラー著、林健太郎訳：シラー選集第3巻』（富山房、1942年）
- 『ドイツ三十年戦争、G. ヴェロニカ・ウェッジウッド著、瀬原義生訳』（力水書房、2003年）
- ‘Systems of military bridges in use by the United States Army, those adopted by the great European powers, and such as are employed in British India with derections for the preservation, destruction, and reestablishment of bridges, Brigadier General of US Army George W. Cullum’New York, D. Van Nostrand, 1863
- ‘The HARPER Encyclopedia of Military History Forth Edition/R. Ernest Dupuy and Trevor N. Dupuy’Harper Colins Publishers
- ‘The encyclopedia of military history from 3500 BC to present, R. Ernest Dupuy’2 nd rev.ed London Jane’s, 1986
- ‘Latin American Military History An Annotated Bibliography, edited by David G. LaFrance and Errol D. Jones’New York & London, Garland Publishing, Inc. 1992
- ‘International Encyclopedia of Military History/James C. Brdford Editor’Newyork & London, Routledge, 2006’
- ‘The Oxford Companion to Military History/Edited by Richard Holmes’ Oxford University Press 2001
- ‘The Oxford Companion to British Military History’Oxford University Press, 2002
- ‘Brasey’s Encycloperia of Military History and Biography, Exective Editor Col Franclin O. Margiotto,’
- ‘World railways of nineteenth century : a pictorial history in Victorian engravings, Jim Hartry, Johns Hopkinss University, 2005’ **DK51-B1**
- ‘The History of the Royal Canadian Air Force, Volume1, University of Toronto Press, 1980’
- ‘William George “Billy” Baker : World I Figter Ace, Air Force Association of Canada’
【410wing.cybrus.ca/barkerbio.hym】

3) 日本人が記録した近世および現代初期のヨーロッパ浮橋

- 『環海異聞、大槻玄沢、志村弘強編：海外渡航記叢書2』（雄松堂出版、1969年）
- 『北槎聞略 影印・解題・索引、桂川国瑞著、杉本つとむ編著』（早稲田大学出版局、1993年）【複製】
- 『北槎聞略、桂川甫周著、亀井高孝、村山七郎編・解説』（吉川弘文館、1965年）【三秀舎、昭和12年刊の複製】
- 『大黒屋光太夫史料集 第2巻、第3巻、山下恒夫編纂：江戸漂流記総集 別巻』（日本評論社、2003年）
- 『欧西紀行、高島久也（裕啓）著』（国会国会図書館蔵：和装3冊本、慶応3年（1867））

『福沢諭吉の西航巡歴、山口一夫著』(福沢諭吉協会、1980年)
 『ペテルブルグの福沢諭吉、保田孝一著：福沢諭吉年鑑17』(福沢諭吉協会、1990年)
 『幕末遣欧使節団、宮永孝著』(講談社、2006年)
 『ヨーロッパ人の見た幕末使節団、鈴木建夫、ポール・スノードン、ギンター・ツォーベル著』(講談社、2008年)
 『米欧回覧実記1-5、久米邦武編、田中彰校注』(岩波書店、1985年)
 『順礼紀行、徳富健次郎著』(中央公論社、1989年)
 'Image and identity : rethinking Japanese cultural history/edited by Jaffery H. Hanes, Hidetoshi Yamazi, The Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University Press, 2004'【19世紀後半のアメリカ写真と『米欧回覧実記』山地英俊著】

(6) 南北アメリカおよび中央アメリカの浮橋歴史

『ペルーおよびクスコ地方征服に関する真実の報告、ヘレス著、増田義郎訳：大航海時代叢書 第2期2』(岩波書店、1980年)
 『インカ帝国地誌：ペルー記第一部、シエサ・デ・レオン著、増田義郎訳』(岩波書店、2007年)
 『インカ帝国史：ペルー記第二部、シエサ・デ・レオン著、増田義郎訳：大航海時代叢書 第2期15』(岩波書店、1979年)
 『インカ皇統記(一) - (四)、インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベージャ著、牛島信明訳』(岩波書店、2006年)
 『太陽の道 インカ王道の秘密、V.W.フォン・ハーゲン著、勝又茂幸訳』(朋文堂、1958年)
 『新大陸自然文化史 上・下、アコスタ著、増田義郎訳注：大航海時代叢書 第3巻、第4巻』(岩波書店、1966年)
 『メキシコの戦争、サアゲン編、小池祐二訳：大航海時代叢書 第2期12』(岩波書店、1980年)
 『ヌエバ・エスパニア報告書、ソリタ著、小池祐二訳：大航海時代叢書 第2期13』(岩波書店、1982年)
 『アステカ帝国滅亡記 インディオによる物語、ジョルジュ・ボド著、ツヴェタン・トドロフ編、菊池良夫、大谷尚文訳』(法政大学出版局、1994年)
 『メキシコ：インディオとアステカの文明を探る、マイケル・Dコウ著、寺田和夫、小泉潤二訳』(学生社、1975年)
 'Peru : Incidents of Travel and Exploration in the Lands of Incas by E.George Squier, Harper and Brothers, 1877'
 'High Way of the Sun, by Victor W. von Hagen, Little Brown and Company, 1955'
 'The Inca road system, by John Hysloop, Academic Press, 1984'
 'Inca region and customs, by Bernabē Cobo, translated and edited by Roland Hamilton, University of Texas Press, 1990'
 'Conquest of New Spain : 1585 revision, by Bernardino de Sahgun, reproductions Boston Public Libray Manuscript and Carlos Maria de Bustamante 1840 edition, translated by haward F. Cline, edited with an introduction and notes by S.L. Cline, University of Utah Press, 1989'[GH361-A99](#)
 'The Chinampa of Mexiko, by Michael D. Coe, Scientific American Vol.260, 1964'
 'The Conquest of New Spain, by Bernar Diaz del Castillo, translated by J. M. Cohen, the Penguin Classic 1963'
 『航米日録、玉蟲左太夫著、沼田次郎、松沢弘陽校注：日本思想体系66』(岩波書店、1974年)
 『ばなま運河の話、青山士著』(青山士、1939年)
 『アメリカ地政治学史、エルネスト・マッシ〔他〕著、米沢卓司訳編』(科学主義工業社、1941年) [YD5-H319.2-Y84ウ](#)
 'Illustrated history of the Panama railroad/Fressenden Nott Otis, Harper & Brothers, 1861'
 'PANAMA : The Panama Railroad, by Ralph Emmett Avey, Leslie-Jugde Company, 1915'
 'Goethals — Genius of the Panama Canal — A Biography, by Joseph Buchlin Bishop, Harper & Blothers, 1930'
 'Full Text from [archive.org/goethalsgeniussof001385mbp_djvu.tex]
 'Panama Railroad, by Bruce C. Ruiz, 2002' [bruceruiz.net/Panamahistory/panama_railroad.htm]
 'The Pass Between The Sea : the Creation of the Panama Canal (1870-1914)/by David Mc'Cullough, Simon & Schuster, 1977'

2) 北アメリカの浮橋

- 『アメリカの歴史3 1837-1865年、サムエル・モリソン著、西川正身訳監修』（集英社、1997年）
- 『アメリカ人の歴史 1、2、ポール・ジョンソン著、別宮貞徳訳』（共同通信社、2001-02年）
- ‘Archival Research Catalog (ARC) of the National Archives and Record Administration’
【free.ed.gov/resource.cfm?resource_id=629】
- ‘Homestead Act of 1862 : 37th Congress Session II 1862 Chapter LXXV. —An Act to secure Homesteads to actual Settlers on the Public Domain’
- ‘Oregon Trail Archives’ 【isu.edu/~trimch/oregontrail.htm】
- ‘A Prairie Traveler : A Handbook for Oregon Expeditions, by Randolph B. Marcy, the War Department 1859’ from [Oregon Trail Archives]
- ‘Captan John Smith by Denis Montgomery, Colonial Williamsberug’ Journal, Spring, 1994
【history.org/journal/smith.cfm-63k】
- ‘Selected Civil War Photographs Collections, Library of Congress’
【memory.loc.gov/ammem/cwphtml/cwphome.html】
- ‘Civil War Photos’ 【archives.gov/civil-war/photos/】
- ‘History of the Ninety-sixth Regiment, Illinois Volunteers by Charles Addison Partridge’ Brown, Pettibone, 1877
【archives.org/details/partridgehistory00charrich】
- ‘Civil War Pontoon Bridges, by Robert Niepert’ 【floridareenactorsonline.com/pontoon.htm】
- ‘Civil War Regiments from Indiana, 1861-1865, by William R. Holloway, Formart,
- ‘The Oxford Companion to American Milirary History, editor inchief, John White Chanberd, Oxford University Press 1999’ [A112-A529](#)
- ‘The Pacific Railway Act 1862 : An Act to aid the construction of a railroad and telegraph line from the Missouri river to the Pacific Ocean, and to secure to the Government the use of the same for postal, military and other purposes’
- ‘American locomotive engineering and railway mechanism, by G. Gaissen, American Industrial ,Publishing Co., 1872’
[NDL50-40](#)
- ‘The canal and the railway : Canals & their economic relation to transportation, by L. M. Haupt, Guggenheimer, weil, 1890’ [NDL109-189](#)
- ‘The American Railway : its Construction, Development, Management and Appliance, by Thomas Cooley and Thomas Clark etc., New York, C. Scribner, 1897’ [NDL133-6](#)
- ‘Locomotive Dictionary by Gerge L. Fowler, the Railroad Gazette, 1906’
【raildriver.com/1906locomotivedictionary.php】
- ‘American railway transportation, 2d rev. ed, by Emory R. Johnson, D. Appleton, 1908’ [NDL 特 13-0106](#)
- ‘American inland waterways, their relation to railway transportation and to the national welfare; their creation, restoration and maintenance, by Herbert Quick, G.P. Putman’s sons, 1909’ [NDL145-115](#)
- ‘Profiting from the plains : the Great Northern Railway and corporate development of the American West, by Claire Strom, Seattle, University of Washinton Press, 2003’ [NDL DK71-B2](#)
- ‘The Bridge that floats by Wes Herwing(1949) by Robert Niepert, Brookfield Historical News Volume 75, Issue 1 March 2008’
【www.brookfieldhistoricalsocietyfiles.wordpress.com/2008】
- ‘Sunset Beach Bridge must end soon’
【starnewsonline.com/20071124/NEWS/】
- ‘Sunset Beach Bridge contract awarded’

【starnewsonline.com/article/20080118/NEWS】

‘Sunset Beach Bridge Construction, August 2009’

【web.mac.com/Bridge_Construction_Photo_Update.html】

‘City of High Point NC Municipal Government Website’ 【high-point.net】

(7) 近代・現代の浮橋および大型浮体構造物

『軽量コンクリートを用いたPC浮体橋の設計と施工、阪本浩・佐久間実・森下昭吾、プレストレスト コンクリート、Vol.24, No.6, Nov. 1982』

『浮体橋の設計指針：鋼構造シリーズ13、土木学会 鋼構造委員会 浮体橋の研究委員会』（土木学会、2006年）

『道路橋示方書・同解説』（日本道路協会、2002年）

『旋回式浮体橋・夢洲～舞浜連絡橋（仮称）の設計、丸山忠明〔ほか〕、日立造船技報第60巻第4号、2000』

『浮体式旋回可動橋 夢舞大橋の製作・架設、川村幸男〔ほか〕、日立造船技報第63巻第1号、2001』

‘Story of the Selma—Expanded Shale Concrete Explores the Ravages of Time’ ESCS Institute, Bethesda, 1960’

‘Concrete Sea Structures, Proceedings of the FIP Symposium, edited Paul Marmell-Cook, FIP, 1973’

‘Performance of Structural Lightweight Concrete in a Marine Environment, by T. A. Holm, International Symposium on Performance of Concrete in Marine Environment, St.Andrews By-The-Sea, Canada, 1980, ACI Publication SP65, 1980’

‘Outstanding appreciations of lightweight concrete and an apprication of likely future development, by J. Bobrowski, The International Journal of Lightweight Concrete, Vol.2 No.1, 1980’

‘Lightweight concrete structures, potentialities, limits and realities, by H. Bomhard, The International Journal of Lightweight Concrete, Vol.2 No.4, 1980’

‘Some Long-Term Observation Results of Artificial Lightweight Aggregate Concrete for Structural Use, by Masahiro Yokoyama et al, International Symposium on Long-Term Observation of Concrete Structures, Budapest, 1984’

‘Survey of experience using reinforced concrete in floating marine structures(SSC:321), Ship Structure Committee, Southwest Reseach Institute, Springfield, VA, 1984’

‘Floating structure and offshore operations, Elsevier, 1987’

‘VSL Floating Concrete Structures Examples from Practice, VSL International LTD., Bern, 1992’

‘Proceedings of international workshop on Very Large Floating Structures : VLF’96 Hayama, Japan, Ship Reseach Institute, Ministry of Transportation, Nov. 1996’

‘Design philosophy of floating bridges with emphasis on ways to ensure long life, Geir Moe, Journal of Marine Science and Technology, Springer Japan, 1997’

‘Bridge engineering handbook, edited by Wai-Foch Chen and Lian Duan, London, CRC Press, 1999’

‘Bridge engineering : a global perspective, Leonard Fernández Troyano, 2003’

(8) 今・現代軍用浮橋

『元帥上原勇作傳 上下巻、元帥上原勇作傳記刊行会』（元帥上原勇作傳記刊行会、1938年）

『伏見の工兵部隊 —工兵はそこで何をしていたのか—、武島良成著』（京都教育大学紀要、No.109, 2006年）

『日本陸軍便覧：米国陸軍省テクニカルマニュアル 1944、米国陸軍省編著、菅原完訳』（光文社、1998年）

『華中作戦、佐々木春隆著』（図書出版社、1987年）

『浮体橋梁研究会報告書、鋼橋技術研究会水中・浮体橋梁研究会編』（鋼橋技術研究会、2004年）

『浮体橋の動揺量推定手法の開発、土木技術研究所構造物研究グループ編』（土木研究所資料第3969号、2005年）

‘Building Bridge on the Rappahannock, Civil War Harper’s Weekly , May 16, 1863, Vol.VII. No.333’

‘Miritary Bridging: Royal Engineers Museum - Article - Military Bridging’

【www.remuseum.org.uk/articles/rem_article_bridges.htm】

'Billy Baker World War I Fighter Ace : Air Force Association of Canada'

[【www.410wing.cyberus.ca/bakerbio.html】](http://www.410wing.cyberus.ca/bakerbio.html)

'Engineering of the Soviet Army. Engineering Corps (Years sixtieth-seventies) Pontoon- bridging column PMP(ИИ
И)' [【tewton.narod.ru/texnica/pmp-english.html】](http://tewton.narod.ru/texnica/pmp-english.html)

'The encyclopedia of military history from 2500 BC to present /R. Ernest Dupuy and Trevor Dupuy, 2nd rev. ed.,
London Jane's, 1986'

'Hand receipt catalog covering content of sets, kits, and outfits compornent for repair kit, inflatable craft for
pneumatic pontoon floats, bridge erection rolles, asault boats and reconnaissans boats [NSN 2090-00-724-8569]
, United States, Dep. of the Army, 1981' **YCA-D101.16:2090-CL-E06-HR microform**

第5節 関連する既往の論文・著作

(1) 日本の舟橋史、浮体・浮体構成および構成部材の技術史

1) 古代より近世に至る日本の浮橋

- 『検非違使 中世のけがれと権力、丹生谷哲一著』(平凡社、2008年)
- 『絵画に静岡の中世を読む、黒田日出男著：静岡県史研究 第14号、静岡県教育委員会文化課県史編さん室編』(静岡県、1997年)Z8-3207
- 『中世東国における河川水量と渡河、齋藤慎一著』(東京都江戸東京博物館研究報告 第4号、1999年)
- 『中世の舟橋 河川の渡河と交通、齋藤慎一著』(東京都葛飾区郷土と天文の博物館資料、2003年)
- 『軍需物資から見た戦国合戦、森本昌広著』(洋泉社、2008年)
- 『中世の土木と職人集団、三浦圭一編：日本技術の社会史 第6巻土木』(日本評論社、1984年)M32-62
- 『技術の社会史 第1巻 古代中世の技術と社会、三浦圭一編』(有斐閣、1982年)
- 『中世の東海道をゆく、榎原雅治著』(中央公論社、2008年)
- 『戦国時代の終焉、齋藤慎一著』(中央公論社、2005年)
- 『日本交通史論叢、大島延次郎』(国際交通文化協会、1939年)
- 『飛州誌、長谷川忠崇著：活字本飛騨叢書1』(住井書店、1909年)
- 『斐田後風土記 上 首巻 藤橋・舟橋・籠渡、富田礼彦著：大日本地誌大系第23巻』(雄山閣、1977年)
- 『江戸の入札(いれふだ)事情、：都市経済の一断面、戸田行夫著』(塙書房、2009年)
- 『明治以前 日本土木史、土木学会編』(土木学会、1936年)
- 『新編埼玉県史資料〔資料編14 近世5 村落・都市 第4部見聞記〕(足立家文書 埼玉県立文書館所蔵)』(埼玉県、1991)
- 『新編埼玉県史 資料編15 近世6 交通 第3部 臨時大通行第1章 日光社参』(埼玉県、1984)

2) 江戸幕府御用舟橋技術論

- 『古房川舟橋絵図〔安永度社参以前に比定)』(埼玉県立博物館蔵)
- 「日光山御社参栗橋船橋絵図」
- 『安永度房川舟橋絵図』
- 「房川船橋安永度之通掛渡方絵図舟」個人蔵
- 「中田栗橋両宿船橋絵図」埼玉県立博物館蔵
- 「房川御船橋絵図」
- 『文政度房川舟橋目論見絵図』
- 「中田栗橋両宿間利根川船橋絵図」埼玉県立博物館蔵
- 「文政度出来分房川船橋模様替絵図」個人蔵
- 『天保度房川舟橋絵図』
- 「武州栗橋房川渡目論見絵図」埼玉県立博物館蔵
- 「日光道中武州栗橋総州中田宿境房川渡船橋掛渡絵図」松伏町教育委員会蔵(石川民部家文書所収)
- 「日光御参詣之節舟舟橋之図」独立行政法人東京国立博物館蔵
- 「房川御舟橋図」栃木県立博物館蔵
- 『天保度社参かわら版』
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図(a-1)」江戸東京博物館蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図(a-2)」船橋市西図書館蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図(b-1)」東京大学社会情報研究所蔵
- 「天保度社参かわら版 房川舟橋図(b-2)」船橋市西図書館蔵
- 『天保度社参かわら版原図資料』松伏町教育委員会蔵(石川民部家文書 所収)
- 「紙本彩色房川舟橋絵図 6面」
- 「天保度房川舟橋原仕様書 2枚」
- 『大系朝鮮通信使 第1巻(丁未・慶長度)一第7巻(甲申・宝暦度)、辛基秀、仲尾宏責任編集』(明石書店、1994-96年)

- 『朝鮮通信使と神奈川、小澤昭子著：神奈川県立公文書館紀要 第6号所収』（神奈川県、2008年）
- 『海游録 上・下、申菁川維翰著、細井肇訳』（自由討研社、1922年）
- 『船橋物語、尾西市歴史民俗資料館特別展図録No.32』（尾西市歴史民俗資料館、1993年）
- 『金町松戸関所 一將軍御成と船橋一、葛飾区郷土と天文の博物館特別展資料』（東京都葛飾区郷土と天文の博物館、2003年）
- 『「房川船橋絵図」について、新井浩文著：埼玉県立博物館紀要—16』（埼玉県立博物館、1990年）
- 『明治以前日本土木史、土木学会篇』（土木学会、1936年）

3) 日本近代浮橋

- 『明治工業史 第2 土木篇、日本工学会篇』（日本工学会、1929年）
- 『浮体橋の設計指針、土木学会 鋼構造委員会 浮体橋の研究委員会編』土木学会、2006
- 『日本工兵写真集、日本工兵写真集編集委員会編』（原書房、1980年）

(2) 中国の浮橋

- 『宋史列傳卷三 百三十一 第九十、第九十一、第九十二』
- 『中国の科学と文明 第8・9巻 機械工学 上・下、ジョセフ・ニーダム著、長岡哲郎〔他〕訳』（思索社、1,991,1978年）
- 『中国の科学と文明 第10巻 土木工学、ジョセフ・ニーダム著、田中淡〔他〕訳』（思索社、1978年）
- 『中国古代橋梁、唐襄澄著』（新華書店、1957年）
- 『中国名橋物語、潘洪荳著、武部健一訳』（技法堂、1987年）
- 『中国科学技術史 上・下、杜石然他編著、川原秀城訳』（東京大学出版会、1997年） [M35-13](#)
- 『中国科学技術史・橋梁卷、唐襄澄著：中国科学技術史叢書』（科学出版社、2000年） [亜東書店](#)
- 『中国橋梁史綱、項海帆他編著』（同济大学、2009年）
- ‘Science and Civilization in China, Vol.IV Physics and Physical Technology ; Part.1 Physics, Joseph Needham and Special co-operation of Kenneth Robinson(1962), Part.2 Mechanics and Engineering, Joseph Needham with the collaboratin Wang Ling(1965), Part.3 Civil Engineering and Nautics, Joseph Needham with the collaboration of Wang Ling and Lu Gwen-djen(1971)’, Cambridge University Press

(3) ローマ帝国の浮橋

- 『ローマ帝国衰亡史 1-9/ギボン著/村山勇三訳』（岩波文庫、1951-54）
- 『ローマ帝国衰亡史 1-9/ギボン著/中野好夫、朱牟田夏雄訳』（筑摩書房、1976-92）
- ‘Dio’s Roman History/Cassius Dio, With an English translation by Eanest Cary ; on the basis of the version of Baldion Foster’ London , Willam Heidenman 1924 [937-C345d](#)
- ‘Die Reliefs der Trajanssäle, Conrad Cichorius’ Berlin 1866,1900
- ‘Cichorius Plate of Trajanssäle’ [【Wikimedia Commons】](#)
- ‘La Colonna di Marco Aurelio Illustrata a cura del comunedì, C.Capriano [et al.]’Rome L’Erma di Bretshneider 1955
- ‘Roman Bridges, Colin O’Connor’ Cambridge University Press 1993
- ‘La Colonna di Marco Aurelio—The Column of Marcus Aurelius, Coarelli Pillipo’ Paterson H. 2008
- ‘The Roman Army : A Social & Institutional History, Pat Southern’ Oxford university Press 2006
- ‘Representations War in Ancient Rome in both visual imagery and literary accounts, Edited by Sheila Dillton and Katherine E. Welch’ Cambridge University Press 2006
- ‘Hate and War : The Column of Marcus Aurerius, Iain Ferris’ The history Press Ltd, 2009
- ‘ [【livius.org/mo-mt/mogontiacum/mogontiacum.html】](#) ’
- ‘Handbook to life in Ancient Rome、Lesley Adkins, Roy Adkins’Oxford University Press, 1994

(4) 北アメリカの浮橋

'Pile-Pontoon Railroad Bridge, Wisconsin Historical Society' [www.wisconsinhistory.org/whi]

'American inland waterways, their relations to railway transportation and to the national welfare, their creation, and restoration and maintenance' by Herbert Quick, G.P.Putman's Son.1909

'The canal and the railway : Canals & their economic relation to transportation, by L. M. Haupt, Guggenheimer, weil, 1890' NDL109-189

'The American Railway : its Construction, Development, Management and Appliance, by Thomas Cooley and Thomas Clark etc., New York, C. Scribner, 1897' NDL133-6